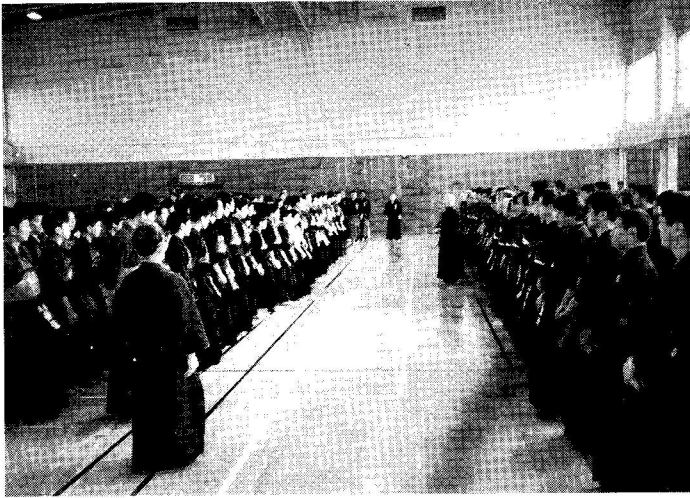


# 徳島の剣道

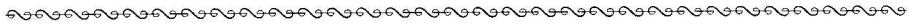
第 13 号



徳島県剣道連盟



平成9年1月5日  
剣道連盟新年稽古始め  
B & G 体育館にて



平成9年3月2日  
剣道連盟総会 眉山会館にて



決意



剣連会長 遠藤 一美

この度、皆様方の温かい御支持を頂き、剣道連盟総会において、徳島県剣道連盟会長の重責を拝命することとなりました。身に余る光栄であります。今後は、堀江前会長をはじめ先輩各位の御指導を受けながら、徳島県剣道連盟の発展に向け、一生懸命尽くしてまいります。

現在の少子化社会の到来により、徐々に剣道界にも剣道人口の減少の波が押し寄せています。このような時代の流れに対して、青少年の健全育成と体力の向上を計る上でも、剣道の修練のよさを広く周知させていく必要があります。会員の皆様、少年剣道教室の御父兄の方々には、剣道を始める子供たちを増やす宣伝を身近かな人々へお願いしたいと思います。また、指導者自身も子供の心をとらえる努力と工夫が必要であり、御父兄から信頼される

指導者でなくてはなりません。そのためにも、日々の剣道の修練を通して、子供たちとともに人間として成長し、社会的に評価される必要があります。

徳島県剣道連盟といたしましても、剣道人口を増加させることと指導者の方々への啓発の場を提供するための施策を充実・工夫することが大きな課題であります。この課題を克服し、連盟の発展のためには、会員皆様の真心からの御協力と忌憚のない御意見が不可欠です。皆様から連盟へのさらなる御鞭撻をお願い申し上げます。私の決意とさせていただきます。

最後に、会員の皆様、また各少年剣道教室の益々の御発展を心よりお祈りいたします。

# 『徳島の剣道 第十二号』目次

巻頭言	遠藤 一美	1
顕彰一覽		4
打込み台	木村 幸平	5
特別寄稿		
徳島と祖父多吉郎	秋山 英武	7
先生を偲ぶ		
山田富康先生を偲んで	寺西 慶裕	10
剣道教士六段稲木紀一先生を偲ぶ	西野 四郎	12
思いでの一枚	堀江 幸夫	14
全国講習会報告		
第三十四回西日本中堅剣士講習会		
(柳生)に参加して	木原 資裕	16
西日本中央講習会	長久保武彦	20
第十七回女子剣道講習会に参加して	長谷川陽子	21
徳島の剣道史		
寛政元年(一七八九)幕府の武芸調査に対する		
蜂須賀藩の報告書(剣術)について	坂本 裕二	22
神道無念流、初巻切紙	西岡 侃	32

## 支部だより

刑務所支部	中村 稔裕	35
徳島支部	馬場 力	36
勝浦支部	立岩 勝己	37
羽ノ浦中学校の朝稽古について	株木 芳夫	38
各種大会に参加して		
京都大会に参加して	前田 健志	39
全国スポーツ少年団剣道交流大会	住友 久夫	40
全日本都道府県対抗剣道優勝大会	白木 崇	42
四国四県剣道大会	高田 豊	43
西日本勤労者大会	吉田 博文	46
全国警察剣道大会(個人・団体を通して)	近藤 亘	47
全国家庭婦人剣道大会	榎本 福恵	50
四国矯正官大会	北村 仁志	51
全国警察防犯大会	中山 繁輝	52
高校四国選手権大会優勝	木田 敦彦	54
インターハイ3位	賀川 由美	55
全国教職員剣道大会	福多 雅英	56
全国少年錬成大会	谷口 順子	58
中学県総体・四国大会	川尻 仁和	59
	小柏 祐三	60
	栗本 美香	60

全日本女子剣道選手権大会	坪井さくら	61
全国郵政大会に連続優勝	木下 文江	62
全日本居合道大会	平尾 勝美	63
全日本剣道選手権大会	吉田 茂生	64
中倉旗大会	玉田 晋作	65
全日本高齢者武道大会	三木 只雄	66
ネンリンピック	遠藤 一美	67
高齢者大会報告	西野 四郎	68
大会 所感		
相生町でのNHKジュニアスポーツ教室	湯城 豊勝	71
随 想		
雑感二つ	大澤 孝彰	73
柳生神蔭流仁の巻	高下 正義	74
剣道で学べた負けん気人生	新居 猛	76
諸手の剣で歩む道	来代 真治	78
剣道家に多い障害とその予防	高島 弘和	80
刀について	高橋 憲司	83
段位合格者		
七段に合格して	鈴木 伸一	86
	西岡 金若	87
	山岸 章彦	88

六段に合格して	糸田川美千男	89
平成八年度 称号・段位合格者一覧	熊沢 信行	90
がんばろう徳島	加林 敏央	91
〈女子部〉	西岡 侃	93
国体女子の部開設と展望		99
平成八年度 戦いの跡	手塚十三子	100
徳島新聞にみる戦いの跡		119
平成九年度 昇段審査学科問題・解答例		130
平成八年度 徳島県剣道連盟役員一覧表		148
徳島県剣道連盟事務分掌表		151
平成九年度 徳島県剣道連盟行事予定表		153
平成九年度 段級審査実施計画表		155
徳島県剣道連盟審査資格・審査料等		156
編集後記		
〈さし絵〉		
	村嶋 恒徳	

## 平成八年度 顕彰一覽

### 剣道有功賞（全日本剣道連盟）

○ 中川 虎 雄（大正三年十月九日生れ）



三十七年間にわたり、県下の公立学校に勤務する。小学校校長として八年、中学校校長として八年、その任にあたる。また、中学校体育連盟剣道専門部長、徳島県学校剣道連盟理事長、徳島県剣道連盟副会長として、戦後剣道の発展伸長に尽力し、現在も地域少年剣道指導に日夜努力している。その功績は顕著であり、自ら率先修行する姿は、会員の範たりうる。

### 叙 勲（勲五等瑞宝章）

○ 山 脇 隆 志（大正十三年一月十九日生れ）

中学校教員を経て、郵便局長在任中、自宅に剣道場「竹友館」を設立、自らの剣道修行とともに後輩の育成にあたる。昭和四十三年より昭和五十三年の十二年間は上那賀町長として町政の責任者として、町の発展に尽力する。また、徳島県剣道連盟においても、丹生谷支部長、剣道監事等の要職を歴任し、剣道発展に多大な貢献をしている。

### 防犯協会表彰（徳島県）

○ 坂 本 裕 二（市場町）

○ 木 村 幸 平（脇町）

この度、防犯協会表彰を受けられました木村幸平先生より以下のような手記を寄稿していただきました。

# 打込み台

美馬東部支部 木村 幸平



今春、徳島県防犯協会長・徳島県警察本部長より、防犯協力者として感謝状をいただき、この受賞者として本誌に原稿を、とのご連絡を頂きました。本当に身に余る光

栄であるとお礼を申し上げます。ところで、私がこのような名誉に値することが果たして出来ているのだろうか、只、面映ゆい気持ち一杯で寸時頭の整理もつきませんが、せめて古希を過ぎた今もほとんど毎日竹刀を取り続ける経緯と、剣道の衰退等について述べてみたいと思います。

私が竹刀を持ったのは大東亜戦争の真っ只中で、中学校には武道という正課の時間があり、私は剣道を選び同時に剣道部員となり、須見善富先生に御指導を頂きました。いずれ戦場に行かねばならぬ身の私達にとっては、練習が激しければ激しいほど、希望と憧れへと引き込まれ、苦しみが楽しみへと変わって行ったように思います。このような希望を抱いて楽しく学んでいた剣道も、身体の不調を来して中断しているうちに、まもなく現役兵として中部第八三部隊に入営し、まもなく戦場へと出発、いよいよ銃や剣によって生きる世界にと胸をはずませていましたが、着いた所は中国の上海から南京方面等で後備部隊に配属され、幸いに剣も振

らず銃を発射することもありませんでした。ある日、私達の中隊に学校も剣道も大先輩である滝下勝氏が加わっていることが分かり、それから二人は敵しい軍隊生活の中でも年功序列に関係なく、兄弟のような付き合いをし、そして一緒に復員しましたが、その後はそれぞれの道を歩み、町内に居ながらも生活の重荷で逢えることさえまれでした。

こんな時代も何時しか流れ、倅に嫁を迎えたところ、偶然にも同氏に大変可愛がられていた愛弟子であったことから、結婚後、彼が道場に通り始めた直後、突然私を思い出し、無理矢理に引き出され備え付けの防具を着けさせられ、四十年目に若い人に向わされました。その時息切れが少し早い、信じられない程よく竹刀が振れたことを不思議に思いました。やはり「可愛い子には旅をさせ」とか、幼い時の仕込は大切なことを身をもって体験しました。

以来同氏とともに道場に通り始め、彼の死後も方々の少年剣道教室で楽しませて頂いておりましたが、八年前中学校へ動く打ち込み台にと売り込みに行つて以来、ほとんど毎日打ち込み台役と安全管理の協力者となり、そして、沢山の子供達の友達となって、剣道ならではの幸福な余生を送っております。

私は元県職員でしたが、四十歳を過ぎるや退職し、小さな会社を設立、私が六十五歳、長男が三十八歳で、幹部の社員達も二十歳半ば、共に燃え盛る時期となったので、一日も早くこの力を社会に出したかったので、業界に関する四国地区協会・県内各種協

会の役員等も総て辞退して後輩に、それから会社は全面伴に任せて、現在はクレイ射撃・書道ならぬお習字・狩猟・日曜大工そして剣道と多くの趣味を持って、「馬上に青年すぎ時平にして白髪多し残馱天の許す所樂しまずんば復如何せん」と詠んだ伊達政宗になり切って、いつも口ずさみながら楽しく余生を送る隠居です。

私は元来、花なれば惜しまれても少々色のあるうちに散りたい。色あせて花びらもしぼみ、蓑虫と間違われるようになって散ることとは、たとえ前進後退の打ち込み台で毎日を送る不甲斐無い男にも決して出来ない。あれから七年経った今、新しい感覚の会社経営を振り向く必要もなく、政宗になりきって多くの趣味に追われながら、前進後退の打ち込み台となり感謝しながら、毎日を楽しんでいます。

ところで、最近中学校で剣道部に入る子供が減っています。よく調べて見れば、防具等に一時的に多額の費用がかかる事も一因であったのです。そこで担任の先生と相談し、部員の大体の人数の二年分を寄付させて貰った結果、安定した人員が確保出来て、心強く思っております。しかしながら又一つ大きな難問題が待っています。子供達が高等学校に進み剣道を希望しても、県西では非常に難しく、幼少時から期待をもって道場に送迎し、励まして下さったご父兄の方々をも裏切るような、又ご指導いただいた諸先生方の汗の結晶で作られながら、見捨てられた大きな剣道の布石にさえ、誰も目を向けないように思えるし、又道を開くための運動があったとも私は聞かない。これを生かすことはもうすでに

一朝一夕には出来ないことと思われませんが、若い先生方にこの期をお借りしてお願いしたいことは、竹刀も夢も途中で捨てなければならぬ多くの後輩達のため、行政・マスコミ等と連携を充分に持ち、大衆の目も引くような新しい剣道の創造のため、勇気と決断を持って立ち上がっていただくことです。そして、私達の住む脇町にも恩師須見先生の全盛時代、又滝下・長江・柴田等諸先輩の時代のような、剣道の町が再現出来るなら如何なる犠牲もいとわれないと思う一人です。残り少ない余命を子供達に捧げ、剣の心が真に実社会で活躍してくれることを祈りながら、今日も又動く打ち込み台にと出掛けます。



## 特別寄稿

### 徳島と祖父多吉郎

和歌山県剣道連盟理事長

剣道範士八段 秋山英武



剣道範士秋山多吉郎は、弘化二年（一八四五年）徳島城下の古物町（現在の東新町一丁目あたり）で、桃井直則の長男として出生し、幼年期は徳島で育っています。十才の時、阿波藩士津山勝馬によって剣術の基本を習い、十四才のころ水戸浪上島男也に師事して北辰一刀流を修業しました。

二十才を迎えた多吉郎は、大坂に移って鏡心明智流の高弟であった阪部大作について修業に入りますが、間もなく阪部の勧めによって慶応元年江戸へ上がり、江戸南八丁堀大富町アサリ河岸の「鏡心明智流士学館道場」に入門しています。桃井春蔵直正は当時四十一才。剣技充実しての稽古に、多吉郎は目に見えて腕をあげていったと聞いています。その後、直正が男谷精一郎などと講武所剣術師範十四名の中に加えられた関係から、多吉郎は士学館道場を任せられて、実質的な師範代理として、道場に立っていたよう



若き日の多吉郎

です。また、将軍家茂が大坂城に進駐した時には、桃井直正と共に大坂へ西下し、大坂玉造に移転した講武所へも直正に同行した記録も残されています。

多吉郎は久し振りに江戸から帰り、母の居住する徳島に近くなった事を心から喜んでに違いありません。桃井直正も桃井家に養子

に入った宇和島出身の人。兩人共に郷里四国に対する思慕に大きいものがあつたようです。

廢藩置県の前、多吉郎は一時徳島に帰国して、徳島藩の軍事係、劍術助教授に就いていましたが、明治四年七月の廢藩置県と同時に、再び徳島を後にしました。大阪北区鈴鹿町（現在の天神橋筋三丁目）の上学館道場へ移っています。

のち大阪西区南堀江上通二丁目で藍玉の卸商をしていた、徳島出身の秋山庄兵衛の養子に入り、秋山姓になったわけです。その後、多吉郎の長男として出生した私の父繁太郎が生来病弱であったのを案じた多吉郎は、風光明媚な紀州紀ノ川に沿った橋本（現橋本市）に独立させました。それが和歌山県での生活の始まりでした。桃井春蔵の墓を守り、大阪堺に定住した多吉郎の許へは、繁太郎（父）も足繁く訪ね、また多吉郎も和歌山への往来が多くありました。

当時、大日本武徳会和歌山支部に、権力を誇っていた剣道の先生が居られました。県立伊都中学校に専任の剣道教師を採用するについて、その有名な先生は、自分の弟子を採用するよう県に対して圧力をかけていたようです。「独占を許してはいけない。」として、近江佐久郎先生（徳島）の長男近江勇先生の就任について、多吉郎は動き、その独占を戒めた話があります。

後年、伊都中学校に入学した私は、近江勇先生に剣道を習うこととなるわけです。当時、県立海草中学校（現向陽高校）には、武道専門学校を出た、広島出身の中村宗平と言う剣道教師が居ま

した。この先生も、前述の近江勇先生と同様に、剣技に優れていて、当時県内では此の兩者の右に出る者はなかった様です。

この中村先生に対しても例外ではなく、前述の「有名な先生」は氣に入らず、長い間、この学校の生徒は昇段審査も受けられない時代が続きました。中村先生も和歌山では稽古が出来ず、大阪へ稽古に出かけていた様です。中村先生の訴えにより、多吉郎は高野佐三郎や小川金之助、齋村五郎などに協力を要請して、この改善のため努力しました。その後これらの問題も円満に解決できたようです。

前述の近江勇先生に力を貸して、着任三年後には、県下一を誇る剣道場「錬成館」が竣工しました。私も父繁太郎に連れられ列したことを記憶しています。



晩年の多吉郎

近江勇先生は明治二十七年九月二十五日徳島生れ、伊都中学校への着任は、大正十二年で、大正十五年十一月には「錬成館道場」を完成させた立派な実行力のあった先生です。昭和十三年六月に退任して徳島へ帰られました。確か徳島市神明町とか言う、お住いであったように覚えています。私も一度お伺いしたことがあります。近江勇先生に関する以上の記述については、現伊都高校教頭中村先生の調査協力がありました。

さて祖父多吉郎は九十才で他界しましたが、子供の頃、父に連れられて訪ねて行った私に、いつも笑顔で迎えて呉れたのを思い出します。その当時、高田直人先生、志賀矩先生が出入りしておられました。祖父が一何を英武にやろうかなあ。」と言って尋ね



大阪市阿倍野斎場内にある多吉郎の墓

てくれたので、直ぐさま「刀を欲しい。」と言いました。「お前には刀は未だ早い。」と言って駄菓子をもらったことを覚えていいます。現在私の家にある「備前国長船住景光」と「備前国住長船清光作」一文拾七年八月吉日の太刀は祖父の愛刀の二振です。鏡心明智流七学館の定紋のついた朱胴も私が保存しています。

故人小沢丘範士九段の実父に当たる小沢愛次郎先生は、かつて国会議員として、当時中等学校に剣道を正科として導入するのに大きく貢献されたことは、今もって有名な話です。この小沢愛次郎先生の追憶として、故人剣道範士九段小川忠太郎先生が書いた本の中に、「先生（小沢愛次郎先生）曰く、『僕が今日までに出逢った剣道家の中で、真に一流と思う人は世間的には余り有名ではないが、晩年山岡鐵舟先生に随身した久留米の松崎浪四郎先生。山岡先生の高弟、香川の香川善次郎先生。大阪の秋山多吉郎先生の三名である。』と言われた。この人物評によっても小沢先生の見識人物及び剣道を知ることが出来る。」と書いておられます。

いつの時代でも実力や人格が伴わないのに、人より上に立ちたい。自分だけが良ければよい。と言った人が多い。今この社会の中にあって、自分の処世の基本訓として、祖父多吉郎の足跡を手本としたいと心がけています。

故郷徳島を、こよなく愛し、人世を筋を通して清潔に生きた祖父の生涯の歴史は、今の私にとって、残して呉れた教訓であり、宝物でもあると思っています。

# 先生を偲ぶ



ありし日の山田富康先生

## 山田富康先生を偲ぶ

鳴門支部 寺西慶裕

平成八年二月十二日、私達が敬愛する山田富康先生御逝去の連絡を受けました。(享年七十八才)生前、先生が鳴門に残された功績を偲び、心より、哀悼の意をささげる次第であります。

山田富康先生は大正六年二月二十四日生まれて、終戦後、一時

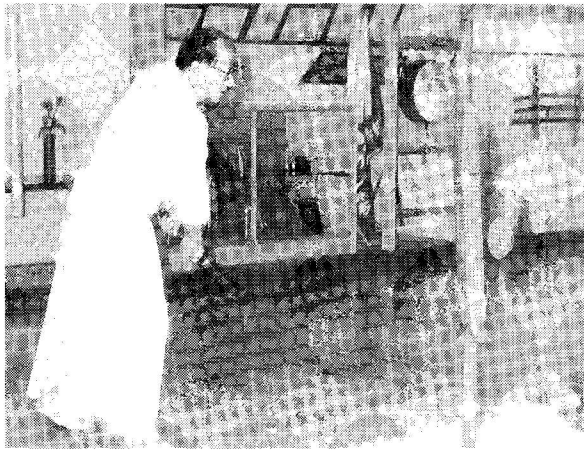
期新聞記者もされていました。その後、現住所でもありました鳴門市撫養町南浜字東浜において山田カメラ店を経営され、(株)ココカラカー四国取締役としても手腕を振るわれていました。

剣道は、昭和三年の小学生の頃、尾形郷一先生に手ほどきを受けておられます。翌昭和四年、撫養中学校入学し、さらに剣道部入部。山下治郎、福知改一、山田武雄の各先生方に指導を受けておられます。

昭和十七年、立命館大法学部卒業。卒業後は川崎重工業本社に入社。同年応召。渡満軍務に服す。昭和二十年十二月、陸軍主計少尉で復員。その間、軍隊でも剣道は継続されてきました。

昭和二十七年六月、鳴門剣道倶楽部結成時より堀江辛夫先生に指導を受けておられます。

この時期は環境が整わず、第一中学の体育館、鳴門署の饗宴会場など転々と稽古場所を借り、都合のつかぬときは野外で子供達を教える等、思い出



試し切りをされる山田先生  
(落ちていく巻わらの切り口注目されたし)

多き苦難の時期でありました。

その後、先生は昭和四十年教士号取得、同四十六年に七段と一貫して剣道修練に励まれました。また献身的に後輩の指導にあたり、

徳島県剣道連盟鳴門支部長、鳴門市剣道協会長、徳島県剣道連盟審議員、徳島県高齢剣友会副会長等歴任され、

剣道発展に多大な御尽力をされました。中でも、昭和五十五年に完成しました鳴門市立の剣道場である光武館設立には、並々ならぬ御努力をされ、光武館設立は山田先生の御功績の賜と言っても過言ではないと思えます。

また、私個人としまして、京都へ大会等で御一緒させていただいた時には、先生は京都で学生時代を過ごされた関係で京都の詳細をよく御存知で、様々なよいところへ御案内いただきました。身近かに接しながら、先生の度量の大きさを感じました。ですから、これまでに先生を批判する人を見たことがありませんし、憎



歓談する山田先生(左)と筆者

めない性格の持ち主でした。

さらに、地元鳴門少年教室の主任教授として子供達の指導に熱心に対処され、父兄はもとより子供達にも喜ばれ慕われておられました。次世代に対する期待を抱きつつ、自らの人間形成の道に精進されておられた姿は、私達の手本とすべきものであります。

この事を思うにつけ、私達は山田先生方の名を汚さぬ様改めて修行に専念すべきであると決意を新たにしています。

山田富康先生の御冥福を祈りし、偲ぶ言葉といたします。



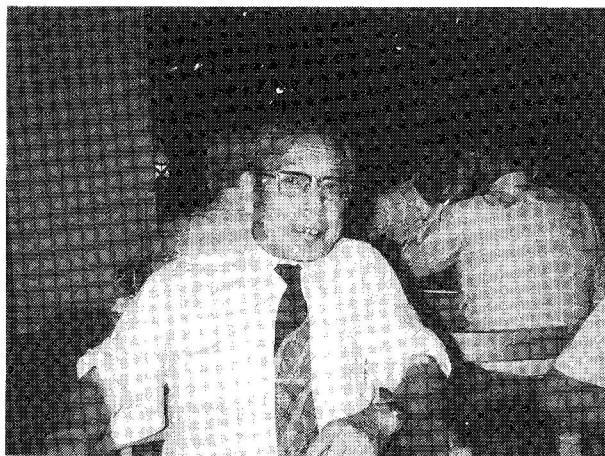
## 剣道教士六段稲木紀一先生を偲ぶ

徳島県高齡剣友会理事長 西野 四郎

先生は大正六年二月十一日、期しくも紀元節の佳き日に徳島市川内町鶴島に生を受く。

川内南尋常小学校を経て、昭和五年四月、徳島工業学校建築科に入学と同時に剣道を志し、工業学校の先輩であり、義揚館々長浜谷晋先生に師事す。工業学校同期生で同じ義揚館の門下生に小田新六郎先生のご活躍がある。

爾来七十年と言う素晴らしい剣道歴があり、この間昭和三十五年八月剣道六段合格、昭和三十八年十一月剣道教士の称号が授与され、四十二年四月剣道連盟理事に続いて四十六年には常任理事となり、推されて、剣連徳島支部長に、そして六十年監事と剣道連盟の要職を歴任され、名実共に



ありし日の稲木先生

徳島剣道界の重鎮である。

特に先生は早くから少年剣道の大切さをモットーに剣道を通して、青少年の健全育成に心掛けられた。温厚にして円満な人柄、又大変面倒見のよい立派な先生として周囲の尊敬の的でした。

剣連の常任理事に就任された、昭和四十六年今は亡き旧武道館館長岸憲四郎先生と三木只雄範士と相計り、正しい剣道の技術の習得、心身共に健全な人間を育成することを目的に先生の提唱により徳島少年剣道教室が開設となった。

言うまでもなく稲木先生が主任師範として企画、運営全般に可なり誠心誠意少年の健全育成に、全身全霊を斯道に注がれた立派な指導者でした。因みに徳島少年剣道教室の師範として、ご指導頂いた先生方に、創設者の故岸憲四郎・三木只雄両先生を始め、剣連会長の堀江幸夫・中川虎雄・熊本淳一の諸先生と徳少OB一期生の生田浩章五段がいる。

現在は石井克太郎・勝浦守・松村克隆の先生方と小職西野が、先生の遺業である徳島少年剣道教室をお守りする責任の重みを痛感しております。

次に一九七七年、昭和五十二年に徳島眉山ライオンズと愛知県江南ライオンズクラブが、蜂須賀家政公のとりもつ縁で一波濤を越えてより深き友愛」をスローガンに姉妹提携が結ばれるや、先生は少年剣士の親善交流試合が友愛につながる大切な橋渡しになると説得され、両市交互訪問の実現を見るに至ったと聞く。

図らずも今年は二十年の節目に当たり、先生が大変に力をそそ

がれて来られた、二十周年記念少年剣道大会が八月二十五日に江南武道館で盛大に開催されましたが、その時は既に病魔におそわれ七月に徳島中央病院に入院され参加することが出来ず、先生にとって慚愧にたえず非常に悔しい最後の剣道大会となって仕舞いました。

八月始め頃、石井・勝浦両先生とお見舞に参りました時は頗るお元気で色々と、専ら剣道話して楽しい一時を過ごされましたが、江南から帰った時は、病状も次第と悪化の道を辿られ、面会も思うように参らないまま僅か二か月余りの闘病生活で、医師やご家族の手厚い看護の甲斐もなく、十月三日遂に永遠の旅路へと旅立たれました。返す返す誠に痛恨の極みであります。(享年七十九才)

先生は剣道のみならず、各方面に幅広く活躍されてきました関係で、訃報を知り、大勢の弔問客が先生の死を悼み悲しみ、先生の遺徳を偲びながら最後の別れ、本当に淋しい限りでした。

次に先生の人生で人の為に尽くされた大きなお仕事の一つが保護司です。円満にして慈愛心の厚い人柄をかわれて、昭和三十九年十月に保護司を拝命、平成四年九月退任されるまで実に二十八年間、ご尽力をされた業績が認められ、その功績が称えられ次のように二回に亘り受賞されました。

昭和六十年九月 法務大臣表彰

平成 三年三月 藍綬褒章 以上

合 掌



# 思い出の一枚

今回より、「思い出の一枚」というコーナーを設け、剣道・居合道に関する思い出の写真コメントをいただきながら、掲載していくこととなりました。

第一号として、剣道名誉会長の堀江幸夫先生より、「第一回徳島県下少年防犯剣道大会の優勝記念写真」のご提供と以下のコメントをいただきました。

日時 昭和二十九年五月三十日

場所 県警察学校

主催 県防犯連合会・県警察本部

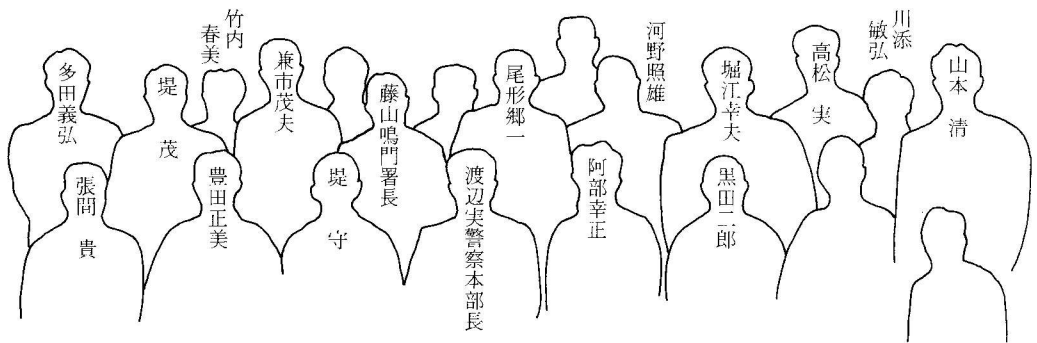
記念すべき第一回の優勝は鳴門チームでした。その時のプログラムは見つかりませんが、少年と言っても、写真を見てお感じのように、その当時は十八才以下であれば、出場資格がありました。警察署区域の試合であり、参加チームは七チームでした。（私も当時三十四才の黒髪豊かな青年でした。）

## 優勝戦

	先	次	中	副	大
名	近	新	福	松	一
西	藤	井	永	村	宮
1				Ⓣ Ⓣ	ⓧ
4	Ⓣ Ⓣ	Ⓣ Ⓣ	Ⓣ ⓧ	ⓧ	ⓧ ⓧ
鳴門	阿部	黒田	張間	豊田	淀



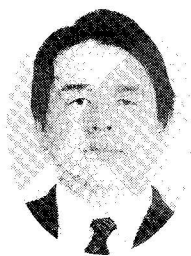
第1回県下少年防犯剣道大会で優勝した鳴門クラブの選手たち



# 全国講習会報告

## 第三十四回西日本中堅剣士講習会（柳生）に参加して

鳴門支部 木原資裕



平成八年六月十二日午後二時すぎに、奈良市中央武道館に西日本各県から参加者三十名が集まる。全日本選手権者の大阪の石田健一さんや熊本の右田幸次郎さんの顔も見える。中央武道館から約一時間、バスに乗り、人里離れた柳生正木坂道場に到着する。柳生に着いて最初に驚いたことは、渡された名簿の二班の私のところに副班長の印がついていた。よく見ると、最年長の者が班長、最年少の者が副班長、という構成になっている。班長は愛媛の桜木先生で、私が愛媛にいたころから大変お世話になっている先生である。しかし、何より、心強かったのは、講師として、徳島から大澤孝彰先生が招聘されていることであつた。

初日の開講式の席上、武安専務理事より、「この講習会は以前、中堅指導者講習会と言っていたが、『指導者』を『剣士』に変え、

中堅剣士講習会となったのは、指導者としてはもちろん剣士としての資質をさらに向上してもらいたいためである。また、剣道の質のレベルを維持したいとのねらいがある。しっかり講習を受けてもらいたい。」との気合が入る挨拶を受ける。開講式が十分程度で終わり、さっそく稽古が始まる。切り返し、掛稽古、地稽古、元立ちがすべて、八段・九段の気の抜けない厳しい稽古である。

日程表を見ていただければ、お分かりのように朝六時起床から、夕方五時まで剣道三昧の生活である。宿泊は道場、食事は道場から歩いて十五分下った久保田亭で用意されている。

二日目。小林三留先生の日本剣道形。一初段には初段の形、七段には七段の形のレベルがあってもよいが、形の指導としていかに現実味のある形ができるかが問題である。」との指導をいただく。自分なりに剣道形に自信をもつ。

道場中央には『太阿円機』の額が掲げられている。その意味を住職に尋ねたところ、大要次のようなことであつた。

「太阿とは沢庵の書いた『太阿記』の中に出てくる太阿であり、天下に比類すべきものがない名剣という意味です。しかも太阿の名剣は、他の人の手許にあるのではなくて、人間は誰でもちゃんと持っていてどれも欠けることなく、そっくりあるのです。それを円機として自ら鍛え、修行する場がここにあるということでしょう。」

自分の剣道を太阿の名剣にできる機をつかむことができるか、ど

# 日 程 表

	6月12日(水)	6月13日(木)	6月14日(金)	6月15日(土)	6月16日(日)	連絡事項
起床	6:00 6:30					
	7:00	座 禅	座 禅	座 禅	座 禅	
	8:00	稽 古	稽 古	稽 古	稽 古	
	9:00 9:30	朝 食	朝 食	朝 食	朝 食	
	11:30 12:00	日本剣道形師 小林 講師 全 講 師	指 導 法 師 大久保 講師 全 講 師	審 判 技 師 実 技 師 全 講 師	スポーツ医学 松尾 講師 質 疑 応 答	
	13:30	昼 食	昼 食	昼 食	閉 講 式	
	14:30 15:00	日本剣道形師 小林 講師 全 講 師	指 導 法 師 大久保 講師 全 講 師  講 話 石原副会長	審 判 技 師 実 技 師 全 講 師		
	16:00 16:15 16:30	事務連絡 開 講 式 稽 古	稽 古	稽 古	稽 古	
	17:00	入 浴 夕 食	入 浴 夕 食	入 浴 夕 食	入 浴 夕 食	
消灯	19:30 22:00					

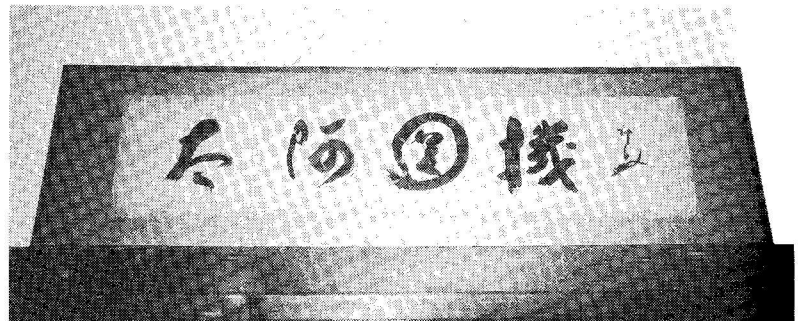
◎講師の都合により変更の場合もあります。

財団法人 全日本剣道連盟

この問題について

中でも最も苦しいのは三日目。朝稽古を終え、午前講習の指導法は、大久保和政先生が指導される内容の受講生全員が生徒となって実践する。四人一組で、面打ち、小手打ち、胴打ち、小手面打ち……打ち込み稽古、掛かり稽古と午前午後にわたって続く。やっとの思いで、石原忠美先生の講話の時間となる。一剣道の「呼吸法」について、先生の体験を交えてお話しをいただき、「努力しているうちはダメ」とのきびしい指導をいただいた。その努力している段階を越えて、生活化したレベルでないと通じないとのことである。また、予定表にはなかったが、西川源内先生よりも「自分で、自分を、自分する」「その時、その時を一杯、一杯生きる」ことについて、剣と禅の修行の境地より、講話をいただき、感銘を受けた。

四日目。原緑先生より、審判実技についての講義。昼休みに柳生宗矩ら歴代の柳生の剣士の墓を橋本住職の説明を受けつつ、参拝した。住職より、講習生一人一人に直筆の色紙と記念の手ぬぐ



いをいただいた。午後は講習生による東西対抗試合とその審判実習。試合も八段審査を間近かに控えられて先生方の気合の入った立合いが見られ、見習うべき点が多くあった。その夜は、講習会の打ち上げ会が夕食をかねて行なわれ、講師の先生方を交えて行なわれた。明日半日の講習を残してはいるが、ここまで、鍛えられた講習会への思いを語りながらのビールがおいしい。第三十四回の講習会にちなんで、このメンバーでの会を「三四会」（さんしかい）と名づけ、毎年五月の京都大会の折りに会を開こうということが全会一致で決定された。

五日目。いよいよ最終日である。座禅にもなれ、自分なりに座りの感覚が心地よく、次の稽古に意欲がわく。身体的には疲労があるものの、講習生の気合の稽古に道場全体の盛り上がりを感じる。朝食後、ス

ポーツ医学の見地より、「傷害、疾病の観察と対処」について松尾澄正先生より講義を受ける。閉講式を迎え、講師の先生よりねぎらいの言葉と終了証をいた



橋本住職よりいただいた色紙

だいた時は、無事にこの柳生の講習会を終えることができた安堵感と数多くのことを学べた喜びで感激であった。

へこれから柳生講習参加される方へのアドバイス

四泊五日で内容的にもきびしいが、行ってよかったと確信を持って言える講習会である。八段・九段の全国的に著名で実力のある先生に五日間も指導が受けることができ、しかも、交通費・食事代（酒代は自費）は全剣連負担。講習、またその後の交流を通して生涯の剣友ができる。

梅雨時期であるので、剣道着は少なくとも三着は必要。また、小手も二組は持参したほうがよい。日頃から、掛かり稽古を十分されている人は別だが、筋肉痛対策としての医薬品（塗薬・飲み薬）の準備。山の中の道場で寝るので、防虫スプレーもあった方がよい。（蚊取り線香は事務局で用意されているが、数は少ない）。



## 西日本中央講習会

審議員 長久保 武彦



平成八年四月十一日より三日間、姫路市立体育館を会場に開催された本講習会へ、北條憲治先生と参加しました。

今回が三十一回目のこの講習は、規約改正の伝達等、中央の意向を地方へ、実技と共に伝達することが日的で、特に今回は昨年改正された試合、審判規則を、一年間実施した上での留意点等の周知と、各県中堅指導者の技能向上を目的とし、審判法、指導法、日本剣道形の実習が行われました。受講生の中には、十三名の八段も参加しており、少々気後れがしましたが、三日間、なんとかがんばって、終了証を頂いてまいりました。

審判法では、規則に精通し、改正された要点を熟知すること。審判技術の向上に努めること。有効打突を見誤らないようにすること。反則事項を厳格にとること。を、重点的に指導されました。我々が各種大会に臨む際、公正無私を心がけ、有効打突を見落とすこと無く、正しい所作で判定出来るよう、日頃の稽古を行わなければならぬと思います。

指導法では、指導者の人間性が最も大切で、立派な指導者を養成すれば剣道は良く成る、『正師を得ざれば、学ばざるがごとし』

の金言を示され、我々指導者の猛省と努力を促されました。近年、少年剣道人口の減少が取り沙汰されており、女子剣道は増加しており、母親、将来の母親を立派に指導していくことが、剣道の将来に重要な意味を持つものと思われれます。指導対象が、幼少年から高齢者、婦女子と多様ではありますが、その特性を踏まえて指導しなければならぬと思います。また、技法については常に基本を念頭に入れ、気剣体の一致した技が出せるよう、初心に立ち帰って稽古しました。特に、切り返しを反復して行い、中でも、一呼吸で何本も可能になるよう修練することで、心肺機能が向上し、旺盛な気力を養うことが可能と思われれます。

日本剣道形については、太刀、小太刀の理合を深めると共に、指導上の意志統一を計り、各県で伝達が出来るよう、解説と実技指導を受けました。各地で講習会が行われていますが、聞く人の受け止め方の違いで、細部が変わってしまうことがありますので、充分注意しなければならぬと思います。

以上が講習会の概略ですが、派遣された我々二名の技能が向上したかどうかはともかくとして、初心に立ち返り、基本に則った剣道、剣道形を実践して行かなければならないと、想いを新たにして姫路を後にしました。

## 第十七回女子剣道講習会に参加して

小松島支部 長谷川 陽子

八月三、四日と埼玉県大宮武道館にて開催された女子剣道講習会に、手塚十三子先生と共に参加させていただきました。私にとつて、県内での講習会は何度か経験があるものの初めての経験で、何か心細く不安で心頼みは、手塚先生だけでした。

埼玉近県を始め、各地方の方々、約一四八名の女性剣士が参加し、開講式の張り詰めた空気の中に「さあ、この二日間一緒に頑張りましょうね」そんな気持ちで伝わって来るような思いでした。

高野武先生による講話に始まり、斉藤彌三郎先生の剣道形、スポーツ医学、二日目には井上義彦先生の審判法、田原弘徳先生の指導法等、そして二日間を通して行われた廻り稽古も、「遠くから参加してくれているのだから、たくさん稽古をして帰って下さい」と参加者の皆さんの心づかいをいただいて、制限時間いっぱいのお稽古が出来ました。有り難い事だと思ひ、皆さんの気持ちが嬉しくて「お世話になりました」と自然に頭の下がる思いでした。

講習会、もっと参考になった事があるのです。休憩時間等のわずかな間に交わした参加者の方々の会話の中で、家庭の事、子育ての事、仕事を抱えて等、お稽古を続ける事の難しさがやはりよく出てきます。皆、剣道が大好きで、多くの方々と竹刀を交

える事で、ごまごまな視野を広げたい、そして快い汗を流せるように努力されているようです。私自身も随分励まされ、勇気づけられました。本当に充実した二日間を過ごせたと思います。

このような機会を与えて下さった事に感謝し、いつも私を理解し協力してくれる家族に感謝し、これからも貴重な経験を無駄にせず、子供達や素晴らしい仲間と一緒に楽しく剣道を続けたいと思っております。



## 徳島の剣道史

### 寛政元年（一七八九）幕府の武芸調査に対する蜂須賀藩の報告書（剣術）について

剣道史担当理事 坂本裕二



近世中期剣術は他流試合を厳禁して、封鎖的排他的で形式主義に流れ、型剣法の弊を脱却出来ず行き詰まりを生じていた。これを打開したのが宝暦（一七五二）

寛政（一八〇〇）期台頭した直心影流、神道無念流、心形刀流、鏡新明智流などである。これら諸流はいずれも直心影流の長沼四郎左衛門国郷や、刀流の中西忠蔵子武によって完成された韜袍（しなひ）を自流に取り入れて、竹刀打ち込みを主体として稽古するようになった。

徳川吉宗引退後は、一時引きしまっていた世相も、田沼意次、意知父子が政治権力を握った頃から世は乱れ、土風は頹廢の極になったといわれているが、之等新流の勃興の基礎を醸成した時期でもあった。この時、芽を出した新流を更に大きく伸長発展させたのが松平定信の寛政の改革である。定信は江戸市中の文武師家に対し『書上』を命じ、内容のいかかわしいもの、技術の未熟な

ものに指南の禁止を命じ、『世（夜）の中にか（蚊）ほど煩きものはなし、ぶんぶ（文武）』というて、夜も寝られず、具足より利息にこまる我々は、すね当てよりも、お手当がよし』と世評に言われる程、武芸を奨励して、田沼の頃の沈滞した空気を一掃した。さらに幕府は寛政元年（一七八九）各藩に対して武芸者の氏名、流派の伝来などを調査報告するように指令した。

蜂須賀藩にはこの調査報告書の控えがある。

『武芸指南仕面々並芸方名目伝来書』（資料一）が国立資料館所蔵の蜂須賀文書の中に残っている。

#### 資料一

この報告書は、指南者本人が書いたものを、藩が審査、集録して、幕府に提出したものである。武術とは剣術、柔術、槍術、棒術、馬術、弓術、泳術、炮術、兵学の総称で、この各々について、書いた莫大なものであるが、ここでは剣術のみについて記述する。

資料二

一 関口流

私家剣術柔の儀、紀州関口柔心弥左衛門尉より、広瀬権太夫先祖一斎権太夫儀、免状印可請、指南被免、私迄代々、関口流剣術柔とも、今以打続き指南仕罷在候。

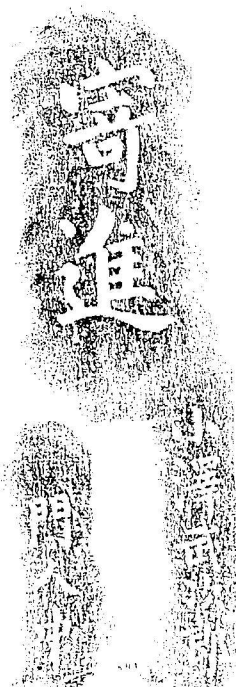
さらに判りやすく

(一) 賢蔵様、喜三太様、安之丞様  
 剣術師範二百石三代目広瀬権太夫直保

二百石初代免状印可 二代目二百石  
 紀州柔心弥左衛門尉——広瀬権太夫——広瀬弥太夫

三代目二百石  
 権太夫直保

資料二



二 六六七一八(一) 筆記を略し、係累のみ記す

新渡嶺奉行 百五十石 一条権六

八十石免状 八十石

広瀬一斎 若山新七昌重 若山仙左衛門直昌

免状指南

若山源左衛門 一条権六信精(若山仙左衛門直昌二男)

八太夫

(三) 元ノ支配役手代 木村唯右衛門

紀州柔心 広瀬一斎 若山新七 若山八太夫

(若山源左衛門幼少二付) 二百石

服部丹藏家中 沢田九郎次郎家来 印可皆伝指南

西武左衛門 西条永賀 木村唯右衛門

百五十石

(四) 片山弥左衛門手崎手代 岡文五左衛門

免状指南

若山八太夫 西武左衛門 岡文五左衛門

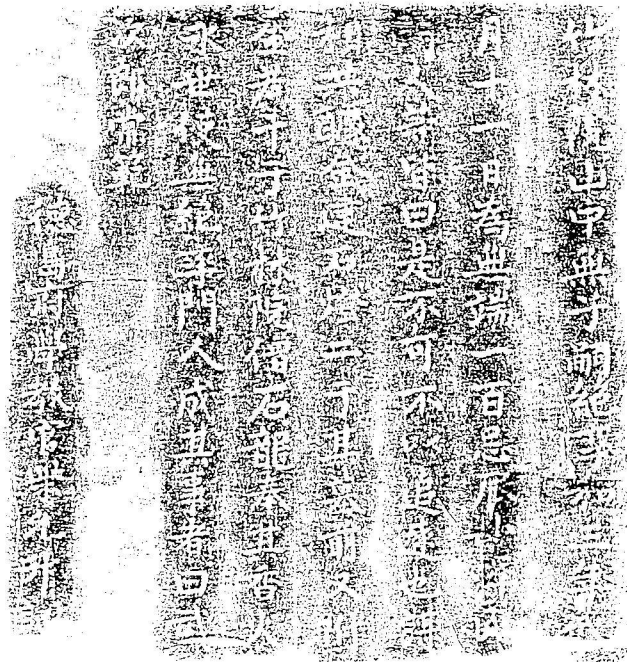
五百石

(五) 井村茂作上り組御鉄炮之者 木村勇一郎

免状指南

若山新七 西武左衛門 木村唯右衛門 木村勇一郎

二百五十石



(六) 青山元助上り組御鉄炮之者 板東左馬太 免状指南

若山紀左衛門——奈 右左衛門——板東左馬太

二百五十石

(七) 青山元助上り組御鉄炮之者 奈 右左衛門 免状指南

免状指南

若山新七——若山紀左衛門——奈 右衛門

(八) 美馬郡脇町郡付浪人 松村仲助 免状指南

免状指南

若山新七——松村吉左衛門——松村仲助

大阪住 大阪に出行して青斎の門弟になる

青斎——仲助

二 浅山一伝流

(一) 松平右近将監様家来 関万助 万助悴指南

万助悴指南

森戸三太夫——関元助——万助

(二) 古新居乙次郎

有馬中務大輔殿御家来 免許指南

津田武太夫——古新居乙次郎

(三) 大垣平馬組御鉄炮之者 日下卜左衛門

松平吉之守監様御家来 指南

高三三太夫 若北観太左衛門 日下卜左衛門

三三三三



三 三好支隊の運兵鉄炮之者 高木織之助

免許印可指南

松平右近將監様御家来 森戸三太夫——高木織之助

三 新陰流

(一) 御膳奉行 七人扶持十一石二斗 仁木由岐助

浪人 取立

柳生備前守殿直弟——木村郷右衛門——仁木由岐助

取立(江戸に出る)

柳生但馬守——仁木由岐助

(二) 広島御分一所奉行 四人扶持十石 大坂卯歎太

浪人 指南役

木村郷右衛門——大坂周之丞——大坂卯歎太

千五百石

(三) 樋口内蔵助家来 浦上市之丞

木村郷右衛門——浦上市之丞

直弟子(江戸に出る)

柳生備前守——浦上市之丞

千五百石

(四) 樋口内蔵助家来——河野権太夫 取立

浦上市之丞——河野権太夫

四 心形刀流

(一) 劍術師範 百二十石 多田三次右衛門

百五十石 取立

広岡五左衛門——多田三次右衛門

元祖 二代 直弟子

伊庭定水軒——伊庭軍兵衛——多田三次右衛門

元文四年目録

四代

伊庭八郎治——多田三次右衛門 宝曆五亥年免状

広岡五左衛門——多田三次右衛門

安永八亥年印可指南

(二) 岩川官八

免状

伊庭軍兵衛——岩川官八

皆伝指南 辛見半後

伊庭八郎治——岩川官八——岩佐富吉

住谷寿三郎

(三) 露木此太郎

百五十石 取立

広岡五左衛門——露木此太郎

江戸出行直弟子、宝曆四年目録

伊庭軍兵衛——露木此太郎 免状指南

(一) 五伯 耆流  
原土 小出宅右衛門

浪人阿波郡久千田村住

元祖片山伯耆守——片山大学——内山右膳

(二) 兼松新左衛門——小出宅右衛門——許狀指南  
原土 四宮叶治

浪人

元祖片山伯耆守——片山大学——内山右膳

四宮金右衛門——四宮叶治——許狀指南

(三) 原土 大窪新作

片山伯耆守——片山大学——内山右膳——兼松新左衛門

小出宅右衛門——大窪新作——許狀指南

六頭 軍流

六百七十八石

一 片山半兵衛組御鉄炮之者——森崎藤七

岐川源太郎組

三下宗治——森崎藤七

二 校 堀河大兵衛組御鉄炮之者——日下宗治

河波二修業之末子——寺山古物町住医師——免許

馬場 意次——北 浅三——日下宗治

(三) 阿波郡柿原村先規奉公人——瀬尾直左衛門

衣斐丹石入道——飯沼夢牛入道——飯沼太左衛門尉

堀隱岐守——石田小兵衛尉——鈴木意柳入道

松田宗岐入道——都筑伝兵衛尉——吉田慶左衛門

原土 免狀指南

佐伯友右衛門——瀬尾直左衛門

七直 指流

(一) 御作事奉行 二百石 佐々小惣治

祖 山中平内——長谷川十郎右衛門——浅野金右衛門

免許指南

荒木清太郎——穂積門太——佐々小惣治

飛脚奉行四人扶持十一石 是安惠九郎

元祖 山中平内——長谷川十郎右衛門——正木権左衛門

免許指南

伴所右衛門——奈良井嘉平治——加納文十郎——是安惠九郎

二 眞 一 流

眞藏參行勘定方三百五十石 長谷川甫十郎

親子三代

片山伯耆守 — 片山忠兵衛 — 片山柔慶

芸州 浪人 免狀二百五十石

大桑解勘由 — 長尾儀左衛門 — 長谷川新右衛門

免狀三百五十石

長谷川權八郎

相原郷右衛門粹

片山忠兵衛 — 相原郷右衛門 — 春 齋 — 長谷川權八郎

皆伝指南

長谷川甫十郎

百五十石 加藤源五兵衛

指南

長谷川權八郎 — 加藤源五兵衛

九 田 宮 流

(一) 稻田九郎兵衛組小頭 湯浅甚八

劍術指南

津田虎馬 — 湯浅甚八

(二) 樋口内藏助家来 梶浦勇左衛門

紀州浪人 居合 祖父 指南

田宮与左衛門 — 梶浦勇左衛門 — 梶浦勇左衛門

十 無 尽 流

二百五十石

(一) 江口仁左衛門手崎手代 置木彦左衛門祖父 置木覚郎

芸州浪人 阿波浪人

宮嶋六藏 — 広瀬平左衛門

指南

高橋三午 — 置木覚郎

(二) 御水主紋作弟 秀助

免狀指南

置木覚郎 秀助

(三) 蔭山彦三郎構浪人 蔭山廣輔

高嶋六藏 — 広瀬平左衛門 指南

蔭山廣輔

高橋三午

十一 南 波 流

(一) 阿波郡香々美村先規奉公人 村瀬忠藏

芸州廣島住 免狀指南

赤川武助 — 村瀬忠藏

十二 丹石流

(一) 三好郡津村鉄炮小頭 来代宇野右衛門

岡山浪人 稲田九郎兵衛御家来 昼間村住 六郎助 倅

都筑伝兵衛 前田弥六郎 垂水六郎助 信郎

指南

来代宇野右衛門

十三 天真流

原士 武岡権太左衛門家来 河端滝右衛門

原士 指南

住友治五右衛門 武岡実之治 河端滝右衛門

十四 貫心流

(一) 福島御分 所奉行 四人扶持十一石 辻平次兵衛

浪人 指南

鉄柱無端 辻理左衛門 辻平次兵衛

二 奥目付役 四人扶持七石 辻武左衛門

浪人 指南

鉄柱無端 辻理左衛門 辻武左衛門

三 奥目付役 四人扶持八石 稲井七五郎

浪人 指南

(四) 中小姓格 五人扶持十三石 山尾亀藏

祖父 指南

浪人無端 宮嶋嘉助 山尾記左衛門 山尾亀藏

(五) 喜三太様御小姓役 五人扶持十石 柏木右平

山尾記左衛門 柏木右平

(六) 富田屋敷小目付役 四人扶持八石 富永軍太夫

小沢辰之助 富永軍太夫

(七) 銀札場手代 木村裕作

浪人 御鉄炮小頭印可伝書

無端 柿原重次郎 湯浅四兵衛 新山茂一左衛門

指南

木村裕作

(八) 御目付裁判御弓之者 藤江太兵衛

芸州浪人 浪人

鉄柱 宮嶋嘉助 山尾記左衛門 小沢長作

倅 許状指南

小沢辰之助 藤江太兵衛

(九) 町同心 天野政右衛門

免状 指南

山尾左衛門 下田譽惣太 天野政右衛門

(十) 伊賀役 五人扶持十六石 小沢辰之助

小沢辰之助 江戸出府の為不在 二任三任 天野政右衛門

三 三賀郡檜淵村高取格糸田川藤助從弟 細 六郎

小沢長作 細 六郎

三 板野郡大寺村小高取格 福家為右衛門弟 福家周平

悴 免状指南

辻理左衛門 辻平次兵衛 福家周平

三 板野郡奥野村百姓 来助

免状指南

小沢辰之助 来助

四 四千石

蜂須賀駿河様家来 猪子半左衛門

印状指南

山尾伝九郎 猪子半左衛門

五 五十石

渡辺廣右衛門家来 川田盛之進

許状

小沢辰之助 川田盛之進

六 四百石

西尾重右衛門家来 阿部康左衛門

免状指南

小沢辰之助 阿部康左衛門

七 千石

蜂須賀大和様家来 山本源兵衛

小沢辰之助 山本源兵衛 許状

六 原士 七条弥藤治

丹波国浪人

鉄柱無端 玉置慶左衛門 佐藤忠右衛門

原士七条三三三

この報告書を一覽表にすると

一	二	三	四	五	六	七	八
流名	流名	流名	流名	流名	流名	流名	流名
関口流	浅山一伝流	浅山一伝重辰	新陰流	大和柳生但馬守宗藏	伊庭是水軒秀明	片山伯耆守久安	川崎鑰之助時盛
関口弥左衛門氏心	大和柳生但馬守宗藏	伊庭是水軒秀明	片山伯耆守久安	川崎鑰之助時盛	山本平内	片山伯耆守久安	関口流
九名	四名	四名	三名	三名	三名	二名	二名
指南者	姓名	姓名	姓名	姓名	姓名	姓名	姓名
廣瀬権太夫 一条権六 木村唯右衛門 岡文五左衛門 木村勇一郎 板東左馬太 宗右左衛門 松村仲助 嶋田嘉吉	岡 万助 古新居乙次郎 日下十左衛門 高木織之助	仁木由岐助 大坂卯敏太 浦上市之丞 河野権太夫 多田三次右衛門 岩川官八 露木此太郎	小出宅右衛門 四宮叶治 大窪新作	森崎藤七 日下宗治 瀬尾直左衛門	佐々小惣治 是安惠九郎	長谷川甫一郎 加藤源五兵衛	

流名	流祖	数	指南者 姓名
九 田宮流	田宮平兵衛重正	二	湯浅甚八 梶浦勇左衛門
十 無尺流	流祖不明	三	置木寛郎 蔭山廣輔
十一 南波流	南波一甫正利入道	一	村賴忠蔵
十二 丹石流	衣斐丹石入道宗誉	一	来代宇野右衛門
十三 天真流	井島巨雲為信	一	河端滝右衛門
十四 貫心流	宍戸司箭定俊	十八	辻平次兵衛 辻武左衛門 稲井七五郎 山尾亀蔵 柏木右平 富水軍大夫 木村裕作 藤江太兵衛 天野政右衛門 小沢辰之助 細六郎 福家周平 来助 猪子半左衛門 阿部康左衛門 川田盛之進 山本源兵衛 七条弥藤治

計五十六名

寛政頃、蜂須賀藩では二十余の流派の剣術が行われておったが、この報告書には十四派、指南者は五十六名だけが付け出されている。

指南者の内容を見ると藩から任命された師範は関口流廣瀬権太夫と心形刀流多田三次右衛門二名で、その他は師家より免許を受け、藩より許可を得た藩士や陪臣、原士、百姓などである。

師範以外はそれぞれ職席があるので、その方から給与を受け、藩からは無給である。但し寺子屋や塾の師匠と同様束脩（入学金）の納める謝金）や謝礼の徴収は認められていたようである。

指南者の分布状態は城下が最も多く、郡部では原士や御鉄炮の者、居住する吉野山麓が多い。那賀川筋は少ないようである。次に遠賀賀藩に属する三浦（このほか他国から来た浪人が殆どであり、他家に修業した者が三浦流を指導している）貫心流の指南者が多い

のは、丹波国の浪人鉄柱無端の抜群の力量によるものと思われる。無端は元禄十六年（一七〇三）徳島で没しているが、百年後の享和三年（一八〇三）に徳島二軒屋の竹林院で貫心流小沢武次郎（小沢辰之助の倅）森甚大夫（千十六石海上方御用）柏木右平等門人相謀り、石灯笼を建立し、百年遠忌を営み、永代供養するよう金子若干を竹林院の僧石龍に託した。と、石灯笼に刻まれている。無端がいかに貫心流発展に貢献したか、うかがうことができる。この報告書は当時の蜂須賀藩の剣術の趨勢の大綱を知ることができる貴重な資料である。

〈参考文献〉

徳島藩士譜、蜂須賀文書、徳島市史だより、日本風俗史事典、日本大百科全書、日本武道大系、日本剣道史、国史大事典



神道無念流、初巻切紙

阿南支部 西岡 侃

明治初期、私の祖父である西岡島太郎は、神陰流、伊藤一刀斎の奥儀を学び、旧大野村（現、阿南市下大野町）で私財を投資して道場を開き、村の青壯年を集め剣の道振興に力を注いでいました。また、長男周太郎の妻に、名東郡富田浦（現、徳島市富田）吉田徹郎（神道無念流、師範）長女、壽満を迎え、四男一女をもうけました。その中の四男、正一（私の父）は徳島師範学校卒業し、教育者として、東京で小学校長等を四十年勤めていました。しかし第二次大戦で家を失い、戦後郷里の阿南市下大野町へ帰り、享年九十才で寂しました。若き頃（二十八才）明治三十八年に神道無念、師範吉田徹郎より無念流初巻切紙を賜りました。私はこの巻物を何とか解読して、現在の剣道に役立てばと思ひ数年前より努力を重ねていました。幸いにO先生のご尽力と、考古学の先生方のご協力により、私達が読

めるようになりました。まだ少し不明な点もありますが、前後を読んでご利用下さい。参考になれば幸いと思ひ公開いたします。前文は、西岡家の系図より抜粋しました。

神道無念流初巻切紙

御言

一 秘名立合之節 坊合間整事

立合款より遠く

居る格に誠意款の虚實

氣候感多し樓の歌移

夏道正の時務妻女急雨の後

尚退く時然と乳を速く

多し當流の心生概疑有指撥

哉婦のふり

歌

懸念を乳世に引く心

世に遠く玉人空に

款感多し楼の歌移

以得その先誠肝要

一 残りの事

秘名立合之節 款感多し楼の歌移

夏道正の時務妻女急雨の後

尚退く時然と乳を速く

多し當流の心生概疑有指撥

哉婦のふり

哉婦のふり

神道無念流初卷切紙

稽古立合之節場合間取之事

立合敵に対するに遠間にて

居付ざる様に心を治め敵の虚実

気位を觀察し機の影移る

間へ進む時ハ如<sub>二</sub>稲妻<sub>一</sub>如<sub>二</sub>急雨<sub>一</sub>如<sub>二</sub>疾

風<sub>一</sub>退く時は躰を乱さず速に引

べし当流の心、生<sub>二</sub>狐疑<sub>一</sub>有<sub>二</sub>猶豫<sub>一</sub>

を嫌ふなり

歌に

懸合に乱れず引はひかぬ心也

空しく進む人ぞ引なり

敵を見て、たゞざる先に場取して

いつもの先を肝要とせよ

残心之事

稽古之節敵を打突其儘振

返<sub>レ</sub>、注断する事なかれ、稽古たり

こころを断つて、返<sub>レ</sub>、注断する事なかれ、稽古たり

三十五回、一、真<sub>レ</sub>、心<sub>一</sub>、引<sub>レ</sub>、敵<sub>一</sub>、心<sub>一</sub>、を

指し退く事なり、心を乱し不

覚を取しもの古今ためし

少なしとせず。心得において稽古

たりとも心を残し別るゝ事也

足踏之事

時々によりて大小遅速あれとも

常のあゆみ足つかひ第一なり

右を踏出す時は左の足を右空

足を添左の足を踏出すときも

右の足をそゆる是を次足とも

二ツの足ともいふ也、足不白

由成時ハ躰不<sub>レ</sub>働躰不<sub>レ</sub>働時ハ心気

居付なり、心気居付ときハ太刀

出す迷を生じ敵に打るゝなり、

場合迫り両足を踏張り形を

つくり心を留る事なかれ、只必

死の場へ行事を行事を要

とす。兵書にも兵戦之場、必死則幸

生顕生則死といへり進退速に心居

付かざる事専要なり。太刀ひとつ

打ても足ハ必二ツ踏べし、然時は

常のあゆみ足つかひに成物也

足踏に勝利ある事可<sub>レ</sub>（可）心得也

歌に

足踏ハ 飛なおどるな 踏すへな

まる木の橋を わたる 習ひぞ

身のかねの位を深く習ふへし

とめねととまる事のふしぎさ

晴之試合には場位に心をとられ

負を借之大事を含ミ弱気生

じて足下こり敵間を失ひ

空太刀を振り又ハ空留空引を

なし勝場の先を失ひ盲心と成

敵に打るゝより外なし。是を死物ト

いふて嫌ふなり、常の稽古を

晴の試合心得、晴の仕合は常

の稽古と心得べし、心胆大成

時は無敵のくらひなり独<sub>レ</sub>

行て独戻るが如し、弱からず荒

からず、敵に能身を渡し

打すると心得、十分敵間へ進ミ

或ハ十分に引付進退とも足下

軽く成時ハ左に応じて右の空

虚成事なり右を応じて左ニ

空しき事更ニなし四方正面  
如く玉如く鏡成時は後の先の業  
も白から捌け所謂本心となる  
是則活物の躰といふ也

歌に

いづくにも心とまらば住かへよ  
とまらハ又本の古さと  
思はじと思ふも同じおもひ也  
おもわしとだに思わじや君

一  
変化之事

敵の無形處を打事なれば必  
敵の謀に乗べし虚実を考へ  
敵に形を作らし其形を打  
べし。先を暖めず後に猶豫する事  
なかれ敵の強ハ柔勇を以向へ  
弱ハ強智を以て破り進退調子  
拍子のはづれに勝負備事を  
自得すべし稽古の始めにハ身の構へ  
三段の太刀の構へ不自由成と経三年  
月を修煉する時ハ自然の身位と  
なれば敵と我と一躰一氣にして

天地人一也是則当流無念之處  
なり

歌に

道をみちに深く執心取ならバ  
大事ゆるすな大切にせよ

八幡尊靈

摩利支尊天

飯綱大明神

福井兵右衛門

喜平

戸賀咲熊太郎

輝芳

岡田 十松

吉利

鈴木 斧八郎

重明

三浦 儀太郎

義達

三宅 肇

実真

吉田 徹郎

維通(花押)

明治三十六年  
癸卯二月吉辰

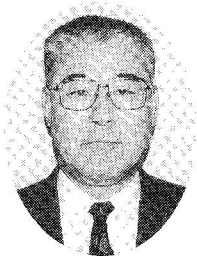
西岡 正一 殿

# 支部だより

## 〈刑務所支部〉

### 矯正職員と剣道について

理事 中村 稔 裕



はじめに

刑務所支部は徳島市の西端、神山町と接する徳島市入田町

大久二〇〇一に所在し、神山森林公園を正面に鮎喰川を背にした小高い丘にある風光明媚な所です。

当支部は、徳島県剣道連盟に所属する十七支部のうち最も規模の小さい一職場支部といえますが、教士七段を頭に初段以上(七段者三十二名を擁し、全職員の十六パーセント)を言段者が占めています。

「刑務所支部」は、我が国の治安

維持の最後の砦であると自負するところですが、せっかくの機会を得たのでその内容を簡単に説明します。

刑務官は、受刑者の刑の執行を通じて、社会適応化すなわち改善更正を実現するために、個々の受刑者の持つ問題点と資質との関係を調査して把握したうえで、その者に必要な作業、教化活動等最も適切と思われる処遇計画を立てて、これを実施していきます。また、勾留中の被疑者や被告人を収容し、これらの者が逃走したり、証拠を隠滅したりすることのないようにするとともに、正当な防衛権に支障をきたすことなく、公正な裁判を受けられるように配慮しています。そして刑務官は、種々の問題ある数百名の受刑者等に対し、平穏に受刑生活を送るよう指導し、また、状況に応じて警備なども行わなければならないので、普段から強じんな体力と、緊急時にも動じない胆力をつけるために、剣道または柔道の訓練を行っています。

#### 支部の現状

近年、刑務官を希望する者が多く高校、

大学で活躍した優秀な剣士が全国の各刑務所で採用され、矯正武道のレベルアップが一段と図られており、日本選手権をはじめ国体都道府県大会にも数多く出場しています。しかし、今日に至るまでには、いろいろな歴史があります。

矯正職員の剣道が組織的に整備されたのは昭和二十八年で、その時に第一回の全国大会が開催されて以来今日まで回を重ねていますが、先輩達の回顧によりますと、神社の奉納武道大会に出場し運動靴をはいて境内で試合をしたいわゆる野試合の思い出、また、戦後の物資の乏しい時代に選手に贈られた賞品はチリ紙、下駄等であったそうで当時の生活状況が偲ばれる反面、当時の写真の部員の姿は稽古着の袖が短くどの顔にも鼻髭があり、その精悍さには野武士といったたくましさを感じます。

しかし、近年まで刑務所職員に対する一般の認識は低く、数年前、ある大会に出場して優勝はもたらしたと意気揚々としていたところ、観戦していた女子高校生の集団が私達を見つけてや一、二寸見てみ、刑務所が

「……、どうして出てきたんだろか、脱走してきたんだろか——ほんまや、刑務所がきとる——と……、なんと、私達は懲りない面々と間違われてしまい、選手一同顔を見合わせ苦笑いで済ませたものの腰砕けとなり、あっけなく一回戦敗退という悲しい経験もあります。」

をもって日々練習に励んでいます。

私達は、自らの技術の向上はもとより、地元の入田中学校剣道部の錬成にも積極的に参加しているほか、多くの人達と交流ができるよういつも門戸を開いています。皆さんいつでも気軽に立ち寄ってください。

#### 「平成八年度試合結果」

平成八年四月二十六日

管内施設対抗武道大会（松山）

徳島刑務所 第四位

平成八年八月三十一日

管内矯正職員武道選手権大会（高松）

北村 仁志 優勝

平成八年十月一日

全国矯正職員武道選手権大会（大阪）

北村 仁志 予選敗退

平成八年十一月一日

管内矯正職員新人大会（高知）

団体戦 第四位

個人戦 有段者の部 遠藤雅之 優勝

松浦 昇 三位

三角善則 三位

無段者の部 佐藤伸一 敢闘賞

#### 〈徳島支部〉

支部長 馬場 力

平成八年度中の支部員の素晴らしい活躍ぶりを以下ご紹介いたします。

剣道七段合格（十一月二十六日東京審査場）

西岡金若教士

山岸章彦錬士

剣道六段合格（五月七日京都審査場）

糸田川美千男錬士

剣道六段合格（十一月十七日名古屋審査場）

熊沢信行

鳴門審査場剣道昇段者

〈二段〉 太田 充宏 榎原 和夫

丸井美登理

〈二段〉 堀田 洋子 竹内 義明

〈初段〉 平田 守 前川 明弘

松永 綾子 梯 周

谷口 順子 大栗 典子

水上 玲子

清原杯争奪戦兼第四十一回県下剣道大会

（平成八年十一月三日（祝））

徳島支部Aチーム 優勝

「……、どうして出てきたんだろか、脱走してきたんだろか——ほんまや、刑務所がきとる——と……、なんと、私達は懲りない面々と間違われてしまい、選手一同顔を見合わせ苦笑いで済ませたものの腰砕けとなり、あっけなく一回戦敗退という悲しい経験もあります。」

管内施設対抗武道大会（松山）  
管内矯正職員武道選手権大会（高松）  
管内矯正職員新人大会（高知）  
個人戦 有段者の部 遠藤雅之 優勝  
松浦 昇 三位  
三角善則 三位  
無段者の部 佐藤伸一 敢闘賞

三十三年振りの栄冠

優勝旗、優勝杯、賞状受賞す。

先鋒 岩原 靖人 次鋒 飯田 栄一  
中堅 玉田 晋作 副将 山田 浩史  
大将 福多 雅英 監督 南 充美  
徳島支部長 馬場 力

平成九年度は一層の充実発展を目指して、支部員一同の力をあわせて頑張りたいと思っております。より以上のご指導ご協力の程をお願い致します。



### 〈勝浦支部〉

勝浦支部長 立岩 勝 己

勝浦支部は、鶴村寺のすそに位置して居ます。車で徳島より約四十分程の所にあります。夏は清流に鮎、秋は蜜柑と本当に美しい町に有ります。稽古に勤む者には最も良い環境の地であると自負しております。次に支部の紹介をします。

支部員は十名です。毎週水・土二回、七時から九時迄、勝浦町勤労者体育館で勝浦剣道教室の小学生二十七名と、中学生は月一回七名をまじえて練習をしています。又、夏には小松島支部より先生方や生徒さんをお招きして、稽古に励んでいます。さらに、指導者の交流を深めるため、指導者の交流稽古も実施し、親睦を図っています。そのことが、剣道人口減少の中、底辺の拡大にもつながると考えております。

さらに、県民スポーツレクリエーション祭も毎年保護者も交えて実施しています。また、県剣道連盟主催の社会人大会をはじめ

め、各大会に参加の出来る選手の育成と技術の向上につとめていきたいと思ひます。自分も毎週二回、石を切り玉を磨くと言うには程遠いかもしれませんが、田舎の剣道に汗を流して励んでおります。



## 羽ノ浦中学校の 朝稽古について

高齢者剣友会 株 木 芳 夫

中山先生を中心にして櫛渕小学校で近くの先生方で朝稽古を始めました。中山先生が海部郡へ帰任されてよりは、羽ノ浦中学校で浜田先生を中心にして剣道室で朝稽古の会を再出発されたのです。

浜田先生・早川先生・遠藤先生を中心にして、大野からは遠藤・阿部・有賀・西岡先生。小松島市からは、早川先生・株木先生・松本先生。羽ノ浦町からは浜田先生・長久保先生・平先生・土井先生・芝原先生・臼木先生。海部郡からは、平岡先生、阿南市からは中西先生。須藤先生・藤田先生・中本先生が水曜日・土曜日に集っています。

これといった規約はなく、寄れる時に寄るといふきまりです。他の稽古場とちがって、きまりも何もありません。多数集まるという他は何にもありません。できるだけたくさん集まって稽古をしようではありません。

せんか。



羽ノ浦中学校朝稽古の会



## 各種大会に参加して

### 京都大会に参加して

居合道部 前田 健 志



今年も五月三日から六日までの四日間、京都の武徳殿で「第四十四回京都大会」

が開催されました。大会の種目は剣道・薙刀・杖道・居合道の四部門、私は五月三日に行われた居合道の部に参加しました。

会場となる武徳殿の名は、かつての平安京に存在した桓武天皇の勅命による武道場（騎射・競馬などを天覧）に因むもので、現在の武徳殿は、その故事に倣って明治二十八年、大日本武徳会によって建立されたものであります。平安神宮隣にあるこの建物は近年、重要文化財に指定された由緒ある建造物でもあります。したがって毎年ここで行われる京都大会は居合道の大会のな

かでも最も古い伝統と格式をもつ大会といふことになります。

明治の武徳会成立後、武道を修めた先人達は、「京の武徳殿をめざせ」を合言葉にこの大会に備えて日々稽古に励んだと伝え聞きます。居合道の部では、全国から高段者が多数参加するため各自の演武時間は五分位となります。しかし、このわずかな演武のため全国から、より多くの居合道家が馳せ参するのであります。一体この大会の魅力は何なのでしょう。

開催地が古都京都ということもあります。また、武徳殿が近代武術の礎を築いた武徳の殿堂と言うこともあります。が、それにもまして、居合道には別な意味での人を魅了する何かがあるのではないのでしょうか。よく居合道は「実敵がない武道」と言われますが、それ故に己自身が実敵と言う考え方が成り立ちます。だからこそ、より崇高な精神性が介在するのだとも言われています。私は、この大会への参加は日頃の修練の成果を披露する場であり、継続して参加することこそ大いに意義ある事だと考えています。

私も六段合格の次年度より毎年この大会に参加しておりますが、初めての年には武徳殿の荘厳さに加えて壮々たる武道家の演武に圧倒され、緊張のあまり自己の演武を振り返る余裕すらなかったことを記憶しています。

長年参加しておりますと、多くの先生方との出会いがあり、いろいろと学び教えられることがあります。「居合道とは、日本古来の武道、抜刀の一瞬に精神の集中をはかる心身鍛錬の奥義、そこには生きるか、死ぬかを追求する奥の深さがある。」と力説される先生。また、「居合道で学んだことを生活に、生きることに、生かさない。」と淡々と語られる先生。私は実のところ居合道がどういふものかはつきり掴めないというのが率直な意見であります。しかし、居合道の不思議な魅力を十二分に感じ、そこに何かを求めようとしている一人であることには違いありません。仕事に疲れたとき、悩み事が生じたとき、私に大いなるやすらぎを与えてくれるのが居合道であり、今や生活の一部となっていると言っても言い過ぎではありません。

京都大会の参加資格は六段からです。演武は段別で取得年月日の若い順に行われま  
す。終番近くの演武者のなかに、九十三歳  
の範士八段の先生がおられました。さっそ  
うと演武される姿は、言うに言われぬ品位  
に満ちて格調高く、正に一幅の絵に形容で  
き、それを見た私は、肌で感じる感激を覚  
えたものでした。

最近、私の身のまわりで、健康に関する  
話題が沢山取り沙汰されます。九十三歳と  
いう高齢にも拘わらずどうしてあのような  
力強い演武が出来るのでしょうか。これも  
居合道の魅力のひとつなのかもしれません。  
私にとって、居合道の稽古が順調なときは、  
健康で、かつ仕事も捗ります。「健康  
こそは人生の宝」と言う喩えがありますが、  
私も五十歳を過ぎて、健康の有難さをつく  
づく感じるようになりました。これからの  
人生で健康を維持するためにも居合道は続  
けてゆきたいと思っています。そして事情  
が許すかぎり京都大会には参加しようとし  
念じている昨今であります。

## 全国スポーツ少年団 剣道交流大会に参加して

監督 住友 久夫

徳島選手団の監督に推せんされ、こんな  
光榮な事は無いと思いましたが、果たして  
この大役を勤める事が出来るかどうか本当  
に不安であった。この不安は大会が近づくと  
につれて強くなり、経験不足な私に大きく  
のしかかってきました。そのたび自分の出  
来ることをすれば良いのだ、『精一杯頑張  
ろう』と心に言い聞かせたのでした。

大会に向け、週一回の割合で強化練習を  
始め、選手とのコミュニケーションを図る  
と共に、御父兄の皆さんとの打ち合わせを  
進めていきました。

平成八年三月二十六日、大阪城に隣接し  
て建てられた、大阪市中央体育館の前に立  
ち、第十八回スポーツ少年団剣道交流大会  
と書かれた横断幕を見上げ、「やっとここ  
までこれた」と心の中でつぶやくと同時に、  
つかの間の安堵感を覚えた。開会式、団員



の基本錬成、指導者研修と慌ただしく時間  
が流れ宿舎に移動、夕食後、ミーティング、  
選手達の会話は盛り上がりつつあったが、明日  
のことを考え就寝に付いた。  
決勝トーナメント進出を目指し予選リ  
グに臨んだ。第一試合は山形県チームと対  
戦し4-1と圧勝したが、少し問題の残る

試合であった。二試合目の石川県チームに  
対し、自分たちの実力を発揮する事ができ  
ず、2-3で涙を飲んだ。粘りの剣道に一  
本の重さを知らされた。中学個人男子の大

前は、開始早々宮川（神奈川県）にまさかの  
小手、気を取り直し反撃に転じ、幾度とな  
く面を捕えるが有効打突とならず、三分間  
が過ぎてしまい決勝トーナメントに出場で  
きなかった。しかし中学個人女子の伊藤が  
順調に勝ち、予選を突破、決勝トーナメン  
トでは長身を生かし、和田（大分）に面を  
二本、続く飯野（栃木）に小手、面を決め  
圧勝した。決勝を掛け谷田（北海道）との  
勝負である。伊藤の攻めに谷田の竹刀がピ  
クリ、すかさず小手に飛び込み一本を先取、  
しかし、終了間際に小手を取られ延長、両  
者譲らず時間が過ぎ、この一太刀にすべて  
を任せるかの様に、同時にメンが放された。  
赤い旗が上がり、勝負あり、決勝には進め  
なかったが、すばらしい試合に惜しみない  
拍手が続いた。面を取りながら、「欲を出  
さなければ」とつぶやいた伊藤であった。  
しかし、勝敗だけに拘り逃げの剣道をする

より、前に出る事の方が勇気が必要であり、  
特に少年剣道に於いては、重視すべきもの  
である様に思います。

子供達と一緒に行動した三日間は、私に  
とって貴重な経験であり、監督としての重  
大さを知る場でありました。そして、屈託  
のない子供の笑顔を大切にすると同時に、  
指導者の一員として、信念をもち、誰にで  
も愛情をもって接し、自ら精進していきたく  
と思います。

最後に、今大会に向け御指導、御支援く  
だされた先生方並びに、保護者の皆様に厚  
くお礼申し上げます。

#### 出場選手

団体戦（小学校）

監督 住友 久夫

（錬武館）

先鋒 大石 真也

四年（桑野川）

次鋒 中山 真希

六年（至誠館）

中堅 横手 裕一

六年（阿南）

副将 美馬真奈美

六年（牟岐）

大将 住友 直城

六年（錬武館）

個人戦（中学校）

男子 大前 智仁 二年（阿南第二）

女子 伊藤奈津子 二年（木頭中）

団体戦 試合結果

予選リーグ

徳島 4 (9) - 1 (2) 山形

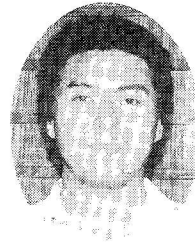
徳島 2 (4) - 3 (5) 石川

個人戦

第三位 伊藤奈津子

# 全日本都道府県対抗 剣道大会に参加して

副将 白木 崇



五月三日、第四十  
四回全日本都道府県  
対抗剣道大会が京都  
市立体育館で開催さ  
れました。

大阪市立体育館改築・遺跡発掘調査等の理由により、ここ数年京都での開催となっていました。ようやく今年新築工事も終わり、今回が京都での最後の大会となりました。

この間、宿泊は三福寺にお願いし、ご仕事のご好意と徳島剣連事務局の方々のお世話によって選手たちは調整でき、大会に臨めました。ここは少林寺拳法の道場ともなっており、会う人みんなが丁寧な挨拶してくれます。突然の訪問者である私たちを心から歓迎してくださりありがたく思いました。今まで何不自由なく大会に参加してきた私

にとつてこのお寺での宿泊は、選手を少しでもいい状態にと陰で気を遣い、苦勞されている事務局の先生方や応援して下さいたい人達の気持ちを直に感じることでできた大会前日でした。

さて、今年の徳島県選手ですが、

先鋒 岩原 靖人 四段 二五歳

次鋒 玉田 晋作 六〇〇〇

中堅 吉田 茂生 五〇二八〇

副将 白木 崇 六〇三一〇

大将 近藤 亘 七〇四一〇

と、若手中心のフレッシュメンバーで臨みました。

予選リーグでは、沖縄県・茨城県とあたり、結果は残念ながら予選を出ることはできませんでした。

(徳島) (沖縄)

岩原メー 大城

玉田 × 大浦

吉田 × 比嘉

白木ココー 松本

近藤 ーコ 親川

(徳島) (茨城)

岩原 ーメ 谷田部

玉田 ーメメ鍋山

吉田メ ー 中根

白木 ーメ 本名

近藤コ ー 中村

茨城 2勝

徳島 1勝1敗

沖縄 2敗

副将は、チームを盛り上げて大将につなげていく重要なポジションであると、責任を感じていたのですが、若手の気心のしれたチームワークの良さに、かえって気をゆるしてしまい、結果的に私がチームの勝敗を決めてしまいました。

上位に進出したチームは例年に余り変わりなく、各ポジションの層の厚さを感じました。

また、有名選手の試合を見ると、間合いの取り方が非常にうまく、落ち着いた試合運びで自分の得意とする形に持っていく、打ち焦りがなく、技だけではない精神面の強さを感じさせられました。

予選では、各県とも力の差は感じませんでした。したが、落ち着いて試合を運べたかどうか。勝敗を左右したようです。特に、次鋒（教員）・中堅（警察官、刑務官）は稽古をつまめた方ばかりで接戦が予想され、今後、先鋒（三〇未満一般）・副将（三〇以上一般）の強化ができれば上位進出の可能性も高まるといえ、副将の私としては稽古不足を反省するばかりです。

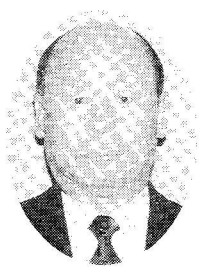
この大会は、出場選手が職域で分けられており、合同練習や試合練習などをする機会があまりないので、今後、若手を中心となっていく中で、選手一人一人の自覚が勝敗の鍵となってくると思います。

来年からは大阪での開催となりますが、この京都での経験は、三福寺をはじめ多くの方々のご協力とご支援のお陰で、大会に参加させていただいていることを実感できたよい機会でした。今回の経験を生かし今後努力していきたいと思えます。

## 第四十八回四国四県

### 剣道大会に参加して

監督 高田 豊



四十八回という輝かしい歴史をもつ四国四県大会が平成八年五月二十六日鳴門

武道館において挙行されました。昨年の大会では審判の錯誤というアクシデントで大魚を逸している本県としては今年は今句のない内容で優勝してみせるといふ強い決意で臨んだ戦いでした。選手は現在の本県で考えられる最高のメンバーによって編成され練習も充分積み、充実した戦意をもっていましたから監督の私としても「絶対勝てる！」という確信をもっておりました。

結果は予想通り三勝〇敗で見事優勝を成し遂げたのであります。平成四年、五年の優勝から三年目に再び四国の頂点に立ったのです。とは言うものの実際は監督として一試合毎に胃が痛くなるような思いを致し

ました。

第一戦の高知との戦いでは先鋒・次鋒が惜敗し前途多難を思わせ、七将の白木選手が勝つてようやく二勝二敗となり試合を五分にもどし、その後、四将河田選手の絶妙な剣と三将山崎選手の豪快な剣さばきによって勝ちを収め、この時点でようやく安堵で



きたという次第です。第二戦香川との対戦は本県にとっては天王山の戦いでした。先鋒木下選手の果敢な攻めによりまず先制の一勝をあげ辛先良しと思いましたが、次鋒、十一将が引き分けたあと十将、九将が取られ、八将、七将を取り返し、六将が取られて、この時点で三勝三敗でまったくの互角という状況となりました。この時の私の胃は硬変化してシクシク痛みを感じていました。ところがここで五将近藤選手と四将河田選手の超一流の剣勢が火をふき一気に二勝して、本県に勝機の流れをもたらしたのであります。本当に良く頑張ってくれました。最終戦の対愛媛戦は八将迄二対二でしたが、その後は一方的試合で本県が勝利をものにし全試合を終了しましたが、その時になってようやく胃も復調し、しみじみと優勝のよろこびをかみしめた次第です。

かえりみますと選手一人一人が全身全霊で本大会に臨んだことが優勝の要因と思いますが、それにもまして堀江会長をはじめ連盟の諸先生の物心両面に亘る暖かいご支援ご指導の賜でして、心からお礼を申し上げます。

げます。来年第四十九回大会の連勝を目指して更なる練磨を期待しまして報告と致します。



<選手名簿>

徳島県剣道連盟	年齢別		女子		20代		30代			40代			50代		60代
	監督	先鋒	次鋒	十一将	十将	九将	八将	七将	六将	五将	四将	三将	副将	大将	
氏名	高田 豊	木下 文江	北村 環	北村 仁志	吉田 茂生	平野 誠司	美馬 和義	白木 洋一	鈴木 伸一	近藤 亘	河田 清実	山崎 一夫	坂下 彦之	遠藤 一美	
年齢	71	21	25	26	26	32	34	35	40	41	41	55	59	71	
段位	教七	四段	四段	四段	五段	錬六	六段	教七	錬七	教七	教七	教七	教七	教七	
職業		公務員	教員	刑務官	警察官	警察官	公務員	教官	刑務官	警察官	教員	公庫職員	警察職員	県会議員	

<第 1 戦>

県名	順位	先	次	11	10	9	8	7	6	5	4	3	副	大
高知	氏名	門田	町田	山下	中沢	塗本	森崎	恒石	坂本	岩崎	渡辺	岡本	橋本	横山
	得点	2	⊗▲ 一本勝	⊙ 一本勝		×	×	×	×	×	▲		⊙	×
徳島	得点	4		⊗ ⊙				⊗ 本勝			⊗ ⊗	⊙ 本勝	⊙ ⊙	×
	氏名	木下	北村	北村	吉田	平野	美馬	白木	鈴木	近藤	河田	山崎	坂下	遠藤

<第 2 戦>

県名	順位	先	次	11	10	9	8	7	6	5	4	3	副	大
香川	氏名	山田	香西	福井	銭谷	土居	玉浦	今村	三浦	伊丹	白石	関	北條	村上
	得点	4	⊙	⊗	⊙	⊗ ⊙	⊗ ⊗		⊙ ⊙			⊗ 一本勝		×
徳島	得点	6	⊗ ⊗	⊗	⊗		⊗ ⊗	⊗ ⊗		⊗ ⊗	⊙ ⊗		⊙ 本勝	
	氏名	木下	北村	北村	吉田	平野	美馬	白木	鈴木	近藤	河田	山崎	坂下	遠藤

<第 3 戦>

県名	順位	先	次	11	10	9	8	7	6	5	4	3	副	大
愛媛	氏名	松木	加茂	渡辺	井上	笠崎	濱田	石本	大城戸	谷口	磯崎	山本	平野	藤田
	得点	2	⊗ ⊗	⊙			⊙ 一本勝		×	×			⊗	×
徳島	得点	5		⊙ ⊗	⊙ 本勝			⊗ ⊗			⊙ ⊙	⊙ ⊙	⊗	
	氏名	木下	北村	北村	吉田	平野	美馬	白木	鈴木	近藤	河田	山崎	坂下	遠藤

〈第48回四国四県剣道大会戦績表〉

	愛媛	香川	高知	徳島	勝数	勝者数	得本数	順位
愛媛		$\frac{12}{5}$	$\frac{7}{3}$	$\frac{5}{2}$	1	10	24	4
香川	$\frac{7}{3}$		$\frac{12}{8}$	$\frac{10}{4}$	1	15	29	2
高知	$\frac{13}{7}$	$\frac{7}{4}$		$\frac{3}{2}$	1	13	23	3
徳島	$\frac{10}{5}$	$\frac{14}{6}$	$\frac{7}{4}$		3	15	31	1

## 六月九日のメークドラマ

警察支部 吉田博文

翌日の高知新聞の見出しはこうであった。

「徳島県警A 勝負強さ発揮」

確かにこの日は違っていた。大会が始まって以来、一度も県警に持ち帰ったことのない紫紺の優勝旗を勝ち取るために、三人はそれぞれに燃えた。

毎年梅雨の真っ只中に行われる西日本勤労者剣道大会は、今年で三十五回を数える。この大会は一チーム三人編成で行われる団体戦であり、今年も西日本各県から三二五チームの精鋭たちが高知県民体育館に集まった。

私は、この大会には第二十一回大会から出場しており、第二十五回、第三十回大会においてそれぞれ三位に入賞している。今年はそのちょうど五年目に当たり、何とか上位に進出したいと考えていた。

我々徳島県警は三チームエントリーし、私はAチームの大將を任された。Aチーム

は、先鋒に向かうところ敵無しの吉田茂生五段、そして中堅には世界の平野誠司六段を起用し、当初私は左うちわで試合ができると高を括っていた。予想通り序盤は二人とも早い時間で二本連取し、私は面を着けるのをせかされるほどであった。

優勝を意識したのは、準々決勝に進んだ時だった。クチャンスだ！ク三人の気持ちは一つになった。

決勝戦の相手は、地元の高知県警。三人は準決勝までの七試合で相当体力を消耗していたが、「あと一つ！」とお互いに発破を掛けた。先鋒戦、吉田茂生はこれまでの対戦で絶対の自信を持っている中澤五段に対し、中盤、相手が面に飛び込んで来た瞬間、狙いすましたように抜き胴を決めた。

中堅戦、相手は先手を取られたため果敢に責め立ててくる。平野は篠四段に対し、集中して打突の機会を狙っていたが、四分という短い試合時間で勝負を決めることができなかった。

一対〇と徳島優位で大將戦にもつれ込み、私は即座に頭の中で計算した。

「一本負けを喫すれば代表戦、引き分ければチームは勝つ。」

私の相手は塗本六段。過去に何度も対戦し、お互い手の内は大体分かっている。私は開始早々から相手は一本を取りにくると思っていたが、立ち上がりは慎重であった。私も相手の出力を窺いながら、無理に打って出ることはしなかった。結局、両者有効打突なく試合時間は終了し、この伝統ある西日本勤労者剣道大会において初優勝というメーカードラマを打ち立てることができた。

私の試合内容は、決して自分で自分をほめることができるようなものではなかったが、私に勝負がかかってきたとき、チームとして勝ちたかった。

大会終了後、満面に喜びを表しながら新聞記者のインタビューに答えていた三人の姿を思い出す。

今回の初優勝は、決して我々三人だけで勝ち得たものではない。堀江会長をはじめ、県剣道連盟の諸先生方のお力添え、また、坂下県警剣道師範、近藤監督の御指導の賜物であり、毎日苦業を共にしている剣道特

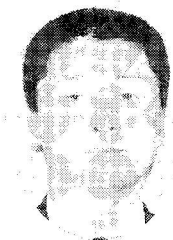
練員全員で勝ち取ったものである。

東四国国体の強化が始まって以来、着実にレベルアップしている徳島の剣道、次のドラマは全国制覇、頂上はもう手の届く所にあると確信している。



## 全国警察剣道大会を終えて

監督 近藤 亘



平成八年度全国警察剣道大会は、十月四日（金）日本武道館で行われました。

この大会は、全国警察を二部（上位12チーム）と二部（一部以外の36チーム）に分け、それぞれ優勝を争います。なお、一部の下位4チームと二部の上位4チームは、次年度に入れ替えとなります。

試合形式は次のとおりです。

一部は、12チームを3チームずつ四組に分け、各組ごとにリーグ戦を行い、各組の首位チームによるトーナメント戦で優勝を決定します。

二部は、36チームを3チームずつ十二組に分け、各組ごとの一次リーグ戦を行い、順位を決め、さらに各組の首位チームを3チームずつ四組に分け、各組ごとの二次リーグ戦を行い、その後各組の首位チームによ

るトーナメント戦を行い優勝を決定します。  
 本県の選手は、今年の総決算ともいうべきこの大会に、「一部入り」を合言葉に一丸となって臨みました。

結果は、一次リーグ戦で秋田県警・新潟県警に勝ち二次リーグに進出。二次リーグ戦では、岡山県警に前三人が破れたものの、後四人で逆転勝ちし意気上がりでしたが、次の長崎県警戦では惜敗し、残念ながらベスト4に入らず「一部入り」は来年度に持ち越しとなりました。

〈大会結果〉

一部 優勝 警視庁

準優勝 大阪府警

二部 優勝 熊本県警

準優勝 鹿児島県警

〈出場選手〉

監督 近藤 亘

機動隊 吉田 博文(六段)

〃 平野 誠司(〃)

〃 吉田 茂生(五段)

〃 岩木 一功(〃)

〃 小坂 治(〃)

〃 茨木 基良(〃)  
 〃 富田 圭介(四段)  
 〃 森 晋作(二段)

次に試合状況をお知らせします。

◇一次リーグ(試合時間五分引き分け)

〈対秋田県警戦〉

徳島県警○ $\frac{3}{5}$ — $\frac{2}{3}$ △秋田県警

先鋒 富田 一(ト) 富岡○

六将○茨木 三(一) 東海林

五〃小坂 三(一)×中川○

四〃岩木 三(一)×小野

三〃○吉田茂 三(一)×小松

副〃平野 三(一)×高橋

大〃○吉田博 三(一)×伊藤

先鋒富田選手、初戦の緊張の中、善戦したが面返し胴で先手を取られる。続く六将茨木選手、得意の小手を取り対とする。五将小坂選手、面で先取るも胴、面と連取され再びリードされる。四将岩木選手、秋田県警のポイントゲッター小野選手をよく攻め、引き分けたのは大きかった。三将吉田茂選手、面の一本勝ちで再び対とする。副将平野選手が引き分け大将戦につなげた。

大将吉田博選手、持ち前の勝負強さを発揮し、引き面二本を連取し三対二で逆転勝ち。  
 〈対新潟県警戦〉

徳島県警○ $\frac{2}{3}$ — $\frac{0}{0}$ △新潟県警

先鋒 富田 三(一)×脇屋

六将 茨木 三(一)×笠原

五〃小坂 三(一)×中嶋

四〃○岩木 三(一)×太刀川

三〃 吉田茂 三(一)×金田

副〃○平野 三(一)×三上

大〃 吉田博 三(一)×星

先鋒、六将、五将ともよく踏ん張り、引き分けに持ち込んだのは大きい。続く四将岩木選手、得意の小手すり上げ面で先手を取る。三将吉田茂選手が引き分け、副将平野選手、得意の引き胴、小手を連取し、チームの勝ちを決めた。大将吉田博選手が引き分け、結局2対0で勝ち、二次リーグ進出を果たした。  
 ◇二次リーグ選手(試合時間五分、延長三分引き分け)  
 〈対岡山県警戦〉  
 徳島県警○ $\frac{1}{6}$ — $\frac{3}{7}$ △岡山県警

先鋒 富田 (○) (○) (○) 石原 (○)

六将 小坂 (○) (○) (○) 杉田 (○)

五将 茨木 (○) (○) (○) 福島 (○)

四将 岩木 (○) (○) (○) 橋本

三将 吉田茂 (○) (○) (○) 馬場

副将 平野 (○) (○) (○) 家近

大将 吉田博 (○) (○) (○) 難波

岡山県警チームは昨年まで一部に所属していた実力あるチームである。先鋒、六将、五将と二本負けで連敗され、「万事休す一かと思われた。今までの徳島であればズルと負けていたかもしれない。しかし、この日の徳島チームは違っていた。四将岩木選手が小手を連取し流れを変えた。続く吉田茂選手も一対一の勝負となり、小手を取る。副将平野選手も気合十分、延長戦の末、面を取り大将戦へとつないだ。こうなれば流れは完全に徳島。大将吉田博選手、落ち着いた試合運びで得意の引き面を決め、残り時間相手が一本取ろうと果敢に攻めるも、巧妙な竹刀捌きで粘って一本勝ち。見事な逆転勝ちを取めた。

〈対長崎県警戦〉

徳島県警 (○) 2/3 | 4/5 △長崎県警

先鋒 富田 (○) (○) (○) 多田 (○)

六将 茨木 (○) (○) (○) 中里

五将 小坂 (▲) (○) (○) 浦田 (○)

四将 岩木 (○) (○) (○) 梅田 (○)

三将 吉田茂 (○) (○) (○) 馬場

副将 平野 (▲) (○) (○) 田中 (○)

大将 吉田博 (○) (○) (○) 平山

先鋒富田選手、本来の調子が掴めないまま面を打たれ一本負け。六将茨木選手、ここの一番気合の面を取り対とする。五将小坂選手、自分の問合で試合ができず、面二本連取される。続く四将岩木選手、ここまで二勝負けなし。期待されたが出頃の小手を打たれ一本負け。もう後がない。ここで三将吉田茂選手が踏ん張った。ここまで二勝負けなし、気合十分で面二本を連取し副将につないだ。ここで先ほどの逆転劇が脳裏をよぎったが……。副将平野選手もここまで二勝負けなし。先の技が冴えており一よもや負けるまい」と思っていたが、この試合に限り慎重にな

りすぎたのか、受けの体勢が何回か出た。そこを相手も見逃さず、小手を打たれてしまった。「残念」。

大将吉田博選手、最後の力を振り絞り戦ったが引き分け、二対四で惜敗した。

後で行われた岡山県警対長崎県警の試合が引き分けたため、二次リーグ戦第二位という惜しい結果に終わりました。

あと一步で入賞(ベスト4)を逸しましたが、本当に実り多い大会でありました。

「負けるのは相手より稽古が足りなかった」と反省し、来年こそは「一部入り」を果たしたいと、決意を新たにしております。

## 全国家庭婦人剣道

### 大会に参加して

徳島支部 榎 本 福 恵



平成八年八月六日、  
日本武道館に於いて  
全国家庭婦人剣道大  
会が行われました。

我が徳島県チームは、先鋒・森みゆきさん  
(阿南)、次鋒・岩見さゆりさん(鍊心館)、  
中堅・榎本(徳島)、副将・長谷川陽子さ  
ん(小松島)の四人のメンバーで出場しま  
した。そして手塚先生より大将不在の件に  
ついては十分説明を頂き、納得した上での  
出場でしたが、全国の壁の厚さを思い知ら  
され、また、全国大会という大舞台の中で  
大将不在ということは、相手チームに対し  
て申しわけない思いでいっぱいでした。

試合は、大分県・京都府・徳島県のリー  
グ戦で行われ、二敗という成績で、トーナ  
メント戦には勝ち残ることはできませんで  
した。

大分4-1徳島  
京都3-0徳島

しかし手塚先生から一人一人に対して的確な指示をしていただき、一試合日より二試合目と練習の成果を発揮できたように思います。私自身全国家庭婦人の大会に出場させて頂いたことは大変貴重な体験になりました。そして今回の試合も含めて反省する点は多く、自分なりに新たな目標を持って稽古に励みます。そしてこの体験を生かして自分自身を練磨し、これからの生活に役立てていきたいと思えます。

それからもうひとつ心の中に残っていることは、試合の前日で大変緊張していた私たちを、手塚先生の計らいで前年度優勝された兵庫県チームの方々と話すことができました。学ばなくてはいけない点が多分にあり、勉強になりました。短時間の親睦の会でしたが、本当に有意義なものでした。感謝しています。

私は七人家族で生活していますが、家庭婦人というのは、家庭での自分の役割を果たし、家族の理解を得ることにより、剣道

を続けることができると考えております。家庭・仕事・剣道と常に私の中では剣道は三番目ですが、続けることが大切であると考え、休みながらも練習に頑張っています。そして諸先生方や家庭婦人の方々とは稽古を通じて積極的に触れ合い、これからもずっと自分自身を修煉していこうと思っています。

最後になりましたが、今大会出場にあたり交通や宿泊等の御配慮大変お世話になりました。そして全国家庭婦人剣道大会の貴重な体験をこれからの人生に生かしていきたいと思えます。本当にありがとうございます。

## 矯正職員管内武道

### 選手権大会に優勝して

刑務所支部 北村 仁 志

平成八年八月三十一日、高松刑務所において、私達刑務官にとって武道の二大会の一つである矯正職員管内武道選手権大会が行われた。管内の各施設を代表する選手十八名が全国大会出場をめざして戦った。私は、昨年福島国体に出場したためにこの大会を欠場したが、今年はどうしても勝ちたい試合であった。一昨年は、決勝戦まで進んだものの、管内で無敵の強さを誇る松山刑務所の桑原慶二七段に敗れていることから、打倒桑原選手を目標に一年間稽古をしてきた。しかし、近年管内の各施設ともに選手の補強がおこなわれており、中でも高松刑務所は学生時代に活躍した実績のある選手が数名採用され、強力な布陣を整えた油断のできない存在となった。

選手権大会はリーグ戦で行われ、一次リーグの相手は高知刑務所の森崎選手と高松刑

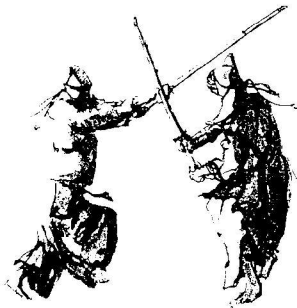
務所の矢野選手であった。初戦の森崎選手には胴で一本勝ち、矢野選手とは引分けは許されない厳しい試合であったが、残り六秒で小手を奪うことができ、二次リーグを突破することができた。二次リーグで対戦が予想された桑原選手が一次リーグで敗れるという波乱があったため、二次リーグの相手は高知刑務所の宮本選手と高松刑務所の横山選手であった。宮本選手に引分け、横山選手に胴の一本勝ちし決勝進出を果たした。決勝戦は高知刑務所の米沢選手であり、引面と飛び込み面を奪い、初優勝することができた。

私はこの一年間、矯正武道選手権大会一つに照準を合わせて稽古してきた。それは、



桑原選手に勝ちたい、また高松刑務所の強力な選手に負けたくないという気持ちがあったからである。今回優勝したことで管内では追われる立場になるが、目標は、あくまで全国矯正職員武道選手権大会での上位進出と心得て、今以上の稽古に励みたいと思っ

ていますので、諸先生方に更にお力添えいただきますようお願いいたします。



# 全国警察少年剣道大会

## 決勝戦に駒を進めて

徳島至誠館副館長 中山 繁 輝

平成八年八月七日、第九回全国警察少年剣道大会が東京警視庁武道館において開催された。開会式には元広島カープの衣笠祥雄選手が来賓として出席され、『継続は力なり』の激励の言葉を頂いた。また、試合前に行われた基本錬成では、全日本剣道選手権大会に三回優勝の偉業を成し遂げた警視庁の西川清紀先生から直接ご指導を受ける機会に恵まれたことは幸運であり、良い思い出となった。

本大会は先鋒から中堅までが小学生。副将・大将が中学生で小・中各一名ずつの補員の七名で構成されている。試合毎に選手を入れ代え、オーダー表を提出するのがこの大会の特色である。さて、県予選を勝ち抜き八度目の出場を果たした阿南警察署チームは、昨年の子選リーグ敗退の悔しさを晴らすかのように快進撃を続け、決勝戦

に進んだ。決勝戦では残念ながら強豪栃木県チームに2対0で負けはしたものの準優勝という輝かしい成績を挙げることができた。猛暑の中、十数回に及ぶ激しい強化練習に耐え抜き、全国大会の檜舞台で活躍した七名のあふれる闘志と精神力に心から拍手を送りたい。

大会を振り返り、準優勝までの勝因を揚げてみた。

一、選手七名中、四名が本大会に出場した。経験があり、この『場慣れ』が善戦に大きく影響したといえる。中学生が中心となりリーダーシップをとってくれた。小学生に対して『思いきって戦ってこい。勝負は副将、大将がつけてやるから』と各試合に送り出していた。中学生の心強い言葉を聞いた時には『今日は必ずやってくれる』と確信した。監督として頼もしく思えたものであった。中学生の言葉を信じてリラックスして戦った小学生は、中堅戦まで全て二勝の勝ち越しで中学生にバトンタッチした。中学生も期待に込めて必ず勝負をつけた。

、技においては全員が『攻め』の気持ち忘れず、終始攻めの剣道ができた。また、技が途切れることがなく、応じ技、引き技を巧みに使っていた。各選手が得意技を積極的に出し、打突出来ない場合は臨機応変に技を出していた。監督として指示の出すことが無い程に理になっ



た戦いぶりであった。

力以上のものが出たのではなく、選手一人ひとりが冷静な判断のもとに持てる力を全て出し切ったことが最大の勝因であろう。

『戦は気なり』の格言どおり、気力を充実させ全力で戦うことの重要性を改めて感じさせられる大会でもあった。

最後にこの大会の出場にあたりご支援を頂いた、警察本部並びに阿南署の皆様によりお礼を申し上げ大会報告と致します。

出場選手

監督 中山 繁輝 (至誠館)  
小学生 中山希実子 (至誠館)

岸 香織 (至誠館)

横田 直也 (至誠館)

原 祐輔 (那賀川)

中学生 仁木 進介 (阿南一)

大西 雅照 (阿南二)

数藤 聡志 (羽ノ浦)

試合結果

予選リーグ

徳 島 3 (6) | (1) 1 和歌山

徳 島 3 (6) | (1) 0 愛知

決勝トーナメント

一回戦

徳 島 4 (9) | (4) 1 熊本

準々決勝

徳 島 3 (6) | (2) 2 愛媛

準決勝

徳 島 3 (4) | (1) 0 長崎

決勝戦

徳 島 0 (1) | (4) 2 栃木

『剣道日本九月号』より抜粋

準決勝 徳 島 対 長 崎

阿南は女子が先鋒、次鋒の二つのポジションを務めて大活躍、準決勝で神代と対戦した。先鋒・中山は相手がメーンに出て来るところをよくみて引きながらコテを決めて一本勝ちをおさめた。次鋒・岸は引き分けに持ち込み、中堅・

決勝戦

	大将	副将	中堅	次鋒	先鋒	徳 島	栃 木
0 (1)	仁 木	大 西	原	岸	中山	コ ×	福 士
(4) 2	×	×	メメ	コ	島 森		田 中

原はメーンの本勝ちとなった。副将・大西が引き分けたところで阿南チームの決勝進出が決まった。

## 四国選手権男子団体初制覇・ 女子団体三位・芝個人三位

富岡西高校教諭 本田 敦彦

平成八年六月一日から三日間行われました県総合体育大会で、男子が二年連続十二度目の優勝を飾り、女子が準優勝しました。

富岡西・城ノ内とも川島・阿南工に勝ち、両校二勝同士の決戦となりました。会場は静まり返り、両雄の対決に緊張感さえも走る中、先鋒・福田気迫の引き分けの後、次鋒・株田が一本一本の勝負から見事な中心を割った面を決め、敦賀に替わって出場した福島が引き面の一本勝ち、副将の紙本が延長の末引き分け優勝を決定付け、大将の横手が延長で面抜き胴を切り二連覇に花を添えました。初戦からすべての試合を副将戦で決めた、気迫と集中力の勝利でした。

女子は二勝同士で決勝リーグの最終戦で富岡東と勝負に挑みたかったのですが、クジにより初戦で戦うことになってしまいました。先鋒・福永がおいしい引き小手を放つ

が一本にならず一本負け、次鋒・藤本も同じく一本負け、このとき昨年の5-0の悪夢がよぎったが、中堅・芝が攻め通して引き分けると、チーム中もとても気力の充実している副将・林が見事な引き面を決め大将につないだ。大将・大谷は全国のトップ選手坪井を攻め続けたが惜しくも引き分け勝つことはできなかった。しかし、去年の清原杯で富岡東を倒し優勝したときの気力がよみがえり、気持ちを切ることなく、小松島・川島を前三人で圧倒し内容のある準優勝を決めました。

六月十五日・十六日両日に行われました四国高等学校剣道選手権大会で、十年連続アベック出場・学校創立百周年という節目の年に、四十二回の歴史の中で徳島県の男子としては初めての団体優勝を富岡西高校が成し遂げました。女子も県二位で出場し団体第三位となり、個人戦も芝が第二位と大活躍し、高知県立武道館は富西旋風がまきおこりました。

男子は、初日子選リーグ第一回戦で愛媛四位の難剣丹原に引き分け、暗雲が漂いま

したが、第二試合の高松一を副将までに勝負をつけ何とか初日を乗り越えました。二日目の予選リーグ第三回戦で地元高知県の二位校高知に中堅が気力の二本勝ちをしましたが、先鋒と副将が一本負けをしており、大将が引き分けても予選リーグを上がれないという状況の中、大将の踏ん張りで延長戦の残り三十秒で面を決め、決勝トーナメントへ進出することができました。

女子は初日二勝と好調で、二日目は高知県一位の高知商業とリーグ一位を奪い合う事になりました。高知商業は初日に松山北に負けており、勝者数で二勝リードしており、負けても2-3であれば一位になる事ができるといふ計算をしていました。目前で男子の高知戦を見た女子は、全員が気力を再確認し全国選抜大会ベスト8の高知商業に向かいました。先鋒・福永は上段相手に動きで攻めたてましたが止まったところを面を奪われ、次鋒・藤本も一本負け、後が無くなった時、昨日個人三位に輝いた中堅・芝が相手が鏢競り合いで逃げるところを逆引き胴に切り一本勝ち、副将・林が開

始三十秒で値千金の引き面と相小手面で二本勝ちし、アベック決勝トーナメント進出を決めました。大将・大谷は惜しくも一本負けでリーグ全勝こそ逃しましたが、県二位で出場し全国選抜出場の高松北とベスト8の高知商業のいるリーグを一位で抜けたことは女子の実力を四国に知らしめる結果となったと思います。準決勝では選抜ベスト8の高松一に惜しくも敗れましたが、すばらしい成績だと思います。

男子の準決勝は二連覇を狙う新田高校で、本大会ナンバーワンの実力を持っていましたが、先鋒・福田の体当たりで相手が倒れ、そこをすかさず面を決めました。これが結局流れを富西に向かわせる結果となり、次鋒・株田は1-2で負けましたが、中堅・福島と副将・紙本が一本勝ちし、決勝に駒を進めることになりました。

決勝は、選抜ベスト8の高松南との対戦である。先鋒・福田は相小手面の一本負け、次鋒・株田は準決勝で面を取り返した時相手に腰をねじられ決勝でも痛みをおして試合に臨んだが二本負けを喫してしまいま

た。これで優勝はないと思ったとき、中堅・福島が引き面・引き小手を決め二本勝ち、副将・紙本は上段相手に奮戦し引き分け、大将横手は開始早々速い攻めから小手を決め、「二本目」の合図と同時に速い攻めから面を決め、感動の逆転勝ちを演じてくれました。

平成八年一月四日に高松南とは練習試合をしていますが、大将・横手はこのとき中堅・福島の相手にライン際で突き出され、足の指を骨折してしまいました。全国選抜予選十日前の出来事で、富西は選抜予選に大将が出場できませんでした。福島は中学校の先輩でもある横手のことを思い、奮起したことがこの好結果につながったものと思います。

牟岐剣友会新聞(富岡西高校OB会報)

より抜粋

## 全国高等学校総合

### 体育大会に出場して

富岡東高校三年 賀川 由美



私達は八月二日から四日まで山梨県甲府市で開催された全国高等学校総合体育

大会に出場しました。「かけぬける夏 風をきれ山梨で」のスローガンの下、全国各地から代表剣士が小瀬スポーツ公園武道館に集まりました。

私達富岡東高は、昨年度第三位という成績を残しているため、今年も上位入賞を目指し日々努力してきました。試合開始が近づくと、私達の緊張と不安は高まっていききました。しかし、皆で一悔いの残らない試合をしよう。」と誓い合い、チーム一丸となって予選リーグに臨みました。

予選リーグ初戦は、鹿児島県の神村学園との対戦です。一試合目ということで、少し硬さを感じながらも5対0とチームワー

クで圧勝しました。続く次戦では、遠征などで何度か剣を交えている群馬県の群馬女子でした。お互いの手の内を知っているだけに苦戦したが、2対1で勝利をつかみ、リーグ二戦全勝で予選を突破することができました。

二日目は、いよいよ決勝トーナメント一回戦、静岡県代表の磐田西高との対戦となりました。結果は3対1と予選に続き逆転勝ちでした。今まで私達に欠けていた粘り強さが出てきたように思われました。

三日目。強豪山形県代表、左沢高校との対戦となりました。左沢は、先鋒に昨年の個人覇者をおき、先手必勝を狙っていました。一進一退の攻防となり、終始リードして大将戦となったが、延長で相手に一本負け、勝負は代表戦へと持ち込まれました。相手は、もちろん昨年個人覇者を持ってきました。私達のチームは、大将の坪井さんです。試合場では、瞬も気の抜けない、緊迫した空気が流れていました。その時、坪井さんが相手から鮮やかな面を奪い、ベスト4進出を決めました。

そして準決勝では、宮崎県の宮崎北との対戦でした。勝負は大将戦となりました。結果は惜しくも本数負けで、初の決勝進出はなりませんでした。

しかし昨年同様、第三位に入賞できたことは私にとって何より大きな喜びでした。この大会を振り返ってみると、一戦一戦が息詰まる戦いの連続でした。私の一生の中で忘れることのできない大会となると思います。剣道を通じて、私が経験したことは、これからの人生の中で大きな自信となることでしょう。

そして、ここまで私を御指導してくださった監督の先生や先輩方に心から感謝します。また、共に苦しい練習に耐え、お互いを励まし合いながら成長してきた仲間を得たことを幸せに思い、それを与えてくれた剣道にも感謝の気持ちで一杯です。本当にありがとうございました。後輩の皆さん、日々の練習は苦しいと思いますが、先生の教えに従ってこれからはがんばって下さい。今後の活躍を心から祈っています。

## 全国教職員剣道大会

に出場して

城北高校教諭 福多 雅英

平成八年八月十日、静岡県焼津市総合体育館に於いて、第三十八回全国教職員剣道大会が各都府県の代表選手を集め盛大に開催された。

大会は団体戦と個人戦があり、私は個人戦の高校・大学・教育委員会の部に出場した。個人戦に出場したのは、三年ぶり六度目であるが、いつのまにか出場選手中年長順に数えて五番目であり、ついこの間までインターハイや大学の剣道界で活躍していた若い選手達も出場していて、時の流れの早さを感じた。昨年はこの大会前にアキレス腱断裂で入院していた為に出場できなかったし、本格的に稽古ができるようになったのも四月からであったので、試合に勝つという自信はなかった。しかし、そんな不安な気持ちより、試合に出場できる喜び、稽古できる喜びや、多くの方々にも励まされ、

支えられているんだという思いが強く、大変充実した気持ちで試合にのぞむことができたように思う。

今回の対戦で特に印象に残っているのは、三回戦の佐藤選手（宮城）、準決勝の田島選手との試合である。佐藤選手は、大学を卒業したばかりの本大会最年少選手であり、昨年の全日本剣道選手権大会にも出場した選手で、足さばきが良く打突も速いうえに、守りも固く粘り強いタイプであった。時間内に勝負がつかず延長戦五回目に店頭面で勝つことができたが、何度か一本に近い打突を受け、たまたま私に勝運があっただけ



監督中尾誠先生とともに

であり、大変勉強になった試合であった。準決勝の田島選手は昨年まで警視庁の主力選手として、全日本選手権大会や警察大会等各種全国大会で活躍、今年から創価大学の職員となった選手である。彼の試合はTV等で何度か見たことはあるが、対戦するのは初めてで、一度試合したい選手であった。延長の末に小手を打たれ敗退したが、田島選手のうまさ、間合のとおり方、打突後の防衛、勝負どころでの決め技、試合での集中力等学ぶ事がたくさんあった。この試合で学んだ事や反省した事が、二カ月後の広島国体で少しはあるが生かせたと思う。

本大会では五年ぶりの決勝進出は果たせなかったが、二位に入賞することができた。これも監督の中尾先生はじめ選手団の先生方や剣道連盟の稽古会で御指導いただいたいる堀江先生はじめ多くの先生方、いつも稽古の相手をしてくれている剣道部の生徒達のおかげであり、職場の先生方

の御理解、家族の協力のおかげであるところから感謝している。お世話になっている方々や支えていただいている皆様にも少しでも恩返しができるよう、微力ではあるが、本県剣道発展のために貢献できればと考えている。

試合結果は次の通りです。

- 一回戦 不戦勝
- 二回戦 ① 一本勝ち 鎌倉（京都）
- 三回戦 ② 一本勝ち 佐藤（宮城）
- 四回戦 ③ 一本勝ち 稲本（熊本）
- 準決勝 一本負け ④ 田島（東京）

## 全日本少年剣道錬成 大会に参加して

徳島錬心館 谷 口 順 子



私が、  
子供と初  
めて全日  
本少年剣  
道錬成大  
会に参加  
させても

らったのは、長男が小学六年生の時、今から九年も前のことです。それから、二男、三男と同じ様に参加させてもらいましたが、初めての時は親も子も緊張して、想像以上に広く大きな日本武道館を見て、「アラーここで試合をするんだ」と何ともいえない気持ちになったことを覚えています。

結果は三回戦で負けてはしまいましたが、子供達にとって、いつもの試合とは違う何か自信を持ったものを得た様な気がしました。今年は一男が中学三年生となり、中学

生団体の部に出場、結果は良くありませんでしたが、対戦相手の試合を見ていて、強いつと感じていたので、子供達は子供なりに納得のゆく試合をした様で、私にはサッパリした好い顔に見えました。

どのような試合であっても、試合となると緊張するものです。ましてあの大きな日本武道館で、全国から集まってくる剣士の顔を見ただけで、自分より強くて勇ましく感じられ、ますます緊張して行く子供の様子がよくわかりました。でもそれは、自分の子供だけではなく、相手から見れば、また同じ事がいえると思います。後は試合で自分の力を出しきることが出来ればそれだけでいいと思っていました。勝っても負けても、何か得るものはあります。その一つ一つを自然に自分のものとし、大きく人間として成長してくれば、親としてこんなうれしいことはありません。子供には楽しいことはもちろん、苦しいこと、悲しいこと、いろいろな経験をしてもらいたいし、させてやりたいと私は、常日頃思っております。日本武道館で剣道の試合が出来るなんて、

剣道をやっている者にとって、夢の様に思えます。いくら強くても、望んでも出場出来ない人達がたくさんいる中で、私達は本当に光栄に思っております。そして、子供にとっても日本武道館で試合をしたという、心の中の思い出は一生忘れられない大事な宝物となって残ると思います。試合が終わると、いつも夕方からデイズニールランドに行くのが恒例となっていて、あの緊張した試合の時の顔から一変して、笑顔、笑顔の楽しそうな顔と笑い声、そんな子供達の顔を見てみると、本当に東京に来てよかったとつくづく思いました。でもこれは、子供達が常日頃つらい苦しい練習をしたからこそ、私達親もこんな楽しい良い思い、素晴らしい旅をさせてもらったのだと、感謝しなければいけないと思います。三泊四日の旅行ですが、その間、子供達も親も日頃出れない親睦を深めるいい機会だし、いろいろなことを話し合い、楽しく、喧嘩もせずに行きました。試合のことだけではなく、人間関係においてもいい勉強にもなるし、出来る様で出来ない経験もさせても

られましたし、親子ともども一歩前進出来た様な気がしています。今、二男が中学一年生、あと一回日本武道館で試合が出来るかも知れません。その時のことを思うと、今から胸がワクワクして、自分が試合をする様な気持ちになり力が湧いてきます。私も大澤先生に剣道を習って数年しかありませんが、一本を決めることがどんなに難しいことか、「あんな面が打ちたい、あんな小手が、あんな胴が打ちたい」と、その他にも思うことはいっぱいあります。でも休が思う様には動かず、悪いクセがなかなか直らずで、気ばかり焦っております。でも目標を持ってこれから先も、親子共々ががんばっていききたいと思っております。

## 第三十四回四国

### 中学総体に優勝して

相生中学校教諭 川尻 仁和



県中学総体で男女優勝し、全国大会への切符を手にすることができました。内容

は、一試合目から接戦ばかりでしたが、無事に優勝でき、うれしさよりもほっとしたというのが正直な気持ちでした。

四国大会は、剣道の場合、他の種目と違い、勝てば全国大会出場ということではないので、案外気楽に参加できました。男女とも予選リーグ突破を目標に県総体後、稽古に汗を流しました。当日、男子は予選リーグ一位で通過し、決勝トーナメント一回戦（準決勝）は、同じ徳島の阿南第一中と対戦。県総体の決勝戦の再来でした。県で勝ち、四国大会で負けてはいけないという意地もあり、生徒共々、一層気合いが入る試合になりました。予想通りの接戦でしたが、

苦しいこの試合を選手の奮闘でどうにか乗り切ることができ、結果としては初優勝を飾ることができました。

一方女子は、予選リーグ二位で通過し、決勝トーナメント一回戦（準決勝）は、山田中（香川）と対戦。今まで県外遠征等で何度か対戦した相手でしたが、残念にも完敗。結果としては三位となりました。

男女とも、この四国大会でいいはずみをつけて全国大会へと考えていただけに、予想外の収穫に、また、生徒の大きな成長を確信できた大会になりました。

全国大会については、男子団体ベスト8、優秀選手に主将の小柏祐三君が表彰されました。女子団体は予選リーグ敗退という結果でした。

最後になりましたが、相生町体協剣道部の先生方をはじめ、中体連、高体連等の諸御指導に深く感謝申し上げます。以上、ご報告申し上げます。ありがとうございます。

## 第二十六回全国中学校 剣道大会に出場して

相生中学校三年 小 柏 祐 三



平成八年八月二日、二十五の二日間、第二十六回全国中学校剣道大会が、愛知

県西尾市総合体育館で開催されました。

「熱き剣士、一途に競え、力と技と真心と」のスローガンのもと、全国から四十八チームが集まりました。

不安と期待でいっぱいだった入場行進。改めて、県代表という実感がわいてきました。

僕達の目標は、予選リーグ突破でした。

予選リーグの相手は福島県四倉中、長崎県島原市立第二中との対戦でした。一試合目は四倉中。県大会、四国大会とは、味ちがう全国大会の雰囲気にもまれてしまい、思うように試合が出来ず引き分けました。二試合目の前に、四倉中と島原第二中が2-

1で四倉中が勝ったのを見たので、初戦のようなことがないように気合いを入れなおし、二試合目に向かいました。3-1で勝

つことができ、予選リーグを突破し決勝トーナメントに進み、トーナメント一回戦で長野県柳町中と対戦し、2-2の本数勝ちでベスト8進出することが出来ました。二日目の準々決勝で地元鶴城中と対戦し、2-3で惜敗し、ベスト4入りは果たせませんでした。

一つの目標に向かって部員がひとつになり、励まし合い協力しあったことは、中学校生活最高の思い出です。ぼくは、中学時代に得た経験をこれからの高校生活に役立てて行きたいと思います。

## 第二十六回全国中学校 剣道大会に出場して

相生中学校三年 栗 本 美 香



全国大会は、県大会や四国大会とは違う雰囲気があると思う。ごく緊張していま

た。でも、チームの仲間と「がんばろうな」と声をかけ合って試合に臨みました。

私達の相手は、静岡県湖西中と岩手県の山田中でした。予選リーグを勝って決勝トーナメントに出場するのが目標でした。

一試合目の山田中との試合では、二勝一敗と試合がもつれて大将の私まで試合がまわってきました。しかし、思うように竹刀が振れず、二本負けをしてしまいました。二試合目の湖西中には0-5で負けました。結果は二敗で、予選リーグを勝つことができませんでした。勝つことはできなかったけど、全国の強い人達と試合ができていい勉強になりました。毎日の稽古は苦しかった

けど、全国大会に出場することができて多くのことを学びました。これからは、学んだことを実践していきたいと思います。そして、もっと強くなれるようにしたいです。

相生 1 (2) (5) 4 山田 (香川)

第26回全国中学校剣道大会 (8/24・25)

於愛知県

富岡東高校三年 坪 井 さくら

全日本女子剣道選手権大会

〈男子団体〉  
予選リーグ

相生 1 (3) (3) 1 四倉 (福島)

相生 3 (4) (2) 1 島原第二 (長崎)

決勝トーナメント

一回戦

相生 2 (8) (4) 2 柳町 (長野)

二回戦 (準々決勝)

相生 2 (3) (4) 3 鶴城 (愛知)

〈女子団体〉

予選リーグ

相生 2 (2) (4) 2 山田 (岩手)

相生 0 (1) (9) 5 湖西 (静岡)

〈女子個人戦〉

二回戦

栗本 (相生) (×) (○) 今井 (長野)

三回戦

栗本 (相生) (×) (○) 粉川 (茨城)

第34回四国中学総体 (8/4) 於徳島県

〈男子団体〉

予選リーグ

相生 0 (0) (1) 1 香東 (香川)

相生 3 (3) (2) 2 宮窪 (愛媛)

相生 4 (8) (1) 1 鏡野 (高知)

決勝トーナメント

一回戦 (準決勝)

相生 3 (3) (3) 2 阿南第一

決勝

相生 3 (6) (3) 1 宮窪 (愛媛)

〈女子団体〉

予選リーグ

相生 3 (5) (1) 1 大方 (高知)

相生 2 (3) (1) 1 中萩 (愛媛)

相生 1 (3) (3) 2 協和 (香川)

決勝トーナメント

一回戦 (準決勝)



初めてこの大会を拜見させていただいたのは、中学三年生の時だった。そして

翌年、運良く出場でき、大会のスケールの大きさに圧倒され無我夢中であった。見るにしろ、試合をするにしろ、常に私の中では目標と憧れの大会である。そして今年も出場でき、たくさんの収穫があった。

今年度から九十六名のトーナメント方式となった。延長になると、従来の規則と異なり、無制限一本勝負になるというルール改定があった。

「負ければ、それで終わり。」

私は目の前の一戦のことしか頭になかった。常にこの言葉を自分に言いかけさせていた。おそらく他の選手の方々も同じ気持ちであったと思う。場内は静かな闘志とひきしまった緊張感が漂っていた。

いよいよ試合が開始された。一回戦から名勝負が続ぎ、見るのに熱中して自分の試合を忘れてしまうくらいの真剣勝負が行われた。私も同じコートで試合をするのに、恥ずかしい剣道はできない。そう考え、不安になっていた。だが、河田先生の

「高校生にしかできない剣道をやってこい。」のアドバイスで、本来の自分を取り戻すことができた。

試合結果 ベスト16

一回戦 坪井 ③③ー 柳清 (富山)

二回戦 ” ④③ー 渡辺 (茨城)

三回戦 ” ④ー 林 (山形)

四回戦 ” (延長) ④ 有馬 (鹿児島)

一回戦は高校生同士の対戦となり、いつものペースで試合ができた。二回戦から四回戦まで全て大学生との対戦だった。私は終始自分の剣道をするのを考えた。なんとか二回戦、三回戦と突破できたが、大学生にはなかなか自分の攻めが通用しないと感じた。そして四回戦は昨年の準優勝者との対戦であった。勝ち負けにこだわらず、全国トップの選手とどれだけ試合ができ

るかを考えて試合に臨んだ。相手の選手は試合運びがうまく、力強い攻撃と粘い守りで、私に十分な剣道をさせてくれなかった。それでもなんとか延長に持ちこめた。延長三、四分ごろ私が中途半端な気持ちでつばぜりから引き技を打とうとした一瞬、先にメンを打たれてしまった。悔しさの反面、ベスト16の結果に満足した。

高校生だけの全国大会とは一味違ったすばらしさを実感できるのがこの大会である。とくに正しい構え、姿勢、試合態度は私の良い手本であった。試合終了後、お互いの健闘をたたえあう光景も見られた。こんなすがすがしい光景もこの大会でしか見ることはできない。

今回で二度目の出場ではあったが、前回同様いろんなことを学べた。技術面のみならず、礼儀や、相手に対する敬意など、今後の自分の剣道の課題を見つけることができた。「何度でも出場したい」という気持ちにさせてくれる魅力的な大会だと思う。

## 全国郵政武道大会

に参加して

徳島支部 木下文江

全国郵政武道会主催による、第三十八回全国郵政武道大会が平成八年九月十五日、加賀百万石の城下町金沢において開催されました。今年も北は北海道、南は九州まで総勢六〇〇名にのぼる選手が参加し、武道を通じて各局の親睦を図ることができました。昨年の団体戦は、東京郵政Aチームが接戦の末、優勝をものにしました。四国郵政チームは、一昨年に引き続きベスト8止まりであり、今年こそはもうひとつ勝ちたいという気持ちでいっぱいでした。

初戦、本省Cチームには3-1で勝つことができ、二回戦の東京郵政Aチームには2-2で代表戦となり接戦の末、勝利をものにすることができました。このまま波に乗ることができれば、とっていました。健闘空しく、三回戦、東海郵政Aチームに4-1で敗退してしまい、また来年に課題

を持ち越す結果となりました。

その後個人戦では、新たな気持ちで臨み、とりあえず初戦突破を目標に試合に臨みました。ところが一回戦、熊本の東西選手に不用意に出たところをメンを先取されてしまいました。しかし逆に、焦っていた気持ちがなくなり冷静に相手を見ることができ、なんとか勝ちにつなぐことができました。その後は、落ちついて自分のペースで試合ができ、決勝戦まで進むことができました。決勝戦では、東京郵政の平選手と対戦し、思い切った攻めができ勝つことができました。

今までは、試合前に心の中で、様々な事を思い描いていました。今回は無心で冷静に試合ができ優勝できたので、とてもうれしかったです。

プレッシャーや緊張感もありましたが、その中で、いかに楽しく剣道をするかは、剣道に対する気持ちの持ち方によると私は常々思っています。楽しみは人から与えてもら



のではなく、自分で作るもので、目標に向かってそれを達成しようとする行動が、剣道を楽しくしていくのだと思います。今後、日々の稽古の中でも研究心を持ち、目標を決めて取り組んでいこうと思います。

そして最後に、仕事に対しても同様に、剣道や人間関係を通じて自分をより一層磨き、一人でも多くのお客様に満足していただけるサービスができるよう、活気ある職場づくりに取り組んでいきたいです。

(※なお、木下さんは、第三十七回大会に続き、二年連続の優勝となります。)

## 全日本居合道大会

監督 平尾 勝美



一朝顔や 釣瓶と  
られて もらい水一  
何とも心優しい句で  
ありますが、此の句

の作者、加賀の千代女の生誕の地として知られる松任市は、金沢市より福井県寄りにJRで約十分程の所にあります。

第三十一回全日本居合道大会は、ここ松任市総合運動公園文化体育館に於て、十月二十日盛大に開催され、全国四十七チームの精鋭が、それぞれ各都道府県の代表として、熱気あふれる真剣勝負を展開しました。

徳島県の代表選手は、五段の部・斉藤吉明選手、六段の部・吉岡修一選手、七段の部・高橋憲司選手が出場しました。監督席について、手に汗する想いで見守る中に各選手冷静に存分の試合を致しました。気迫も十分、寸分の狂いもなく所定の技を、規定時間内に抜き終え、手応えを期待しつつ、審判員の判定を待ちましたが、残念乍ら上

位進出は成りませんでした。然し乍ら各選手とも、2-1の判定で本当に紙一重の差で、3-0の負けはありませんでした。「後一歩」と言うのが試合後の実感であります。

特に感じたことは重厚な中に軽妙なる動作、そして、あくまでも手の内の効いた切れる運刀、残心の気位等、綿密に仕上げた対処すれば上位進出も決して夢ではありません。達成出来るものと信じて居ります。

居合道部員一致協力して努力を重ねて行けば必ず近づけるものと存じます。今後先生方の御協力を得て、皆さんで仲良く頑張り、本県居合道の戦力向上に努めて参りたいと存じて居ります。

選手をはじめ個人演武に出場されました皆様、本当にご苦勞様でした。

## 全日本剣道選手権

### 大会に出場して



警察文部 吉田茂生

平成八年十一月三日、日本武道館において全日本剣道選手権大会が開催され、

私は本県代表選手として出場しました。今年一番の目標であった全日本選手権大会であっただけに、本大会出場の前を手にしてから本番までの四か月間、はやる気持ちを抑え稽古に励みました。大会が近づくと、徳島の看板を背負っての出場という重圧に押し流されそうになりましたが、「平常心」を心掛け調整しました。

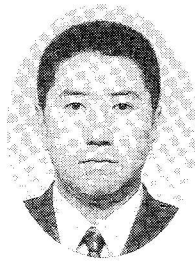
いよいよ大会当日。日本武道館では警察大会で何度か試合をして慣れていたつもりなのですが、本大会の雰囲気には独特のものがありました。開会式を終えてから試合の順番が来るまでの間、緊張の連続で、一生懸命気持ちを落ち着かせ出番を待ちました。

そしていよいよ私の出番。相手は、静岡県代表の小山選手。各種大会に出場し、剣道日本等の雑誌にも名を連ねている方で、相手に不足はないという気持ちで試合に挑みました。主審の「始め」で立ち上がった私の足は、まるで自分の足でないように浮き上がった状態で、全く地に着かず、完全にならなくなった状態。もう立て直しは利きません。あとは独り相撲。小山選手の得意技「小手すり上げ面」（後で聞いた話）で二本連取され勝負あり。大事な試合で力を出し切れないまま負けた自分に腹立たしさを覚え、控え室ではしばらく放心状態が続きました。その後次第に落ち着きを取り戻し、試合を振り返ってみましたところ、「あそこはこうしておけばよかった」という場面が何度かありましたが後の祭り。

今後の教訓としては、いかに本番で強くなれるか。精神面を鍛え、また研究心をもつて人一倍稽古することが私の課題だと考えています。そしてもう一つ、「攻めの剣道」を身に付け、自分も、また相手も納得する打突を身に付けたいと思っています。

## 中倉旗（内閣総理大臣杯） 争奪剣道選手権大会に出 場して

徳島支部 玉田晋作



今年で十七回を数える中倉旗争奪剣道選手権大会は、平成八年度の全日本、警

察、教職員、実業団、学生の各全国大会優勝者と、アメリカ、カナダ、台湾の各国代表選手、それに都道府県の代表選手が一同に集まり、平成八年十二月一日、東京都国立市民総合体育館に於いて開催された。この大会は全剣連の公式戦ではないが、全日本クラスの選手が多く出場することや、幅広い年齢層の選手が出場し普段見ることのできない対戦も多いことから、毎年注目される大会である。この栄えある大会に徳島県を代表し出場できるというのはこの上ない喜びであり、稽古を続けてきて本当によかったと思うと同時に、代表として立派

な試合をしたければと身の引き締まる思いで大会当日を迎えた。

一回戦は東京の中村選手と対戦。少し緊張して体が硬くなっていたが、先をとって得意の出小手を連取。いつもスロースター

トの私には珍しく最高の滑りだしとなった。

二回戦は北海道の稲川選手。大型の上段選手である。一進一退から中盤に小手を先取。その後は相手の反撃をしのぎ一本勝ち。まずは上々の出来で午前の部を終了した。

三回戦は山口の稲田選手。立ち上がりの初太刀、稲田選手の思い切った面が私の面金を捕らえる。私はのけ反ってぎりぎりかわじたかと思ったが、そこはさすが範十八段の審判の先生方、完全な私の死に体を見逃してはくれなかった。その後必死の反撃も平常心を失った攻撃では相手を崩すことはできず、そのまま時間切れとなり、三回戦敗退という結果となった。

自分の試合が終わってからは、観客席で決勝戦までじっくりと試合を観戦することができた。警視庁の岡本選手と大阪府警の石田選手との対戦となった決勝戦は、互い

に中心を攻め合し相手を崩して面を打ち込むことに終始した迫力ある好試合となった。結果は岡本選手が石田選手を二十分の激戦の末破り初優勝を飾った。

今こうして大会を振り返ってみると、私の剣道の良い面も出し切ることができたが、悪い面もさらけ出した三試合であった。結局はまだまだ修行が足りないということを改めて痛感した。あの決勝戦を争った両雄のように強く正しい剣道を目指し今後も精進するつもりである。

最後になりましたが、このような機会を与えてくださいました剣道連盟の諸先生方に心より厚く御礼申し上げます。

## ねんりんピック'96

### 宮崎大会に参加して

剣道監督 三木 只雄



十一月八日九時三十分より、本県選手団並びに役員等を加え、凡そ一八〇名位

が県庁大会議室に集い、結団式が行われました。十時十五分バスにて出発、大阪伊丹空港に向かい、空路にて鹿児島へ到着。宿泊は霧島国際ホテルでした。翌九日朝、宮崎県総合運動公園にて「太陽の国、ひろく長寿の夢ページ」をスローガンに総合開会式が挙行されました。常陸宮御夫妻御臨場をいただき厳粛盛大な開会式に参加できる光栄に浴しました。

式後は各競技種目会場に向かい、我々剣道は、宮崎県高千穂町の会場にて行われました。十日の開始式には大会長でもある高千穂町長より日本民族発祥の地、神話と伝統の町、又剣道の町、高千穂へようこそと

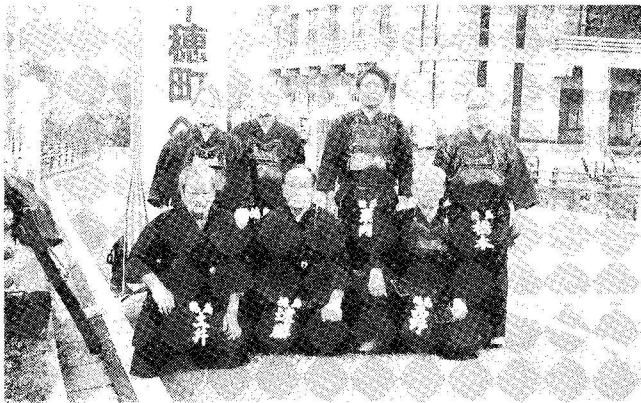
の歓迎と、ねんりんピック史に剣道の町に相応しい立派な試合と健闘されんことをとの挨拶がありました。

剣道試合は、三チームの予選リーグ戦で一位のチームが、決勝トーナメント戦に進出するようになっています。参加チームは、都道府県と政令都市合わせて五十八チーム（宮崎県は三チーム）人員は凡そ三七〇名。予選リーグ一回戦、本県は石川県と対戦、選手諸士の健闘により快勝。二回戦は福岡県と対戦、良く頑張るも、残念ながら一本で惜敗。決勝トーナメント進出は出来ず、無念でした。しかし、いずれの選手ともに流石に永年に涉り修練された方ばかりで技量は紙一重の観でありました。選手各士には大いに健闘して頂き、敬意と感謝を表す次第であります。

次に高千穂町の剣道に対する取組について、参考までに紹介致します。先ず、町立の武道館ですが、流石に剣道の町と言うだけあって道場が立派で大きいことです。徳島中央武館と比べて広さに於いて二倍余りあります。又、剣道への取組について、中

学生に聞いたところ、一週間の内三時限の体育の授業は全員剣道を行い、部員は毎日猛稽古を実施しているとのことでした。大会長が剣道の町と言われたことが、なるほどと伺われた次第でした。

以上冗長にて要を得ませんが、報告させていただきます。



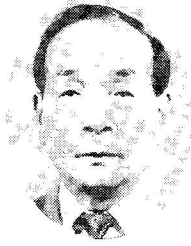
徳島県選手団

後列左より 糸谷、高田、東内、橋本  
前列左より 土井、遠藤、西野

## 第九回全国健康福祉

### 大会に参加して

剣連会長 遠藤一美



平成八年十一月八日よりの全国ねりんピック宮崎県大会に参加させて頂きました。

した。午前九時三〇分、徳島県庁において結団式があり、健康に注意して怪我のないよう頑張ってお下さいと励ましの言葉をいただきました。その後、バス4台に分乗して伊丹空港へ、さらに空路にて九州へ向かいました。

十一月九日は宮崎県総合運動公園にて常陸宮殿下をお迎えして開式が行われました。地元知事より「太陽と緑の国宮崎へようこそ！ 知識や経験を出し合い素晴らしい時間を過ごして下さい！ また、宮崎は国際観光リゾートの県です。素晴らしい交流大会でありますように！」との挨拶をいただきました。また、この大会が生涯を豊

かに暮らせる長寿社会の中で楽しい思い出と成ることを期待している旨のあいさつを多くの来賓の皆様から感激の言葉として頂きました。私達徳島県剣道チームは、予選を突破出来ませんでした。全国の剣友と数年ぶりに会い、昔話に時間のたつのを忘れたひと時もありました。

十一月十二日には、宮崎空港から伊丹空港を経由して徳島空港へと帰って参りました。この大会に参加して九州山脈の素晴らしい山々、そして大自然の断崖を濯う光景に感動しました。さらに、高千穂の町の町立武道館の立派さにびっくりさせられました。もちろん、町民全体が私達競技者を手厚く歓迎して下さいたことは言うまでもありません。

平成十五年に決定しています徳島県でのねりんピックには徳島県一丸となって取り組まねばと思いました。今から、先進地の視察と資料を求めながら、他県にない阿波の国の歴史と文化の持ち味を生かした創意工夫をこらしたものにしなければなりません。豊かな四国の姿を伝えて行きたいも

のです。

今後、会員皆様方の知恵を借り、御協力を頂きながら、開催時期までの間一生懸命対策を生み育てて行くことを決意した次第であります。



三木監督と徳島県選手団

# 平成八年度

## 高齢者剣友会大会報告

徳島県高齢剣友会

理事長 西野 四郎

(一) 第十一回徳島県高齢者剣道交流大会開催

日時 平成八年四月十二日(土) 九時

場所 県立中央武道館

東京から全日本高齢剣友会松島猛副会長、堀ノ内勇吉理事長外三名、並びに高知からは土佐生涯剣友会森本正郎先生外九名の先生方のご臨席を頂き、華々しく大会の幕は切って落とされた。本大会は来る十一月八日(十二日)、全国健康福祉祭宮崎大会が高千穂町立武道館にて挙行されるが、その予選を兼ねた大会である。

勝浦守大会長の挨拶に続き、松島副会長の来賓祝辞を賜り、演武に入る。

一 日本剣道形

打太刀 株木芳夫 教士七段

仕太刀 南 充美 教士七段

今回の剣道形は、平成七年九月に広島で株木芳夫先生、平成七年十一月に東京にて南充美先生が見事七段に合格された記念にお願いした。実に、気魄のこもった熟技溢れる演技であった。

二 試合

① 団体

優勝	阿南A	西岡	侃	中山	啓男	遠藤	一美
準優勝	板野西	川井	豊吉	高松	実	糸谷	文雄
三位	徳島A・徳島B						

② 個人

	特組	A組	B組	C組
優勝	蝦名久作	早川一也	遠藤一美	中山啓男
準優勝	平岡竹雄	中西敏治	高田豊	西岡侃
三位	西野・一村	西山・土井	高松・菱田	東内・有賀

午前中に団体戦・個人戦が終り、昼食後十三時半から東京・高知・徳島の三者親善交流試合を開始す。

第一試合

高知対徳島 五勝三敗二引分け

徳島の勝ち。



団体優勝 阿南A

第二試合

東京対徳島 一勝一敗三引分け  
勝本数同じで引分けに終る。

第三試合

高知対東京・徳島混成  
四勝三敗三引分け混成チーム勝ち。

以上の成績で、徳島が優勢の内に親善交流試合を終える。最後は四十分間の三者入

り乱れての交流練習を楽しみ、快し汗を流した。お互に、親睦を深める事が出来たことを喜び、夜の懇親会場グラウンドパレスでの談笑に花を咲かす事を約し、大会は無事滞りなく終了す。

大会終了後、総会を開き、勝浦大会長より十一月の全国健康福祉祭宮崎大会の選手が発表される。

監督・三木只雄 大将・西野四郎  
副将・早川一也 中堅・糸谷文雄  
次鋒・高田 豊 先鋒・遠藤一美  
交替選手・上井 司、近藤康次

## (二) 第五回高知県総合健康福祉祭

### 第八回土佐生涯剣友交流大会

みだしの大会が平成八年五月二十二日高知県立武道館で開催され、午後からの交流剣道大会に九名が参加しました。

一村喜佐男・早川一也・高田豊・  
遠藤一美・東内勉・土井司・  
近藤康次・西野四郎

(三) 第十八回全日本高齢者武道大会に参加  
今年で早くも第十八回大会が、剣道三七二名、銃剣道一〇九名、なぎなた七八名、総計五五九名が日本武道館に頗る元気な姿で勢揃い、大太鼓を合図に華々しく開催された。

時は平成八年六月三日(月)午前九時である。徳島は第二回から連続十七回目。毎年十五名前後の参加であって、日本武道館ではすっかりお馴染みとなっている。

それもその筈、戦跡を振り返ってみると、第十回大会では勝浦守、第十四回大会には平岡竹雄、第十七回大会は遠藤一美の諸先生が全国制覇を遂げている。故清原栄先生が第六回大会、遠藤一美先生が第十四回大会でそれぞれ準優勝に輝き、第三位には、故清原栄・故阿部国太郎・熊本淳一・蝦名久作・西野四郎・遠藤一美の諸先生が入賞と全く素晴らしい業績をあげている。

又、全日本高齢剣友会からは貢献度を買われ、日本剣道形を第五回大会で打太刀・故清原栄、仕太刀・中川虎雄、第十七回大会に、打太刀・勝浦守、仕太刀・西野四郎

かまては舞亡て漢武を開き、以後に伝説して  
いる。徳島県高齢剣友会にとっては大きな誇りに思っている。その陰には、十年以上連続参加された次の先生方の弛まざる努力と精神力が自然によい結果となり、大きな励みとなっている。故清原栄・故阿部国太郎・故山田富康・勝浦守・西野四郎・高橋静夫・平岡竹雄・一村喜佐男・吉田祖・阿部全司・近藤康次・遠藤一美、以上の十二名の先生方である。

さて本年度、第十八回大会は余りにも芳しからぬ本意で終りましたが、捲土重来を期し、来年に向け精進することを誓う次第である。

成績は次の通り  
五回戦 早川一也・四コート決勝戦で敗退  
三回戦 一村喜佐男・平岡竹雄・南 充美・  
遠藤一美・中山啓男

(四) 第三回徳島県健康福祉祭'96とくしまね  
んりんピックに参加  
徳島県・財団法人とくしま「あい」ラン

ド推進協議会主催のみだしの大会が平成八

年十月十九日(上)、秋晴れの徳島市民運動場で総合開会式が開催された。

参加種目は卓球・テニス・ソフトテニス・ソフトボール・ゲートボール・ペタンク・弓道・剣道・グランドゴルフ・ソフトバレーボール・囲碁・将棋の十二種目。

剣道は十時から中央武道館にて開始す。主催者の「あい」ランド推進協議会の挨拶はなく、勝浦守高齢剣友会長が平成十五年(七年後)には、徳島県が第十六回全国健康福祉祭とくしま大会が挙行される事が既に正式決定である。当然、徳島県剣道連盟の一大行事の一つであることには間違いはない。そこで、徳島高齢剣友会としてはこれに備えて、今から本腰を入れて充実した新しい組織作りに取り組まなければならないと力強く挨拶がなされた。

直ちに演武に入り

一 日本剣道形

打太刀 有賀秀敏教士六段

仕太刀 西岡 侃 五段

阿南支部両先生のお互に気の合った堂々たる素晴らしい剣道形が披露された。

二 試合

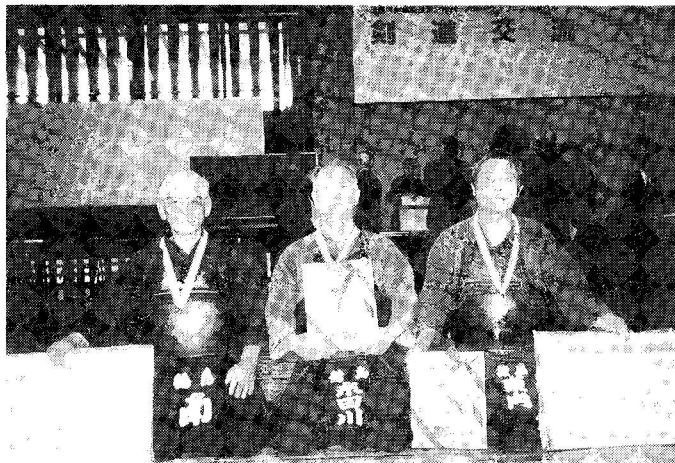
成績は次の通り

団体

優勝	徳島B	東内	勉	南	充美	糸田川美子男
準優勝	阿南A	西岡	侃	中山	啓男	遠藤一美
三位	小松島・海部					

個人

優勝	三木 只雄	A 組
準優勝	蝦名 久作	B 組
三位	西野・田村	C 組
	高田・阿部	
	佐藤・中山	



団体優勝 徳島Bチーム

# 大会所感

## 相生町でのNHK ジュニアスポーツ教室

丹生谷支部(相生体協剣道部長)

湯城豊勝

当相生町はご存知のように非常に剣道の盛んな土地柄であります。この度、NHK徳島放送局のご尽力により、相生町合併四十周年記念行事として、平成八年十一月十日(日)に表記の剣道教室が開催されました。講師には、矢野博志先生(国士館大学教授)と木原資裕先生(鳴門教育大学助教)をお迎えしました。そして、矢野先生を中心とした剣道教室が開かれました。その時の様子と感想をここに報告させていただきます。

矢野先生が米県されるということで、八日には県剣連の練習会が開かれたと伺って

おります。九日には徳島市で打ち合わせ会が行われ、矢野・木原両先生、NHKよりは前田・渡辺さんを交え打ち合わせおよび懇談をしました。私は矢野先生にお会いするのは初めてですが、そのお人柄は優しさで厳しさを兼備したすばらしい先生であります。また、剣道発展に情熱を傾けられ、世界中を駆け巡る超一流の先生に接する機会が得られたことに感激するとともに、剣道に打ち込む姿勢に対して非常な感銘を受けました。

さて、当日は一三時三〇分より一六時三〇分まで行われ、対象は町内の小学校五、六年生と中学校一、二年生の合計五十数名です。指導内容は、まず剣道を始めた動機などの質疑応答ののち、基本の重要性についてのお話があり、いよいよ竹刀を持った指導になりました。姿勢・構え・足さばきの基本動作、空間打突および素振りへと進み、つぎに剣道具を着用して基本動作から対人的技能へ移行していきました。切り返しから始まり、一本打ちの技(しかけていく技)、一・二段の技(連続技)・払い技、



出ばな技・引き技、応じていく技(すり上げ技・抜き技)と進みました。それぞれの指導には、きめ細かな適切なアドバイスがあり見学に来ていた人たちも感心して聞いていました。最後には打ち込み稽古および掛かり稽古と進み、元立ちになっていただいた人たちによる互角稽古で終了しました。

私も指導者の端くれとして、阿南高専の剣道部顧問をさせてもらっていますが、いろいろと学生指導の面で参考になりました。特に基本技の面の三段打ちの方法は、正しい打ち方を教えるのに効果があり、小・中学生には少し難しいが、竹刀の表・裏を使った技が大いに参考になりました。例を挙げれば他にも枚挙にいとまがないくらいです。私は残念ながら工学系統の学校出身で本格的な剣道の指導を受けていません。したがって、学生を教えながらも指導のポイントがつかめていなかったのですが、今日の講習会でヒントがつかめた感じがします。また、おそらく敵しい練習に耐えることはできなかったとは思いますが、このようなすばらしい指導者に教えられた人たちを羨ましくさえ思ったのも実感です。わずか半日でしたが、非常に有意義な剣道教室でした。子どもたちも今日の講習会を記憶に残しつつ、ますます頑張ってくれるものと信じています。

講習会の数日後、丁重なるお手紙をいただき、その中に「受講者の皆様、基本が止しくできておられ、素晴らしい剣道にて感

銘しました。一という文が添えられていたことを付記しておきます。

最後になりましたが、矢野・木原両先生、練習では元立ちになっていた国士館大学OBの西谷・富田・村井・白木各先生、町内外からも駆けつけていただいた先生、最初から最後までご尽力いただいたNHKの方にも感謝しつつご報告を終わります。



## 随想

### 雑感二つ

剣連副会長 大沢孝彰



平成八年十月二十  
六日と二十七日、鹿  
児島市で開催された  
九州地区女子剣道講

習会に剣道形担当の講師として参加しました。講習生は九州各県から三段・四段・五段の色々な職業の女流剣士が五十余名集まり、日本の剣道は女性の力でとの意気込みを感じる講習会でした。

九州へは今年も福岡の六段審査会に審査員として、また、長崎での全日本東西対抗剣道大会の前日の全剣連理事会に出席のため渡り、今年三回日でした。

九州とは大変縁があり、最初に行ったのは昭和四十五年三月末、亡父の発案で木頭

鎌心館の仲間十二名程で三台の車に分乗して愛媛県八幡浜から大分に渡り、宮崎（小山田先生の神武館）、佐賀（故大麻先生の霊雨堂）、福岡県久留米（末次先生の武揚館）、熊本（故紫垣先生の竜驤館）、最後に鹿児島と、道場を中心に約一週間の武者修行でした。当時は、まだ一般人の武者修行（遠征）は珍しく、各地で本当に親切な御指導と歓迎を受けました。

この遠征の模様を亡父が一冊の小誌にまとめ残して居りますが、各地での試合練習と稽古が眼のあたりに浮んで来ます。特に印象に残っているのは、久留米武揚館館長末次正尚先生（現教士八段）が試合の相手をしてくれましたが、もう一人大きな病院の院長で外科医であられる熊丸治先生（現範士八段、館長は私より若い方ですが、熊丸先生は私より十才程先輩の先生）が、もうすぐ手術が終わるから少し待っていて下さいと電話あり、やがて息せき切って飛んで来られ、私と試合をしてくれました。何分間か大激戦をやり、引き分けだったと思いますが、ほんとうに有難い御指導でした。

鹿児島は武道館で最後の稽古が終り桜島を見学しました。その時、「我が胸の燃ゆる想いに比ぶれば煙は薄し桜島山」この祖国を思う情熱の歌を思いおこし、感極った事を思い出しています。

その後、昭和四十七年の鹿児島国体を含め、九州へは数え切れない位、大会や遠征等で訪れ、武の国での修行をいたしました。

平成八年十一月二十六日、日本武道館で実施された剣道七段審査会へ審査員として出席しました。受審生の中には、さすが六段の難関をクリアされ、その後充分精進されたと思われるほんとうに立派な稽古をされる方が数多く見られました。反面、もう一つだなあと感じさせる方も多く居られました。六段と七段の差とは何処なんだと考えてみました。大変難しい説明で、いわゆる言い難いと言う所だと思えますが、私はやはり稽古の量の違いだと思えます。六段に合格して、「よし、次は七段だ」一発で合格してやろうと言う意気込みで、資格の出る期間ほんとうに精進することだと思えます。一そんな事分っているわーで、稽古

を疎かにしては何回受審しても駄目だ  
と思います。稽古の量に比例して、姿勢・  
態度・技・気迫・気位・気品、そして味が  
出て来るものと信じます。

人それぞれ体形も気(心)も違います。  
それぞれに応じた稽古に精進すれば、七段  
は目の前にあると思います。



## 柳生神蔭流仁の巻

剣連副会長 高下正義



昭和三十五年私が  
三十四歳の時、恩師  
久保勇先生(元剣連  
審議員)から「この

巻物を進呈する、勉強して剣道に精進する  
よう」との事で柳生神蔭流仁の巻物を戴い  
た。秘かに誰かに伝授すべきかも知れない  
が、広く剣道を愛する皆様に公開し、日本  
古来の文化遺産である剣道の心を知ってい  
ただき、参考になればと思ひ筆をとりまし  
た。以下原文の通り紹介いたします。

### 柳生神蔭流 仁の巻

当流先師伝へる所によれば、兵法の  
源は、江戸の人贈從四位下柳生但馬守  
菅原宗矩公に発する也、二代柳生十兵  
衛三敵公より木村郷右衛門尉義邦と中  
す偉丈夫現れ、京大和の地に雷名を轟  
かせたるが、阿州に入って蜂須賀藩中

に柳生神蔭流と申し指南玉える所なり。  
素より新蔭の本流には非ずといえども、  
気合太刀筋共に克く、江戸柳生家の神  
技を明治の聖代に伝えたり。第九代久  
保源次郎利雄に至り、文武両道に精進  
し劍名世に高く門生天下に充つ、是皆  
流祖先師の苦心に成れる兵法の徳也、  
秘巻の初伝を仁の巻と申し中伝を義の  
巻と申し、奥伝を忠孝の巻と申す。  
依って当流の心を知るべきものなり。  
劍の技は相打の勝を以て必勝不敗の  
術となし其の極は無刀を以て道の奥義  
となす。然れば心と腹の修練を重ね真  
の気合と手拳の活用を会得するを肝要  
と致す事、其初は三学と五箇の教にし  
て大の学、小の教となす。三学は身構  
手足太刀是也。是れ即ち当流兵法全般  
の学にして書き盡し難し「五箇」は  
一、身を一重になす事  
一、敵の拳を我肩に比ぶる事  
一、我が拳を楯につく事  
一、左の肘を延ばす事  
一、前の足に身をもたせ後の足を延ば

す事

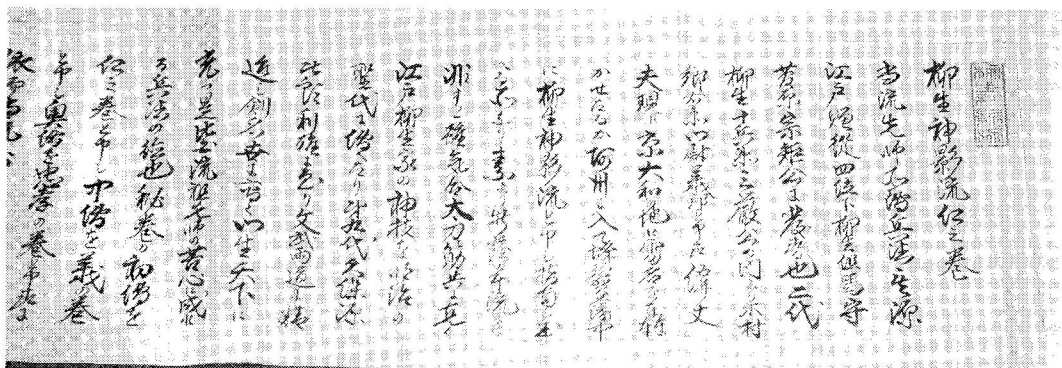
手足身の心持以上五つを忘る間敷き事、  
 太刀は車に始まりて千萬の変化を極め  
 修練年経れば、三学合一の境に入り、  
 氣劍身一致に進み大は克く三軍を統率  
 叱咤し小は克く強敵を制するに致るべ  
 きもの也。右先師所<sup>コノコトヲ</sup>傳<sup>コトヲ</sup>之<sup>コトヲ</sup>通り傳授せ  
 しめるもの也。昭和三十五年三月吉日  
 元祖柳生但馬守宗矩公 柳生十兵衛  
 三藏公 直門人 木村郷右衛門尉義邦  
 門人 川端磯右衛門頼光 門人 近  
 久鹿之頼利光 門人 久保源次郎利雄  
 門人 第十代正統 東京都澁谷区代々  
 木上原町千百十八 大日本忠孝館館長  
 久保義八郎 第十一代正統 徳島県  
 名西郡石井町浦庄 久武館道場館長  
 教士 久保勇 五段高下正義殿

以上の通りであります。私は昭和四十  
 七年全国中堅指導者講習会に参加し、奈良  
 県柳生で一週間受講、柳生家の屋敷跡や、  
 一族の墓が昔のまま残っており、感銘深く  
 参拝しました。宗矩はじめ柳生一族は代々

徳川幕府の剣術の師範として仕え、然かも  
 兵法の指南役として処遇されたと歴史家は  
 伝えております。

徳川幕府三〇〇年の平和な時代を築いた  
 のは柳生の精神の影響があったのではな  
 ろうかと察します。九代久保利雄氏は美馬  
 政雄先生（現剣連審議員）の幼い頃記憶に  
 あるそうです。また久保義八郎氏は麻布獣  
 医学校の教授で、私は麻植中学校時代に講  
 演を拝聴したことがあります。石井町浦庄  
 地区には古くから柳生との交流が多かつた  
 と何かの書物で読んだことがあります。こ  
 の巻物の詳細についての意味は不可解な部  
 分もありますが、私なりに感ずるところは、  
 一つは相打ちの勝ちを以て必勝不敗の術と  
 なす、二つは劍の極意は無刀を以て勝ちを  
 制する心の修練である。

これら諸々の事は古来の劍人の心として  
 現代剣道にも生きて伝わっておるのではな  
 いでしょうか。



## 剣道で学べた負けん気人生

日本インテリアデザイナー協会

名誉会員 新居 猛



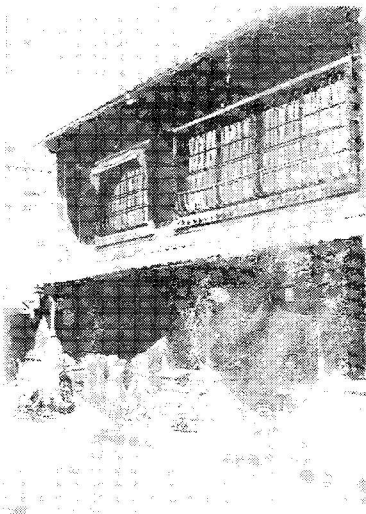
此の度は、堀江先生からのお計らいで、「徳島の剣道」に投稿させていただきます

す。私は明治からの剣道具屋に生まれましたが、戦後GHQの剣道禁止もあって、家具屋と剣道具の二足の草鞋を履かなければなりませんでした。しかし、最近娘に防具の方は委せ切りで、剣道関係の方々には誠に失礼いたしている次第です。

祖父新居儀八は市立図書館の「名鑑」に載るほどの美術骨董商で目利きで江戸まで通っていました。また、父四郎は明治初年からの防具を、名品の分解による独学で、面、胴、甲手、垂を自家で製造する器用な人でした。明治四十年戦前の佐古町二丁目山手西から二軒目（今の佐古一番町二、三）に、西隣り角の母屋から防具専門店で

独立、後に市会議長になられた鈴江里一様ご夫婦にも手伝っていただいていた剣道具屋でありました。

私の生まれは大正九年ですが、私の物心ついた大正の終わりに、佐古の店では皆様にご不便と、今の新町橋に近い西船場に移りました。その時は丁度軍国主義の最中であり、一般の不況をよそに防具屋は多忙でした。当時武徳殿は今の県庁駐車場から、中央公園旧体育館跡に移って、高段者であられた落合慶四郎知事閣下はじめ、今はなき近江、吉本、浜谷、山家、松尾、藤川、西方では久保、石井、須見、南では石丸、浅井の諸先生方ご活躍で、毎晩十時頃まで



西船場に移転した当時の新居武道具店

仕事の尽きなかったものでした。

しかし、そんな剣道具の中に育った私でしたが、初めて防具を着けたのは、同居で武専出身の義兄新居長一の教諭を勤める徳島中学校に入ってからのことでした。それも職人の家に育ったか手先の図工は得意ながら、肩幅の狭いヒョロヒョロノッポで、体付きの恵まれないまま商売柄剣道部に入っようなものでした。

然し自分で言うのもおかしいですが、進学校の徳中では図工の上手は自慢にならず、苦手の予習復習の学科はいい加減に、兄の手前もあって剣道の練習は人一倍やるしかなく、お陰で低学年・高学年県下対抗にも優勝の一員を務め、五年には高島永吉先生から二段の証書をいただいたものです。

そんな勉強嫌いも、よくも防具屋に生まれたもので、同窓の受験地獄の頑張りにも、いささか劣等感に苛まれましたが、卒業ただちの関東軍向け何百組の銃槍防具出荷に、それも紛らすことのできたものです。

そして、昭和十六年五月一日、徴兵検査第二乙種合格で、現役兵より五カ月遅れの

種彦兵衛集とよみました。何時死に別れるかと父母の九州まで送って来てくれました。滅私奉公を誓い、小倉野戦重砲兵聯隊入営となりました。

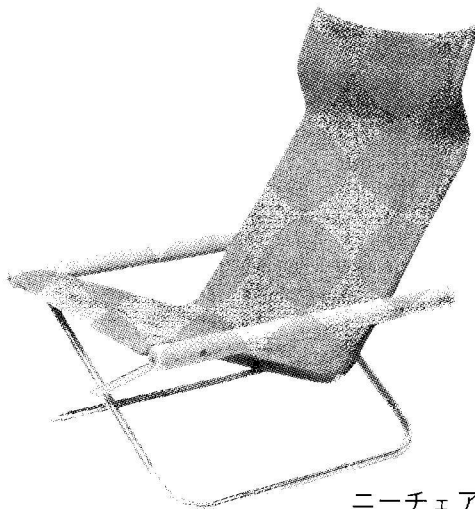
しかし、そんな軍隊も、先の肉弾三勇士や、徳島では梅林空軍少佐の勲功もあり、命はもはやないものと思っていました。剣道の鍛錬もあって、少しはましな働きの出るものと頑張ったのですが、私の場合、幸か不幸か同期補充兵の北支進駐に、事務室用員として小倉に残され、その後部隊も変わって南九州の防衛についていました。徳島の戦禍も知らぬまま、昭和二十年九月二日焼跡の徳島に帰ったのです。そして、家族の疎開先を想像で父の里・石井の高川原だと思い、暗闇の中、石井で借りた白転車で南島にたどり着き、家族全員無事を確かめたものです。

それから私の戦後、実は帰ってすぐ、復員の無理からか発熱の助膜、一年ほど寝ている間にGHQの剣道禁止、それもやむを得ぬと父譲りの器用さで大工修業をし、佐占の工場跡に職業補導所の同窓と木工場

を開設しました。昭和二十六年、元の西船場に木工製品など購う便利堂を建て、父母に見てもらっているうちに撓競技から剣道復活、ようやく昔の杵柄が振える時が来たものです。

そんな中で私も昔の味が忘れられず、昼は大工、夜は週三日の竹原先生の道場に行きました。堀江先生もご記憶でしょうか、警察学校の城東町にあった時、何かの選考で横一列に並んで両端からの三本抜勝負、七人抜いて一番の成績であったことを。これも命を的の軍隊で負けん気を養ったお陰と思いますが、また支部対抗でも優勝旗を長く船場の店に飾らしていただいたものです。

それが私の三十五歳、昭和三十年、何かの試合に立ったものの、咳が出そうで後に下り、咳しながら立合の出来たものの、その頃どうにも体のだるく見てもらった市民病院で結核の診断。二年程の養生でしたが、それ以後は中年からの無理は危険と竹刀は握らず、前述の持って生まれた特技「デザイン三味」。



二一チェアX

今年（平成八年）の芸術新潮五月号に、「外国の真似から始まった日本の椅子デザインだが、海外から真似された最初と言われるのが昭和四十五年につくられた新居猛の「ニーチェアX」と載り、昭和五十七年には徳島の各校でも使われた中3美術教科書にも掲載、またニューヨーク近代美術館のパーマネントコレクションにもなって二十万脚もアメリカなどに輸出したものです。しかし、これも振り返りますに、剣道の勝つためには常に切羽つまった反省、探究、

自信技を身につけてこそその負けん気あった  
と思います。私の椅子にしても、目標であ  
る。「自転車のように誰にも愛される椅子」  
にはまだまだ頑張らねばならない人生であ  
るようです。

## 諸手の剣で歩む道

評議員 来代 真治



待っていることと、  
攻めている（平常に  
して、一触即発の状  
態を保っている）こ  
と、この相反する二つの要素は、自分の中  
に隣り合わせて存在している。

この違いを見抜く達人達は、容赦なく私  
を攻め立てる。負けじと無理に出れば、  
今度は起こりを仕留められる。かといって、  
間を詰めなければ待ってしまう。おろかし  
や我が剣、我が心である。

敬して止まぬ風狂の禅師の言葉に  
とやかくと たくみし桶の 底ぬけて  
水たまらねば 月もやどらず  
まさに、今の私である。

相手の攻めの届かない処に身を置き、相  
手の攻撃は背筋を曲げてかわし、自分の攻  
撃は、たとえ体が崩れようとも「当てるこ  
と」に執着する。初心を忘れた醜い自分の

姿を稽古に見る。

「今日こそは、今度こそは」と面は付け  
るが、しのぎを削ることもせず、安全な遠  
い間からの、心の充実しない連続の技に頼  
る。相手の構えが崩れないまま、自分の恐  
怖心、決断力の無さに勝利せぬままに、た  
だ技によって結果を求める。運良く勝利を  
得れば、自分に嘘をつき、先程までの恐れ  
の心を忘れ、恰も自分が真の勝者であるか  
のごとく振舞う。

心身共に剣の道に入ってから、長短、  
大小、優劣、といった「相対的比較」の中  
でしか存在できぬ我が身に「いったい何が  
勝者なのか」と問いかけつつ、共に汗を流  
し、打たせていただいた先輩、剣友に申し  
わけなく思い、しのぎを削る稽古を目指し  
ている。「私ごとき者に、あなたの大切な  
時間をありがとう」という気持ち忘れな  
い礼をして、稽古に臨みたい。

さて、剣の修行とは行えば行う程、自分  
の至ら無さが見えてくるものようだ。  
少し前のことになる。私にとって初めての  
「都道府県大会」と六段の審査が立て続



けに行われた年のことだ。それらを五月に控えていながら不覚にも私は三月、仕事中に急性肝炎で倒れ入院した。肝機能二千単位以上で歩くこともできず、一口中点滴を打つ状態が続いた。

四月に入り、医者よりトイレまでの歩行を許していただいた私は、それを機会に毎週上曜日の帰宅を、無理にお願いした。その月より始まった、都道府県大会に向けての特別練習に参加するためである。

ところが、このような体では車も運転できず、車に乗せてもらって徳島市まで練習に通った。道具を付けても、立つことさえままならず、しかし周りに迷惑だけは掛けないと思ひ、監督には「風邪です。」と嘘をついた。帰りの道は車の中で寝て少しでも体力を回復させ病室に戻ればすぐに点滴を行う。

稽古がない日は、ベッドの下に隠しておいた竹刀を取り出し手の内の練習をした。(このことは医者や看護婦ももうすうすう知っていたようであるが)

こんな生活を一か月余り続けたが、完全

に回復せぬまま五月に入りとうとう、意を決し医者の制止を振り切った。自主退院、結果的には試合は勝ち、審査は合格と勝ちの幸せを得た。

その時、私は、私が勝つたのではなく、たまたま理にあっていたか、相手が崩れたかにすぎなかったことに気付き、さらに修行を続ける決意が強くなった。

また七段の審査の時も同じように私の剣道が勝っていたのではなかった。躊躇した時、不注意にも私の竹刀の弦が横になっていた。私は少し時間を取って弦を直した。

少なくとも、私はここで動揺していたはずだ。再び構え直し、「始め一」の聲がかかった直後に相手に攻め込まれたら私は総崩れになり、駄目であっただろう。

にもかかわらず相手は一向に攻めて来ない。その内、私の心も冷静を取り戻し、よし、それならと私が相手の内に入ると相手は下がっていった。その時、相手の手元が狂ったかに見えたので、そのまま攻め入って打ち出すと無心で相手の面を切っていた。このように相手が崩れて勝ちを得たのであ

る

審査後、相手の方と話す機会があり、聞くと、私のことを一試験中にタイムをかけた落ちついて弦を直しているすごい人だと感じた。そうだ。相手が私を過大評価したのだ。

私が二、三段の頃、稽古をいただいた後で先生から島田虎ノ助の言葉として聞いたことがある。

我よく君を打つにあらず

君おのずから打たるるなり

剣よく人を打つにあらず

心よく人を打つなり

今になって思えば私の経験したことは、まさにこの通りであった。

稽古をお願いすれば、私ごとき者にも心良く受けて下さる、そういう人が沢山でできた。共に汗を流して下さる先輩や先生方、私の教室に足を運んで下さる人々(中には車で片道三時間の道のりを通して下さる人もいる。)その他にも私の及ばぬ苦を乗り越えて、沢山の人々が共に修行をしている。そのような方々に「我よく相手を打つ」

ことが、はたして理にかなったことであるか。剣道はこのような理不尽を許しはしない。稽古の中で、このことを忘れ「我よく君を一打とうとする愚かな私を様々な方法で知らしめてくれる。

いつの日がくれば至るかわからぬ私であり、また至らぬかも知れないが、心身共に気を抜けない日々である。

また最後に、この度も私に伝統ある「徳島の剣道」に投稿の機会を与えて下さった編集委員の方々に感謝します。

## 剣道家に多い障害と

### その予防

高島治療院 高島 弘 和



周知のように剣道は、他のスポーツより遙かに競技寿命が長く幼少年から高齢

者に至り、その年齢によって起こる障害に違いが生じ、稽古の質・量によっても、また初心者と高段者等の技術的な違いによっても起こる障害は違ってくる。障害が起こってもその部位をかばいながら稽古を継続する。それにより他の部位に負担がかかり他の障害の原因となり、またその障害自体も症状が進行し稽古の継続が困難となるばかりではなく、身体的傷害にも直結する可能性がある。

そこで、剣道によって起こりやすい障害とその予防法、障害が起こったときの対処方法、リハビリテーションを簡単に紹介し、これを剣道の稽古に少しでも役立てていた

できれば幸いです。

### 一 腰 痛

当院に来院する剣道関係者の中でも圧倒的に多い障害はこの腰痛であり、腰椎椎間板ヘルニア、脊椎分離症・すべり症、急性腰痛症（いわゆるギックリ腰）等いろいろあるが、その根本になる原因は過度の練習による筋疲労、もしくは腹筋の筋力低下による腹・背筋のアンバランスが考えられる。

腰痛が起こったときの対処方法であるが、急性時は安静にし患部を冷やし、なるべく早く専門家に適切な処置を施してもらうのが肝要である。この初期の時点で処置を間違えると、痛みが長引くばかりか、慢性の腰痛に移行して治りにくくなる。

予防法及びリハビリとしては、ストレッチングと筋力トレーニングが考えられるが、これらは毎日継続して行うことで効果が現れる。ストレッチングでは背腰部から臀部の部位に対して行うのはもちろんであるが、大腿部後面に対して行うことが、腰痛に対して効果的であり、重要である。尚、ストレッチングは剣道を始める前と、終わった

後に述べるように習慣化することな望

ましい。筋力トレーニングでは腰筋の強化はもちろん必要だが、腹筋や側腹筋のトレーニングを行い、腹・背筋のバランスを整えることが重要である。腹筋トレーニングと背腰筋トレーニングの比率は、一般健康状態では腹筋：背腰筋は2：1が理想とされる。腰痛改善が目的の場合は、7：3でも8：2でもよい。大殿筋と腹筋を強化すると骨盤が上がり、前傾が少なくなる。また、腹圧を強め腰痛を防ぐことができる。

## 二 膝関節の痛み

剣道の稽古での膝の障害は内側側副靭帯の損傷が最も多く、次いで半月板損傷であり、加齢による膝の変形（三十代後半以降にみられる）もよく見かける。

X脚（両足をそろえた状態で膝の間に隙間のないもの、または内くるぶし間に隙間のあるものをいい、女性に多い）、O脚（両足をそろえた状態で膝の間に指二本以上の隙間があるもの）等の体形の影響も原因としては否定できないが、主な原因は大腿四頭筋（太もも前面の筋肉）の筋力低下

てある。

したがって、大腿四頭筋のストレッチング・筋力トレーニングを行うことが、予防にもなりリハビリにもなる。

## 三 手関節の痛み

剣道では腱鞘炎（左手首の小指側がほとんどである）がよく見られ、中学生・高校生に多い。これは基本・打ち込み・掛かり稽古等の打突の反復練習が多く手首に負担がかかって痛める場合と、竹刀の握り方が悪かったり打突時に左脇が開いたりする等で手首の使い方に無理があって痛める場合の二種類あり、前者は稽古内容を工夫し（難しいだろうが打突の反復練習を減らす等）、後者は言うまでもなく悪癖を矯正してやるのが一番である。

## 四 肉離れ

三十代以降に多く、剣道では主に踏み込み時にふくらはぎの筋肉またはアキレス腱の繊維が断裂して起こる場合がほとんどで、原因は筋・腱の老化（中高齢者に多い）、柔軟性の低下（寒いとき、ウォームアップしていないとき、使いすぎて疲れたときに

多い）が考えられる。したがって予防とリ

ハビリとしてはストレッチングがすすめられる。剣道では特にこの部位は酷使されるため、常に柔軟性を保っておく必要がある。

この肉離れが起こった場合の対処方法は、

※R・I・C・Eの原則にしたがってアイシング、圧迫等を行い、すぐに適切な治療を行う必要がある。この時決して自分で歩かないようにすることが大切である。なぜならば、完全断裂は別として（この場合は外科手術が必要）筋繊維が部分的に切れているわけで、その周囲には切れかけた状態の繊維があり、歩行等によりこの繊維も切れる恐れがある。（捻挫等も同様で、プロ・スポーツの試合ですぐに担架が出てくるのはこの為である。）

## 五 アキレス腱の痛み

思春期を過ぎるとアキレス腱の老化が始まるといわれ、また使いすぎにより硬くなり、激しい運動で小さな断裂ができ、腱またはその周囲の組織に炎症が生じる。これをアキレス腱炎、またはアキレス腱周囲炎といい、三十歳代～四十歳代の稽古量の多

い剣道家に見られる。

予防及びリハビリとして、ひ腹筋とアキレス腱のストレッチングを行い、稽古直後には患部に五〜十分間アイシングを施す。

慢性期では暖めてからマッサージやストレッチングをして柔軟性を回復させる。痛みが強い場合はテーピング固定などを行う。

《参考文献》

- 1 スポーツ指導者のためのスポーツ外傷・障害
- 2 スポーツセラピストのためのスポーツ外傷障害マニュアル

- 3 アーンハイムのトレーナーズ・バイブル
- 4 スポーツ障害のハリ療法
- 5 外傷・障害とトレーニングの実際
- 6 臨床スポーツ医学

※ R・I・C・E の原則

外傷現場での救急処置の方法であり、捻挫・肉離れ・打撲・挫傷等が起こったときに有効で、痛みを和らげ、内出血・浮腫による腫れを抑え患部の炎症症状を最小限に留める。これは医師の治療を受けるための前処置であり、運動をするための治療ではない。尚、RICE 処置の必要なときは、血管を拡張し血流量を増大させる為炎症を助長・増悪させる結果となるので、入浴・飲酒などは絶対にしてはならない。

Rest (安静) …… R・I・C・E の中で最も重要な処置で、I・C・E を行っても運動を再開することは炎症を増悪させるだけである。

Icing (氷冷) …… 氷で (氷を患部に直接あてるのが望ましく、他に氷嚢・アイスパックなどがある) 患部を冷やし、内出血・炎症を抑える効果がある。通常15分から20分ぐらいを目安とし、冷感が→熱く感じ→痛く感じ→感覚の無くなるまで行う。

Compression (圧迫) …… テーピング・サポーターなどで患部を圧迫する事により、内出血・浮腫による腫れを抑える。

Elevation (挙上) …… 心臓より高い位置にすることで、患部への余分な血流を防ぐ。

(※高島さん自身、鳴門高校時代は選手として活躍。同級生には現在県警で活躍している岩木さんや一年上には平野さんがいた。また、現在、剣道五段に挑戦中。)

はり・灸・指圧

# 高島治療院

受付時間 午前9:30～午後7:00  
休診日 日曜・祝日

予約制です  
お電話ください。

☎(0886) 22-5373

〒770 徳島市佐古六番町11番5号  
ヤマリンビル1F

◎駐車場有り

# 刀について

居合道部 高橋 憲 司



剣道は斬る・突く

が基本動作であり、

「竹刀は刀に代わる

ものであって、打ち

は即ち斬りである。」と言われる今、それ

に伴う手の内・刃筋・物打ちでの切り等技

術の面、また剣を通しての理念等々の問題

もあります。まず斯道を学ぶ者と刀との

関わりについて少し考えてみたいと思いま

す。

刀（古くは剣）は元は人を傷つけ、また

斃しあるいは支配し、他方己れを護るため

に発生したのであり、武器であることがそ

の原点ですが、時を経て世情の変化によっ

て力（権力・武力）の象徴となり、時には

神ともなり、また技術の積み重ねによって

他の工芸品と同様に美術品としての価値を

高めることとなって、現在では実用性は全

くと言ってよい程失われています。

美術品として分類される刀剣の鑑定・鑑

賞の仕方、また鍛錬の方法等はそれ等を研

究し、また収集されている専門家・愛好家

がおられますのでその方々に委ね、古来よ

り幾多の文献もありますので、ここではそ

の歴史を簡単に振り返ってみます。

その発祥は古墳時代にまで遡ることがで

きますが、平安時代以前においては突くこ

とを主にした直刀（太刀）でした。それが

平安時代中期以降騎馬による戦いが戦闘様

式の主体になって、切るという馬上での使

用に適した弯刀即ち反りのついた刀が造ら

れるようになり、伯耆安綱、三条宗近に至っ

て日本刀として完成された姿になりました。

時代が源平の戦いを経て政治体制が公家か

ら武家へと移って鎌倉時代に入ると、作刀

技術は一段と進歩し、鉄・土・水等の原材

料の調達が容易であり、他方需要といった

条件が整っていた備前・山城・大和・相州・

美濃の五ヶ地において、所謂五ヶ伝と称さ

れて各々の技術の特性を生かして作刀がお

こなわれ、各地で名工が数多く輩出しまし

た。備前に則宗・行国・助宗、やや時代が

下って吉房・時真など、山城に匡安・国友・

吉光、大和において千手院重吉・手掻包永・

当麻国行他五鍛冶と称せられる人達等枚挙

に遑がありませんが、中でも鎌倉時代中期

後に鎌倉の地に新藤五国光とその門下の正

宗が相州伝を完成させ、後に正宗十哲と呼

ばれる人々を経て作刀に大きな影響を及ぼ

し、現代の刀工もこの時代の技法を範とし

て鍛刀しています。なおこの時代の刀装は

腰刀拵を除いて刃を下にして佩く「太刀拵」

でした。

戦乱の南北朝時代を経て足利義満によっ

て室町幕府が開かれましたが、未だ各地で

有力な支配者が所領を有して独自の政治を

行って各地で戦火が絶えず、国内の需要に

併せて幕府も対明貿易に多くの刀剣を輸出

したため「数打物」とよばれる大量の刀剣

が生産された時代ですが、一方では「注文

打」といわれ美濃に兼氏に続く兼定、孫六

兼元、山城に信国、大和に手掻包真、備前

に長船盛光以下祐定など、また相州に広光・

綱広の他、伊勢に村正など後に名工と称せ

られる刀工もこの時代に出ています。この

頃室町幕府は芸能に優れた者に阿弥の称号を与えていて、本阿弥家は刀の研ぎと鑑定を業とし、その「折紙（鑑定書）」の付いたものは一国にも代え難い名刀（例えば土佐山内家に伝わった長船兼光は一國兼光とも言われている。）であって、一般の武士

などは持ち得ず將軍や大名等の權威の象徴でした。刀装はそれまで騎馬による戦い为主であり太刀を佩用していましたが、鉄砲の伝来（一五四三）を機に足軽や雑兵を含めて徒歩侍による集団戦が多くなって、そのためを使い易い刃を上にして差す打刀が要求されるようになり、応仁の乱（一四六七）以後は太刀はほとんど作られず打刀が全盛となりました。

室町時代末期に作刀されたものを末占刀と称し、慶長（一五九六）を境にそれ以前を古刀、以後を新刀と大きく区け、その中寛永（一六四三）以降を新々刀と称しています。

戦国時代が織田信長・豊臣秀吉によって全国統一され終息に向かいますと、政治・経済・文化・交通等の社会情勢は大きく変

化し、大名達は自分の領地に城を構えて町が形成されるようになり、武士や商工業に携わる人達も集まって新しい社会が生まれました。

このような状況を背景に新刀は単に新しく作られたというだけでなく、刀工も需要が大きく一方では原材料の入手がし得い城下町に定住するようになり、それまで各地で独自の作刀をしていたのが互いが研鑽し合うことで地方色が薄れたのと、全国が統一されたことによる剣道の発達が使い勝手の良い体配を求め、反りの浅い中切先の尋常な姿になりました。

新刀初期は南北朝・鎌倉時代の太刀を磨り上げて刀に仕上げ直した時期であり、その作風もこれ等に似て身幅が広く切先が延び反り浅く重ねはやや厚くなっています。

この頃の著名な刀工は京・大阪に堀川一門・三品一門・埋忠明寿、名古屋に伯耆守信高・飛騨守氏房、越前と江戸に康継一派、和歌山に南紀重国、仙台に国包、金沢に兼若一派、広島に肥後守輝広、佐賀に忠吉一門等が住んで大半は藩の抱上でした。刀装は秀

吉指料の朱塗金蛭巻大小拵に代表される大拵が主流であり、一方で茶人の好みによって作られた歌仙拵に代表される打刀拵です。

江戸時代、大小が式制となり（正保）寛文から元禄に至る間、寛文新刀と呼ばれる幅が元から先にかけて自然に減じ、中切先で反りの浅い釣り合いのとれた体配の刀になりました。また武士が社会の主導権を持っていた、最大の消費都市であった江戸に刀工も多くが集まり、また天下の台所であった大阪にもその多くが移り住んで技を競い合いました。江戸に和泉守兼定・大和守安定・長曾祢虎徹・法城寺一門、大阪に井上真改・河内守国助・津田越前守助広・一筆子忠綱、京に丹波守吉道等がこの頃の著名な刀工です。泰平の世が続いて元禄頃になると町人文化が栄える一方、武家社会は次第に衰退して刀の製作も急速に減少しました。江戸時代が寛政頃になると諸外国の船が通商を求めて来航するようになり、開国攘夷と尊皇思想など国論が論じられて幕末の動乱期を迎え、再び武士が活躍する頃となって刀の製作も再び隆盛がみられるよう

になりました。この頃の作刀は水心子正秀らによって鎌倉・南北朝期に復すべきと唱えられ、これが世相にも支持されて「復古刀」と称されて鍛刀され所謂新々刀です。

この頃の刀工には正秀の弟子で大慶直胤・細川正義の他源清磨とその門下の栗原信秀・固山宗次等、大阪では月山貞一・尾崎助隆、備前に横山祐永と祐包、薩摩に奥大和守元平、土佐に左行秀等が有名です。刀装は突兵拵など実用的な拵が流行しました。

やがて明治維新となり明治九年（一八七六）廃刀令が公布されて、刀は実用性を失ってその歴史を閉じました。

今日、刀といえれば一般にそれが剣道形の大小の基本にもなっていることから、正保二年（一六四五）に式制された大小拵（大は刀身六七センチ前後、小が五〇センチ前後）を思い起こされる方が多いのではないかと思います。刀装の点から言いますと太刀拵を別にして、打刀拵は初期の天正拵にはじまり流派や藩の気風等によって各々趣の異なった拵が生まれ、中でも肥後拵・薩摩拵・尾張拵・柳生拵などであり、幕末

には突兵拵の他に講武所拵などがあります。

そこで斯道を修業する上で道具としての「刀えらび」について考えますと、はじめに申しました通り刀は本来「武器」として生まれたのですが、時代と共に工芸品・美術品としての価値も高めていったのであり、名工の手になるものは他の美術品と同様に極めて高価であると同時に、社寺・美術館及び博物館等に所蔵されるもの、多くは他に替え難い歴史的意義もあって、事情が許せば別ですがそれら美術品に類する刀を道具として使うのは如何なものでしょう。我々使っている刀の優秀を競い合うのが目的ではないのですから……。現代に作刀されたものであっても古来より伝えられた技法によって鍛造されたのであれば、それで用は足りるのではないのでしょうか。次に刀の適寸・適量については、長い刀を短く、短い刀を長く、また重い刀を軽く、軽い刀を重く使うのが理想ですが、これはなかなか至難の技です。凡夫にとってはやはり扱い易い長さ・重さであるのが良いようです。その目安として長さは身長より九〇センチ

を減じた長さ前後、重さは鞆を払った（刀身に鐔・柄を付けた）状態で九五〇グラム〜一キログラム前後、反りは一・五〜一・八センチ、身幅は元幅三〜三・三センチに対して先幅は約一センチ落、重ねはやや薄く、またより刃筋・刃音を知るために棒樋を掻いたものがよいと思います。



## 昇段審査合格秘話

### 七段に合格して

刑務所支部 鈴木伸一



このたび、平成八年五月八日京都審査において、七段に合格することができた。

今回で五回目、京都から始まり東京が二回、広島そして京都の審査に臨んだ。不合格のたびに感じたことといえば、審査を意識しすぎるあまり自分の剣道を見失い、無理に良く見せようとする気持ちが生まれ「無念無想」になりきれなかったことである。このような状態のため、しっかりと攻めきれずに打とう打とうと思う気持ちが前に出過ぎ、結局打ち急ぎが起るなど、その都度、次回の審査に向けての反省点となった。それからというもの刑務所での日々の稽古

はこの反省点を克服するため、今までに諸先生方からご指導いただいたことを反すうして基本を中心に、互角稽古では初一本を大切に短時間で集中することに心掛けた。また、毎週二回の警察学校で行っている合同稽古では、打とう打とうとする気持ちを押さえしつかりためて打てるよう稽古に励んだ。

そして当日を迎えることとなり、審査は第二コートの最終組三名であった。順番を待つ時間が長く感じられたが、今回は審査を意識する事を止めよう、そして色々な迷いを断ち切るため「今まで稽古を積んできたことに自信を持ち、自分の剣道をすばいいいんだ。」と言い聞かせ、開き直って立会いに臨んだ。最初の相手に無心で臨めたせいか相手の攻めに我慢ができて気持ちも充実し、瞬時に相手の起こりを感じ体が反応して打ちに出られた。それが初太刀で相小手となった。そこから私は何の迷いなく面を打っていた。それは自分でもびっくりするほどの思い切った技であった。その後も打ち急ぐ気持ちを押さえながら攻めの気持

ちで落ち着いた立会ができたと思う。

私は、今回の審査を終えて、初太刀そして攻めてから打つまでの過程で理合にあった攻めの大切さを改めて知り、今までの自分の稽古を振り返ってみてまだまだ足りないところがあることを思い知った。

今後は、堀江先生からご指導を頂いた「剣道は年齢が増すごとに体力が落ち、技のスピードも若い人にはついていけなくなる。そこでどのような剣道をするか。」との言葉を座右の銘として、更に稽古を積んでいきたいと思う。

## 七段に合格して

徳島支部 西岡 金若

正直なところ、まだ七段という実感がピンときません。それというのも、一生に二度とあるかないかの身辺多忙な事情のため、落着く暇もなく、皆様方に大変な失礼やちご迷惑をおかけしており誠に申し訳ないことと思っております。

この度の昇段は、これまでご懇篤な御指導をいただきました堀江会長先生をはじめ、県下の数多くの先生方のご厚情とお力ぞえの賜でありまして感謝の念で一杯でございます。一誠に有難うございました。」

このうえば、恩師大澤善一郎先生のご遺訓、「段位のみ上って高慢になっていくと技の下手な者、素質の悪い者より最後の大切な目標において劣っている場合が多くある。」を肝に銘じ、段位に恥じない剣道生涯を送りたいと念願しております。

連盟会員の皆様、今後ともよろしくお願い致します。

終わりに皆様方の益々のご健勝を御祈り申し上げます。



51.9.20 道場にて  
二 剣 土 把

## 七段に合格して

徳島支部 山岸 章彦

私が、初めて竹刀を握ったのが十三歳の時であり、以来三十年間稽古一筋にやってきましたと言いたいところなのですが、生来の怠け癖と、病氣・転勤・その他諸々の理由に依り、中断していた時期が、約八年間ありました。

残りの二十二年間も、稽古を続けては休み、続けては休みの繰り返しでした。そんな私ですから、七段返昇段できるとは、思ってもいませんでした。今振り返ってみますと、五段の昇段時には苦労しましたが、六段では幸いにも一回で通った事から、七段昇段に対しても甘く考えていたことが否めません。

平成五年から七段受審を始め、一回目の京都審査に失敗してからあとは、惰性で稽古をし、審査時期が近づくと一生懸命した様な気になって受審していた様に思えます。それでも審査の時は、受かりたい、受か



りたいと考えるあまり、手と足はこわばり、心は乱れ、満足のいく内容ではありませんでした。

受審経過三年を過ぎますと、自分が情けなくなり、いっそしばらくは受審するのを休もうかなあといったことも考えました。でも、ここで休んでしまうと生来の怠け

癖が出て、稽古もおろそかになるのではないかと思ひ、平成八年の年頭に、今年一年死にもの狂いで頑張ってみようと決意しました。

仲々稽古が出来ない状況でしたが、今年だけは、仕事より剣道を優先しようと思ひ、稽古のある日に会議がぶつかると、強引な根廻しによって無理やり会議の日程を変更し、稽古に出掛けて行きました。

また、出張先で稽古が出来る所があれば防具を持参して、出張先に行きました。そんな甲斐あってか、東京での審査会の際は、平常心で臨む事が出来ました。

従前の様に受かりたいとか、こう打とうとか考えず、自然のままに相手と立会うことが出来たと思ひます。

以前は、七段になるとのんびりと稽古をすればいいなあと思ひていましたが、実際に昇段してみると、構えはこれでいいのか、気剣体は一致しているのか、などなど自分の剣道に対する疑問点が以前にもまして湧いてきました。

つくづくと道の深さを思ひ知った気持ち

になりました。

今は、更に稽古に励んで自分なりの剣道を目指していきたい気持ちで一杯です。こんな未熟な私ですが、自分なりに努力していく所存でございますので、諸先生方、先輩諸氏におかれましては、今後益々の御指導、御鞭撻お願い申し上げます。

## 剣道と私

—六段に合格して—

徳島支部 糸田川 美千男



平成八年五月、京都審査で漸く念願叶い喜んでいきます。御指導下さった先生方に

厚く御礼を申し上げます。

私は昭和十二年七月（小学六年生）家族と共に朝鮮に渡りましたので、学校も兵役もあちらで、終戦の時は陸軍兵科甲種幹部候補生教育期間中でありました。除隊後すぐ朝鮮鉄道に復職し、十一月内地に引き揚げ、翌年五月四国鉄道局に就職し、比較的若くして、あこがれの運輸事務官（当時鉄道は運輸省の管轄）に任用されました。

仕事は真面目にしておりましたが、趣味も多くでき、それも深入りしすぎて、職場の選択も休日が多く転勤の少ない、単純作業を自ら希望しました。国鉄最後の職場は、徳島駅から約二軒離れた、安宅二丁目にあ

る「徳島駅（三軒巻）」の「安宅」一軒巻（一）に望し、此処で七年間過ごしました。此の寮にはボイラー室や軽油貯蔵地下タンクがありますので、危険物取扱者の免許や防火管理者としての資格もいりますが、それさえあれば現場と違い、自分の時間が思い通りにとれて、しかも翌日と翌々日は休みになりますので、（二十四時間一昼夜交替勤務のため）気楽に山の猟、川の漁を楽しむことが出来ました。やりたいと思った事は総て実行したし、自分なりに充実した日々を送ることが出来たと思っています。

剣道も六段にまでなれたし、吾ながらよい道を選択したものだと思自負して居ります。刀に興味を持ち始めたのは三十歳頃で、日本刀保存会本部会員になり、支部の会計や監事も務め、鑑定、研磨、拵まで手がけるようになっていきました。然しそれだけでまだ満足出来ず、刀法（斬）を研究するため居合道に入門しました。それ以来約二十年間、山田新六郎先生の御指導を戴いています。或る時期に今度は剣道がしたくなり、山田先生に相談しました処、親道館長の竹

原常雄先生をご紹介下さいました。五十七年一月から先生の御指導を受けました。その時私は五十六歳で、一級を頂戴した九月には五十七歳になっていました。週五日の稽古が三年間続きました。この五日の中の三日は、竹原先生と二人っきりで、五分稽古して三分休みの連続で、苦しいけれど充実した内容のものでした。当時の先生は七十八歳でしたが不思議な程お元気で、熱心に教えて下さるので、私も懸命についていきました。十時から始めて一時間半の稽古がすむと、いつも一緒にお風呂に入れて下さいましたので、非番日に帰宅するのは正午過ぎでした。この竹原先生が私を六段にしてくれたのです。よい師に恵まれて私は幸福者です。現在先生は九十三歳ですが御元気で、今でも時々道場にお見えになります。

今の親道館は息子さんの実太郎先生が館長でありますので、私はそのお手伝いをしています。私が稽古を始めた頃の道場には、竹原範士、石井範士、勝浦範士、西野教士、山田教士、熊本教士、稲木教士が居られ、

この先生方からの御指導を戴けたのは幸運でありました。また中央武道館、鳴門武道館の先生方、それとこの度受審前に、適切な御指導を下さった大沢先生と馬場先生など、多くの先生方のおかげで合格することが出来たと思っています。然しながら六段とは申せ、私の場合は、精神面・技術の面からも未熟者で、「あかんけど、お前としてはそれなりによく頑張ったので、努力賞をあげよう」と授与下さったと思って居ります。

堀江先生始め県連盟の先生方に感謝しつつ、この気持ちをこめて自己の修練に努め、剣道界の為に微力を尽くす覚悟でご座居ます。どうぞこれからもよろしく御願い申し上げます。

## 剣道六段に合格し思うこと

徳島支部 熊 沢 信 行



私の剣道修行の過程で、今回の昇段で回想してみると、各節目や壁での各先生、

各友人との出会いがあったからこそ、今も剣道修行を続けていけることについて述べさせてもらいます。最初に、小松島中学校時代に阿波支部の中尾誠先生に、剣道を初めて手解きを受け、剣道に目標を持ち、試合に勝つ楽しさ、稽古の取り組み方などの指導を受けました。次に阿南工業高校時代は徳島支部の鎌田恵先生に、剣道精神の厳しさ、集団の和の大切さ、社会生活への取り組み方などを、また、故清原栄先生には、卒業後、剣道修行を健康で一生続けると指導を受けました。社会人としては、故井上健二先生に、いろいろと稽古会などに導き、引き立て、社会人として視野を広くもつことなど、また、小松島支部の堀金實先生に

は、生徒に対しての指導者とは如何にあるべきかを指導いただきました。今回、特に六段に合格し、思い起こせば私が五段昇段時に、故下村富夫先生が、今後六段を目標に剣道修行を続けるにあたり、「(私の友人の)本田君の六段、福多君の六段がある。それぞれ、剣道修行の方法や目的、環境が違うのだから、熊沢の六段を目標に精進し稽古する様に」と言われました。また、剣道修行から疎遠に成る時に、故下村富夫先生が監督で「講志会」として阿南県下剣道大会で、友人同学年の福多君、本田君、驚敷の井村君、会社の同僚森本君や竹治君と出場し、良い意味でライバル意識を内に秘め、切磋琢磨し、数回団体優勝出来ました。ことは、私にとって剣道修行を続けさせる起爆剤に成ったと思います。

今回昇段し、今までの剣道修行で変化したことは、先輩の先生に誠に恐縮ですが「先生」と呼ばれる様に成ったことで、言葉の重みを考え、今後の行動を自重し、自分自身の剣道修行過程に数々の先生方からの指導を思い、剣道人として精進し、新し

い気持ちで取り組み、稽古に臨んで行きたいと思えます。今回の投稿にあたり、一度は剣道修行した人はそれぞれ仕事、家庭、身体など個々に事情は有ると思いますが、私が思うに剣道は、先生、先輩、後輩、生徒、また年齢、性別などを超え、幅広く社会人として剣道という一つの接点で結ぶ人間形成の道は無いと思えますので、自分自身で稽古の機会を見付けて、また、剣道に取り組めば、人生観も素晴らしい一面に出合えると思えます。

最後に、徳島支部の馬場力先生には、六段受験の機会を頂き感謝しております。また、徳島県剣道連盟の先生方には、いろいろとお世話頂きありがとうございます。これからもいろいろとご指導よろしくお願ひ申し上げます。

## 六段審査をふりかえる

阿南支部 加林 敏 央

平成八年十一月に名古屋で実施された六段審査で、長年かかりましたが、相手に恵まれ合格させて頂きました。

これは諸先生方の励ましのお蔭と感謝申し上げます。本当にありがとうございます。

今回は風邪をひいた後で体調は万全でなく、受験番号も決まり、面をつけた後でも「もうやめようか」と思う程でした。これが幸いしたのか体に力みがなかった様になります。

さて私はあくまでも小学生を対象とした「子供達の未来の為にお手伝いを」の域を出ないお稽古です。成人剣道とは「間合、気迫、スピード等」多くの点で違うものがあります。お稽古の度に我師範蝦名久作先生からは「打突する時は思い切って打突し切ってしまいなさい」と幾度となく御注意を頂いております。今回はある錬成大会の試合前の合同練習会の後、尾崎行男・濱

田逸郎両先生が見て下さり「あれで合格しなかったですか」と問うて下さり、「どこが悪いのでしょうか」と、「もしかしたら相手と対し、間合に入った時、剣先が開くか下っているな。そこを相手が打突しているわ」との御指摘がありました。これは長

年子供達とお稽古している時、意識して剣先を正中線をはずしていることが、くせとなってしまうのでしょうか。このように適切に御指導下さる先生方をありがたく思いました。そこでそれを矯正する為に形のお稽古を中学生が初段受験する為に習いに来てくれたのを機に週六時間四十日ほど十分にやりました。これは審査当日、形の実施の時に役立ってくれたのです。といたしますのも実科が終わり合格後形の実施の時、相手が打太刀、私が仕太刀、六本目お互いに下段で進んで中央まで出てしまったのであります。「間合に入った時」目で合図すると、気がつかれ相中段になり構えをとい

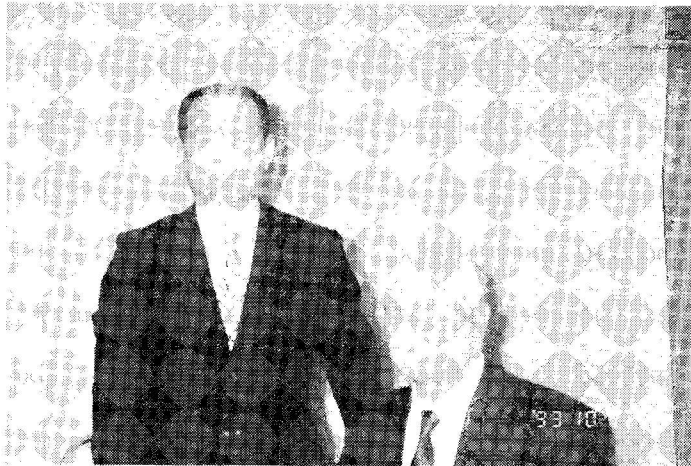
の伊藤（光）先生に提出に行った時「大へんでしたネ。びっくりしたでしょうネ、打太刀が間違っていて……、しかしあわてることなく立派にできましたネ」とおっしゃって下さりました。本当にありがたく思いました。

今回奇しくも同じような環境にある小学生主力の大野小学校剣道部で御指導されている西岡侃先生と同時に合格させて頂き、尾張名古屋と京の都の幾回かの、弥次さん喜多さんの旅もやっと尾張名古屋で終わりになりました。

これからも今まで同様、子供達を犠牲にして自分中心のお稽古はしたくありません。それよりも今まで自分を育ててくれた「このすばらしい子供達の未来の為にお手伝いを」子供達と共にお稽古に励まなければと思うものです。

自然界の動・植物が自分たちのその場所で、自らの生命を守る為に一所懸命頑張っている姿を見る時、人間だけが中途半端に生きることは許されるものでないと思ひ、お稽古できることに満足をし、感謝をし、

そこから利他の心を……。それが為に謙虚な心で、日々誠実に生きなければと痛感し、「人間形成」と言う遙かなる頂きをめざし、歩みたいと思うしだいです。今後とも諸先生方はじめ皆様様の御指導、御鞭撻、叱咤、激励をお願い申し上げます。



大野操一郎先生と

## 六段に合格して

阿南支部 西岡 侃



昨年十一月ようやく六段に合格しました。初受験から十余年にはなるでしょう。

私は職業が製材鋸日立技能士であり、何日も休んで受験することは無理で、京都・名古屋の受験日は早朝に家を出発、その日の内に帰宅するという、きびしい日程であった。早く合格して、くつろぎたい気持ちは誰しも同じであるが、仕事を犠牲にしてまでとは思わなかった。だから年一回京都などの受験を目標に努力を重ねた。不合格のたびに反省も重ね、何が不足しているのかな！ 打が軽いのだろうか、自分は慌てるクセもあり、無駄打が多いな、とも考えた。自分は少年剣道の指導をしている関係か、面打ちの時、体当たりを避け横へ出るクセがあると、各先生方より指摘されたこともある。

永年指導して来た大野小学校剣道部は、今年で二十五周年となる。良い子供達に恵まれて、すばらしい成績を上げることが出来ました。記録をみると、県大会（県連主催の夏と冬）で八回、県下大会（県大会に準ずる）で十七回、地方大会（各地）で十五回、通算で八十回も、団体戦で優勝することが出来ました。良い子供達、良い保護者に恵まれた大野小学校剣道部の指導者が、六段を諦めたりしたら、教え子達に笑われるぞ、と自分を励ましなが、がんばった。

子供達との練習だけでなしに、六〇七年前より、毎週水・土曜日の二日、早朝稽古をしている羽ノ浦道場（道場主、浜田逸郎先生）へ足を運んだ。出来の悪い自分を先生方は、気長に指導してくれた。早く合格して、先生方に恩返しをしなればと思えば思う程、心があせり、不合格の連続でした。

ある朝、浜田先生が一西岡よ、今月の剣窓に誠にすばらしいことが載っているぞ、よく読んで、頭に入れておけ一と指導して

くれました。その内容は「理念を踏まえた剣道」全剣連副会長、剣道範士九段、石原忠美先生の記事である。石原先生がある講習会で受講生から「八段に合格するために、一言で言うとは何が必要ですか」と質問されたそうです。その答えに先生は「理念を踏まえた剣道」であった。

「私は何回も繰り返し読む中で、自分が今迄不合格になったのは、「打って勝とう」の剣であり、反省させられました。

石原先生の教えは、第一番目は「気で攻めて埋で打つ」、第二番目は「刀の観念で竹刀を使う」と説明されている。その他、剣道を学ぶ者には大切な事が数多く解説されています。剣道は「打って勝つ」はダメで、「勝って斬る」でなければいけないと痛感しました。

石原先生の教えを、私は八段も六段も同じだと考え、その教えを少しでも学ばなければと、心に刻み努力を重ねている内に、朝稽古の時、先生方より「以前より変わったぞ」「六段もそこ迄とる」とか、励ましの言葉を賜り、今回の受験に希望も持つ

ことが出来ました。受験当日は、朝三時四十分、小松島港発で出発し、名古屋に着いて、実技の受験まで「気で攻めて、機を見て打つ」を、心の中で繰り返し唱えながら受験しました。お蔭で気持ちの良い剣道が出来、合格しました。

合格するまで永い年月がかかったけど、自分には良い勉強にもなり、今後の目標にプラスになったと思います。

いろいろと気長にご指導下さった、羽ノ浦道場の各先生方、大野小学校剣道部の関係者、そして黙って応援してくれた家内に、心から感謝いたします。

平成八年度

称号・段位合格者一覽

<p>【一】 劍道</p>		<p>十一月二十七日 糸田川 美千男</p>	<p>十一月十七日 熊沢 信行 加林 敏央 西岡 侃</p>	<p>二月十六日 泊 利治</p>	<p>五月十九日 【三段】 湯浅 俊章 太田 充宏 富原 光男 土井 博</p>	<p>五月十九日 山 笠真弘 小 笠真弘 松 尾昌洋 泉 秀俊 戸 井千紘 小 西啓史 山 本雅裕</p>	<p>五月十九日 【二段】 儀宝 正志 蛭原 正基 播磨 孝典 近藤 大輔 松浦 淳也 吉岡 和平 宮内 進二 湯浅 拓人 船田 憲司 瀬ノ上 尚 長 戸健吉 國 見充展 田 村仁 榎 本みくり 服 部みき 竈 土恵子 坪 井あき 久 保いつか</p>			
<p>五月八日 白木 洋一 大石 正志</p>	<p>【七段】 五月八日 鈴木 伸一</p>	<p>十一月二十七日 鈴木 伸一</p>	<p>【五段】 五月十九日 加藤 泰男 福多 博史</p>	<p>九月二十二日 富沢 憲一 橋本 俊行</p>	<p>九月二十二日 藤崎 正章 近藤 正章 榎原 和夫 西尾 重則 東 島幸 河野 久美子</p>	<p>二月十六日 横手 慶人 加集 伊織 福田 勇至 株田 憲一 北岡 博貴 森 晋作 西 村佳余子 大 坂尚子 蔭 野由紀子 大 谷陽子 芝 谷佳央理 賀 川由美 米 沢直美</p>	<p>五月八日 【六段】 五月七日 糸田川 美千男</p>	<p>五月八日 【錬士】 山田 浩史 村井 正志 増田 和広 平田 憲四郎</p>	<p>九月二十二日 島本 和彦 安友 健雄 日野浦 正一 加藤 貴子</p>	<p>十二月一日 鳴川 善人 十二月一日 古本 貢</p>

長谷川普紀	江口大祐	谷村泰	篠原義治	勝田邦男	山下阿弥彦	大下順也	日下健治	一村光志	尾田将規	中原拓也	川原窪映	尾崎香昌	住村洋弥	柴田和弥	田村大和	富永誠二	立石晃一	九月二十二日	橋川智洋	工藤研一郎	六月二十三日	堀田洋子	森本千秋		
清水國雄	森英雄	寶井紀之	藤田哲也	榎本慎郎	大栗隼人	谷口拓之	辻高明治	今川幸治	上田佳史	松本潤輔	大下健輔	坂東秀幸	高松智通	小笠原幸憲	横坂幸彰	勢井憲夫	谷岡和夫	大坂真右	友行淳二	竹内淳博	尾崎博文	小林正人	前田悟志	谷口智映	
芝大祐	笹川文彦	中山大輔	隅田憲男	十二月一日	大川貴子	酒卷恵子	鈴江裕佳	小川絵奈	藤崎佐和子	住友知世	森本美希	菱本律子	遠藤清	佐藤昌治	森田昌治	日下正拓	西岡浩	竹内義明	橋本秀正	橋本秀次	增加哲志	河野真典	河野真典	河野真典	
藤野伸弘	西岡茂雄	横山浩己	株野慎介	北野良三	三木康寛	三木隆寛	新居弘行	田村健晃	二月十六日	宇都宮マツヨ	岡野健治	住友賢司	黒上雅史	吉田大輔	堀江和孝	秋山泰一郎	川下陽一郎	高橋祐一	三好慶太朗	佐藤秀樹	岩朝大樹	岸篤司	岸篤司	岸篤司	
河野俊樹	寺野進也	楠原光謹	四月二十九日	【初段】	赤川真由美	奥野なごさ	福家久美子	桑原愛奈	小田紀子	中村美樹	坂東亜由美	北川真衣	横山絵里	武智有香	藤原洋子	白井裕子	谷村直紀	瀧口誠也	稲垣智也	山本真也	田岡大資	川又大吾	川又大吾	川又大吾	
木原一樹	三好和樹	川谷睦彰	近藤直彰	住村佳輝	太田佳輝	尾崎太一	花野周作	藤河亮成	西村義彰	森田一彰	笠原直人	古波直人	宮本康志	吉本志宏	黒木明宏	石田明宏	澤田恒哉	是恒長寛	濱川勇輝	門田文一	米山貴文	大久保竜志	数藤聡之	松浦達之	福山慶悟
川誠弘	尾華誠	岡山貴將	峰木泰聡	三田正輝	豊森尚輝	藤本尚輝	柴田和之	甘利秀長	天羽慎祐	松尾崇司	西山高広	加藤寛卓	定岡大啓	吉川義宏	黒川泰也	石田泰也	澤田恒哉	是恒長寛	濱川勇輝	門田文一	米山貴文	大久保竜志	数藤聡之	松浦達之	福山慶悟

瀬川直美	清原千晴	藤本優子	米田知恵美	元木衣里	田島幸美	三好由美	田村委子	長浦理絵	児島智子	小林かおり	矢部智子	下久保奈々枝	川添綾子	矢野裕美子	石本美幸	須藤麻衣	射場美恵	坪内麻衣	春木牧子	川原窪岩男	米本孝郎	高瀬有二郎	川原徹哉	喜多将記	松野圭介
助田祐志	元木英夫	品川健太	六月二十三日		小林育代	福永智子	山川景子	中西久美子	折坂春香	松下恭子	枝川真由美	酒卷由美子	森崎多恵	近藤紗綾	寺山美樹	山本久世	松田弘美	中岡千沙	村澤千藍	松崎和歌子	坂尾真理子	寺西真子	岡田奈緒子	田中千尋	
横田浩一	高木孝浩	泉幸佑	折坂元気	山本洋司	湯浅元明	田口将明	谷脇一志	高田恵嗣	町田祐樹	立石敬之	中郷直人	佐藤安謙	小川祐一	松長直樹	西岡紘司	松尾和良	杉村太	白濱至	本倉禎治	今本明延	星本敬剛	村上隆裕	森上雅志	高野隆志	
安宅沙織	遠藤加奈子	菅野智恵	上原千尋	東山佳代	国見久美子	畠山絵里	宮本千里	宮津朱美	忠野真理子	大田恵	谷崎あすか	山崎恵里子	乃一口牧子	井口明弘	井川政明	三井政守	平田聖二	森浦忠	丸山洋	竹内耕一	姫田純子	美馬武宜	久米隆宏		
岸信夫	瀬ノ上	中田修匡	石田修	鶴田祐樹	島田秀平	佐藤尚祐	藤崎友之	藤村慶晴	森谷義和	殿谷徳吾	池袋真洋	乾永憲司	福本達典	山本友一	江富友郎	大下達朗	岡部達朗	九月一日		柿本花美	松永アヤ子	中村純子	伊藤由佳	城崎由佳	
米田陽子	村上佳苗	岩本佳子	西真田さや香	湯浅春香	堤浦裕美	元野直子	勝野奈都紀	清瀬祐美子	河野幸恵	上地和美	糸林美紀	檜木やよい	福岡由美	庄司財三	岩佐智滋	小川健次	西岡慎也	敷島雅彦	斎藤直樹	中谷敦雄	阿佐俊克	田村慎朗	川口聖司	西村英樹	
岡和範	吉村敏男	福永昌豊	森上雅弘	小川章一	仁木進介	上肥比呂志	藤木和人	喜多和史	大坂高史	竹治大輔	野々宮正晃	遠藤延哉	高木洋平	松本真治	大西雅照	山中光運	湯浅智俊	藤本保宏	十月二十七日		藤原義浩	麻植由香里	細川茜		

保井慎吾	二月二日	山下芳実	藤田弘	清水俊宏	西條一之	八張慎	梯口順	谷栗典子	大笠初子	小上玲子	水澤伊佐子	藤村花枝	西村千春	藤村早苗	茂田友香	岡田茜	佐藤晶子	鬼原晶子	上田可裕	工藤裕	中井敏	松浦潤	井村守男	米澤康浩	
猪口美香	白井智美	西原尚昭	藤田茂樹	佐々木正徳	近藤直樹	松本和弘	多田孝佳	石井孝佳	瀬尾太夫	多田義夫	林川雄聖	蕨川雄聖	栗野貴規	折野英樹	犬伏英樹	角元竜一	渡津拓行	松永友行	大野和則	秋山雄治	大谷和也	都築透	安田圭佑	岡山真輔	藤井一平
															北村ひとみ	後藤佳代子	田村幸加	村上由加	新田紘子	桑原麻衣子	阿部久美	林舞子	松永枝里	松村広子	

—居合道—

【鍊士】

五月四日

福井勝  
森将夫

【六段】

十一月十六日

齋藤吉明

【五段】

十一月三日

満壽良史  
松村博行  
枝沢正巳

【三段】

十一月三日

関口公司  
西本忠司  
平瀬進也

【二段】

五月十九日

尾崎憲道  
戸村淳一  
武田修典  
川人政利  
原田進  
中村万里子  
寒川清  
坂東愛  
西條千鶴子

# がんばろう徳島

## 〈女子部〉

### 国体女子の部開設と展望



女子部長 手塚 十三子

平成九年度第五十二回（大阪）国体剣道大会より、現行の成年男子二部が廃止

され、成年女子が新設されることになりました。（三人制、十八歳以上三十歳未満・三十歳以上・四十歳以上・職域に制限なし）それに伴い、四月当初女子部の組織作りのための会を開き、今後の活動についての検討を図るとともに、強化を進めてきました。また十一月には国体の会場となる岸和田市の新設体育館でリハール大会が開催されるなど、本県女子部の緊張も高まりつつあります。

六月には総勢十五名で兵庫県に遠征を行

い、大学生や一般の方たちと白熱した練習試合や合同稽古に、日頑張りしました。さらに十一月初旬、連盟推薦により決定したりハール大会の出場選手（木下文江〈阿野郵便局〉・長瀬加代子〈生光学園教〉・手塚十三子）三名が再び兵庫県へ遠征し、大会に臨む気分も一段と高揚しておりました。リハール大会が本県女子部の今後の活躍の大きな弾みとなるべく、選手一同「必ずや人賞一の意気込みで臨みましたが、残念ながら二回戦で岡山県に敗れ、その証を持ち帰ることはできませんでした。

近年、少子化現象と相俟って剣道が他のスポーツに押され気味であること、また業界との両立の難しさ等の理由により剣道人口の減少が深刻化しています。しかしながら全日本女子選手権では高校生や大学生などの活躍が著しく、また全国家庭婦人大会では、学生時代から剣道と深く係わってきた方たちの健闘もさることながら、実生活に根ざしたベテランの方たちの剣道に対する熱い思いに触れることが多く、女子剣道のレベルの高さと幅の広さにむしろ頼もし

こと安定感を覚えます。

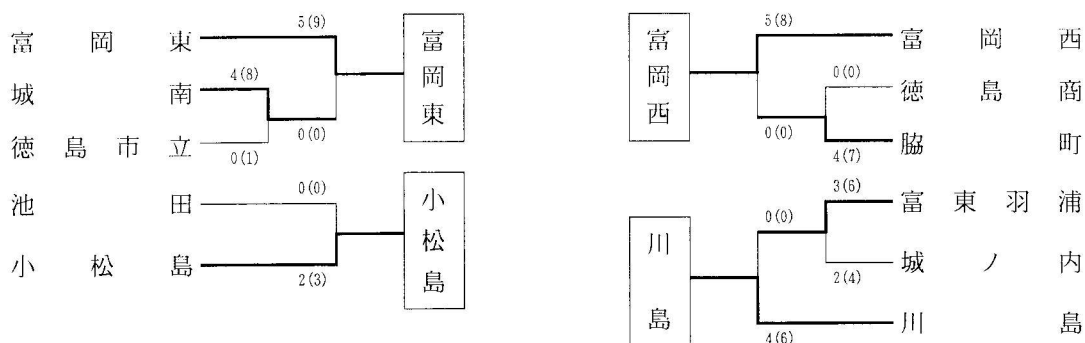
国体開催にあたり若手層の活躍は勿論のこと、今まで比較的試合回数少なかつた三十歳以上の方たちにはよい刺激となり、今後さらに研鑽を積まれることでしょう。当然の結末として国体は激戦が予想されます。今年度国体ブロック予選会は本県で開催されます。是非とも出場権を獲得して、正々堂々の闘いで見事全国優勝を遂げたいものです。現在女子部だけの独立した稽古会は実施しておりません。週二回実施される連盟の合同稽古会に自主参加という形で行っており、遠征や練習試合を重ねることによって、より堅固なチーム作りができることは周知の事ですが、まずしっかりと基本稽古と創意工夫を繰り返すことにより底力を蓄え、優勝への原動力を養いたいと考えております。

今後はさらに合同稽古会・交歓会等の機会を増やすとともに、決して大会や試合結果のみに拘泥することなく、共に剣を交え、共に学び合える女子部に発展することを切望します。一人でも多くの女性の参加と皆様方のご協力をお願いいたします。

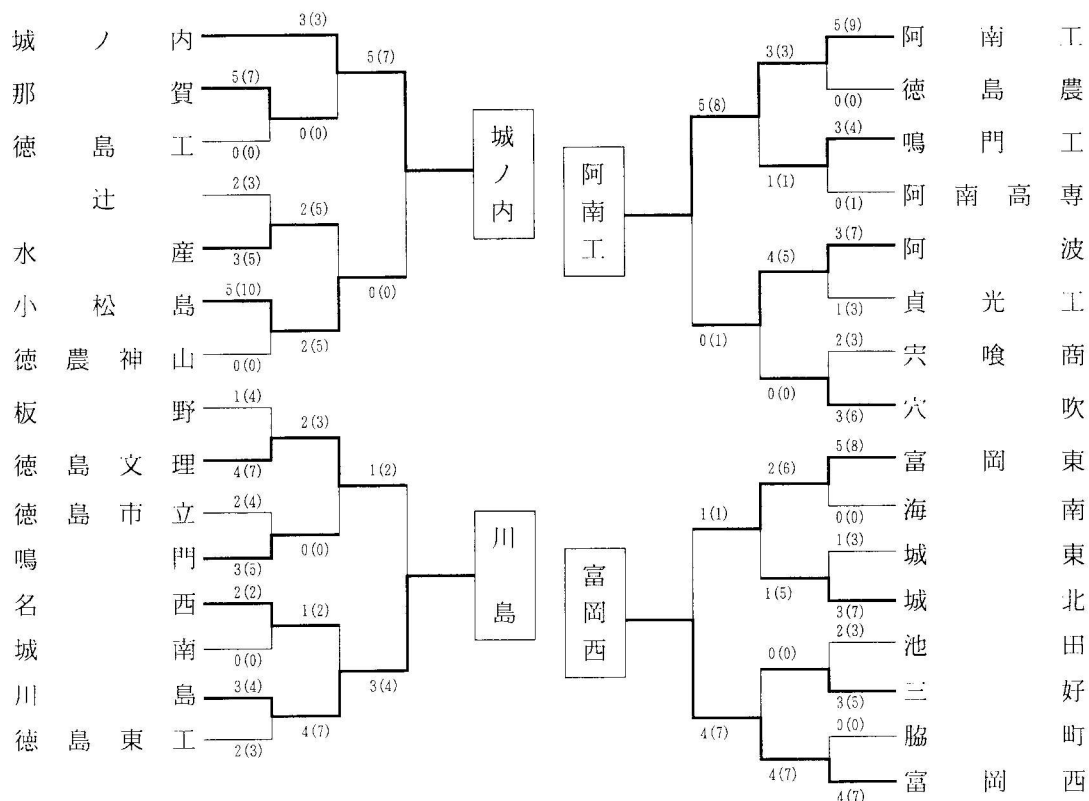
# 第36回 徳島県高等学校総合体育大会

平成8年6月1日～3日  
徳島農業高校体育館

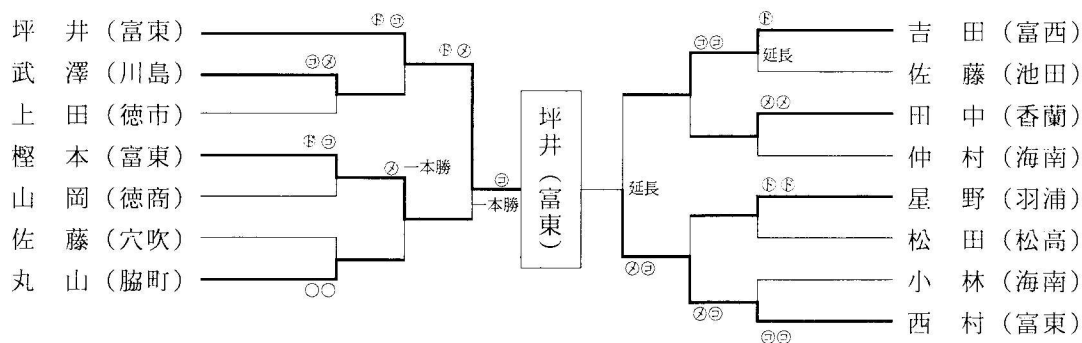
## <女子団体予選>



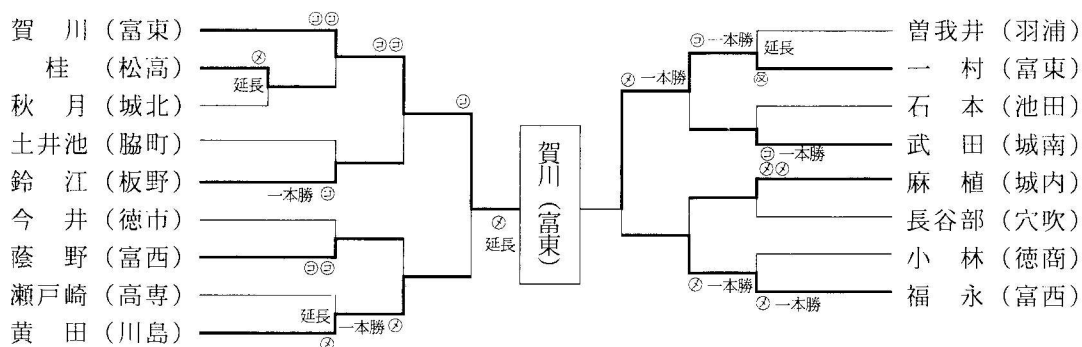
## <男子団体予選>



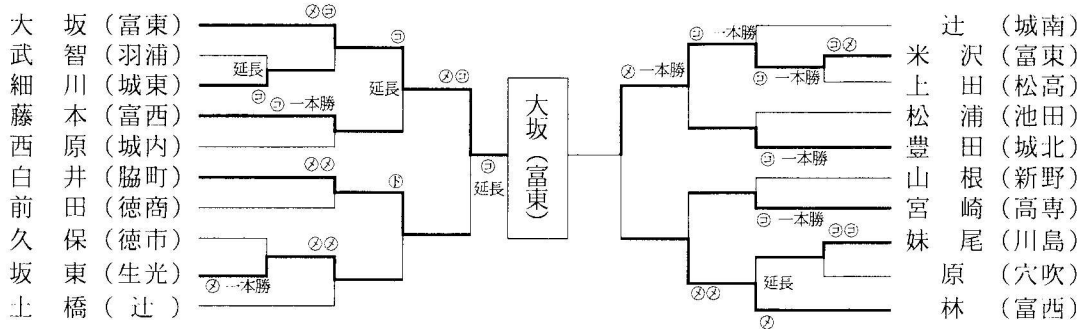
<女子個人1組>



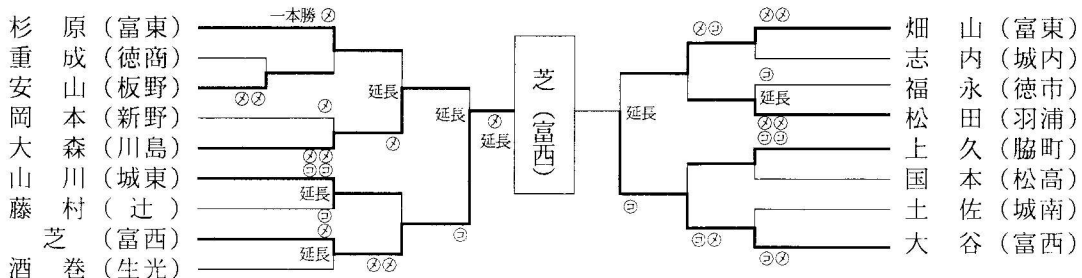
<女子個人2組>



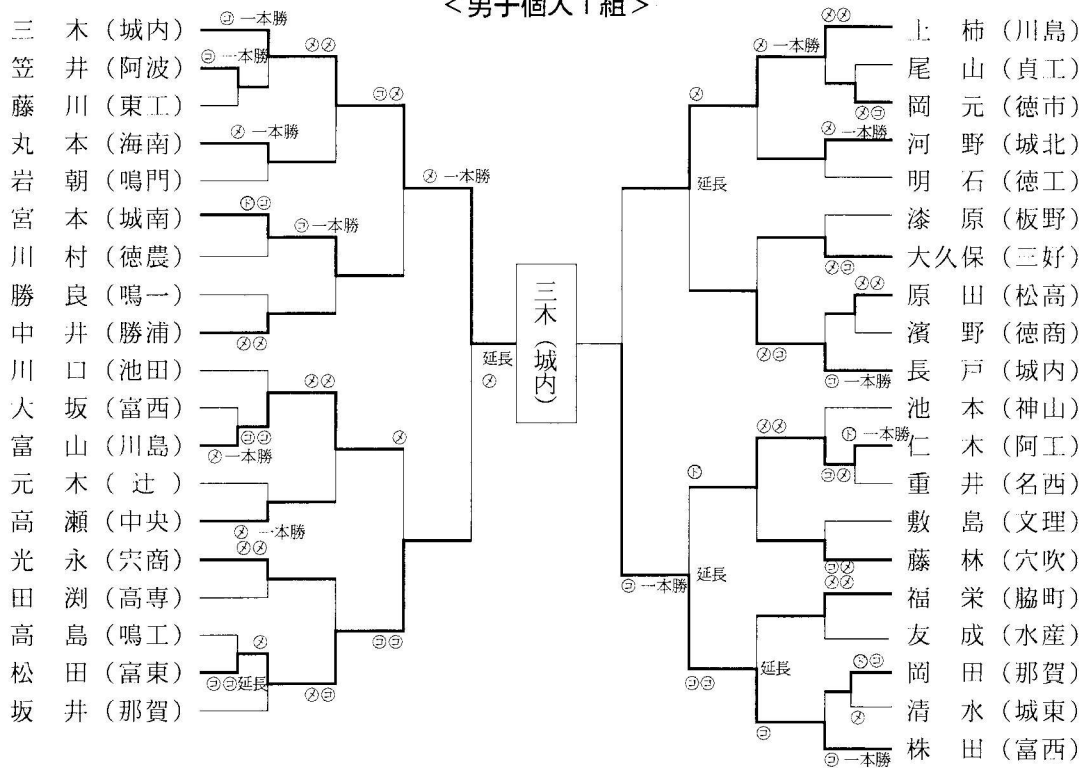
<女子個人3組>



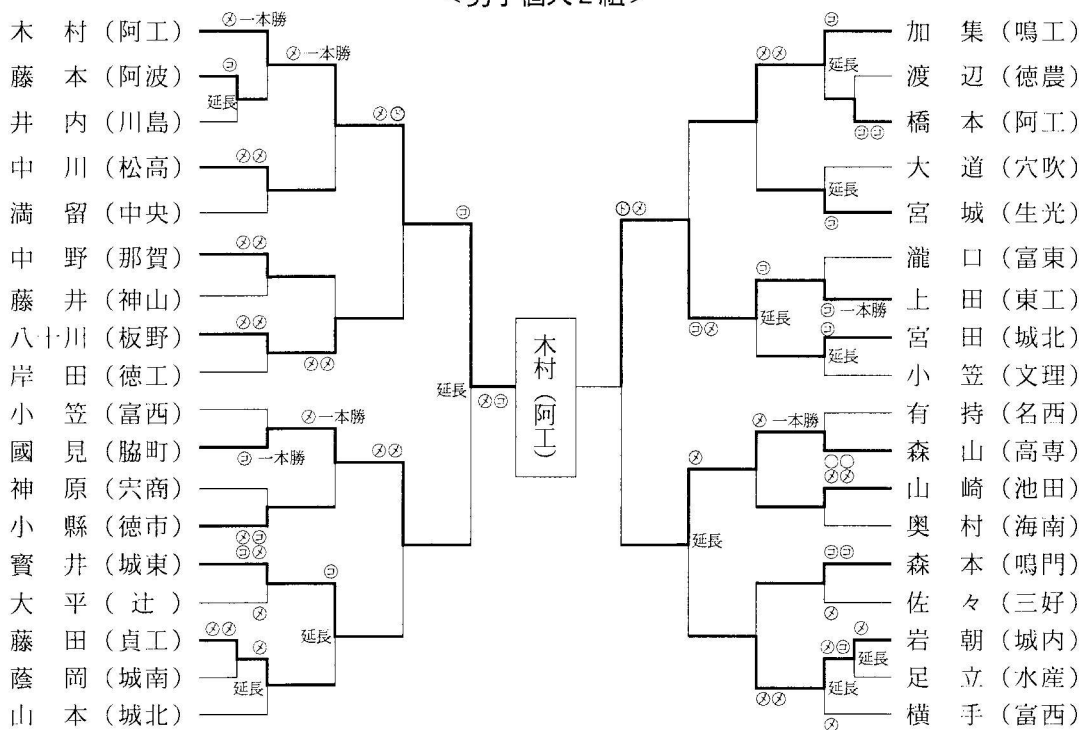
<女子個人4組>



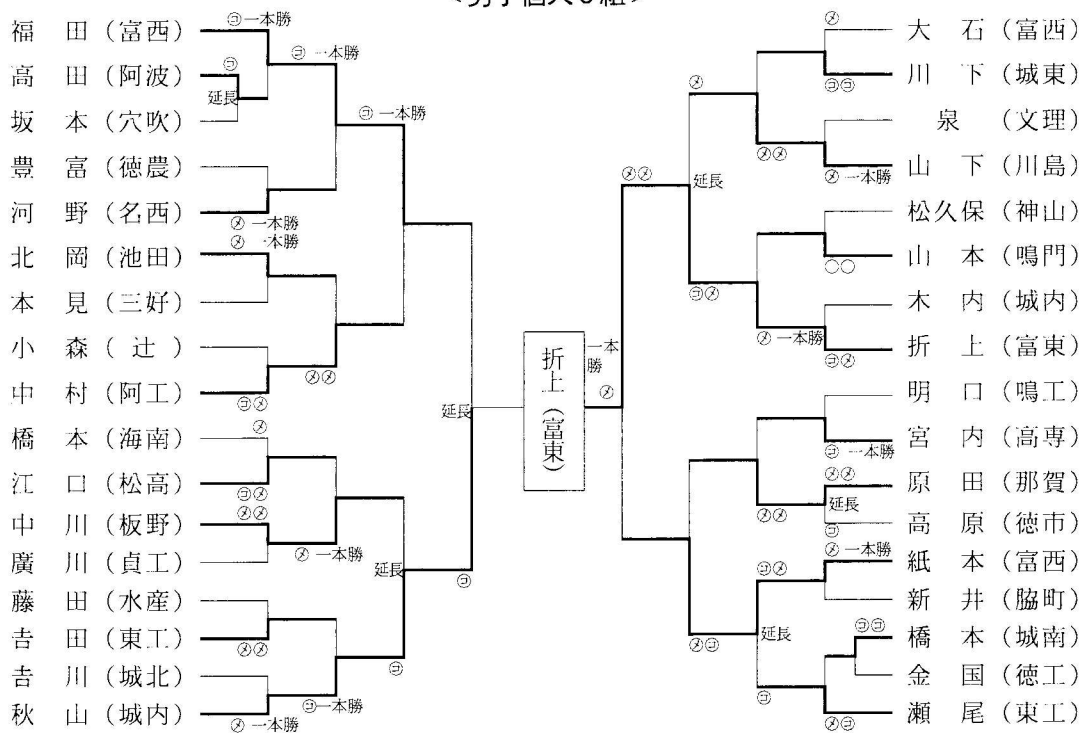
<男子個人1組>



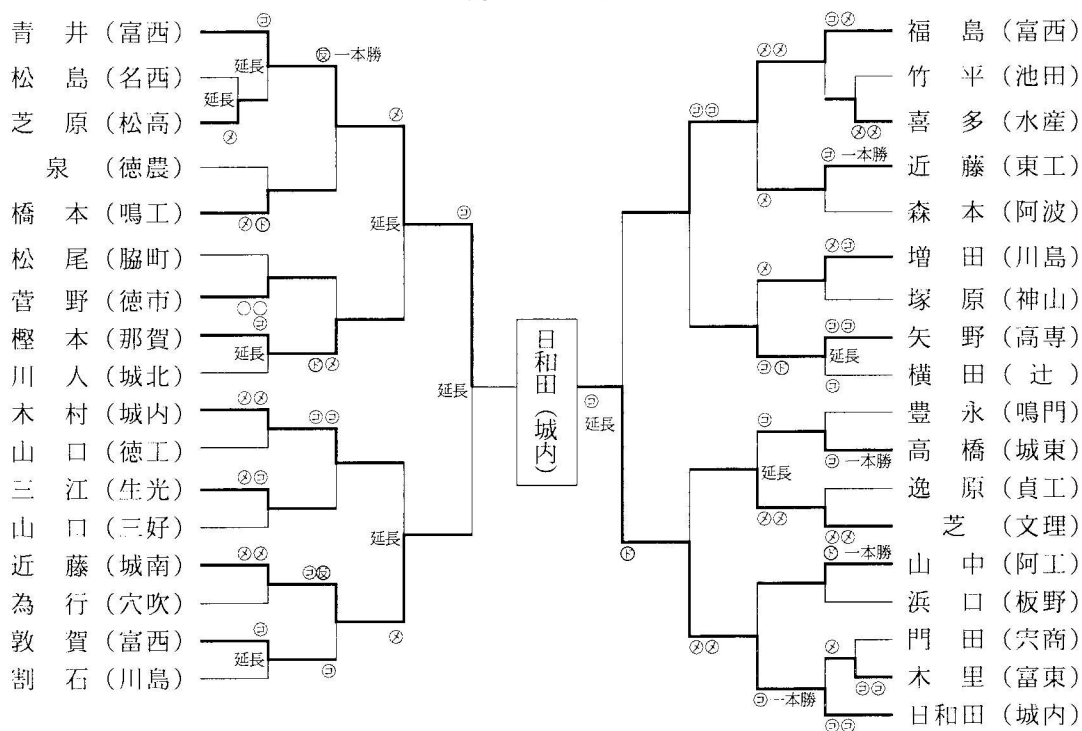
<男子個人2組>



<男子個人3組>



<男子個人4組>



<決勝リーグ>

<男子団体>

	富岡西	城ノ内	阿南工	川島	勝数	勝者数	勝本数	順位
富岡西		$\frac{4}{3}$	$\frac{7}{3}$	$\frac{5}{3}$	3	9	16	1
城ノ内	$\frac{1}{0}$		$\frac{4}{3}$	$\frac{3}{2}$	2	5	8	2
阿南工	$\frac{4}{2}$	$\frac{4}{2}$		$\frac{2}{1}$	0.5	5	10	3
川島	$\frac{0}{0}$	$\frac{2}{1}$	$\frac{2}{1}$		0.5	2	4	4

<男子個人>

	日和田	三木	折上	木村	勝数	勝本数	点得失	順位
日和田		△	◎一本勝	◎延長	2	2	+1	3
三木	◎延長▲		◎延長	△	2	3	+1	2
折上	△	△		△	0	1	-3	4
木村	△	◎◎	◎◎		2	4	+1	1

<女子団体>

	富岡東	小松島	川島	富岡西	勝数	勝者数	勝本数	順位
富岡東		$\frac{10}{5}$	$\frac{7}{4}$	$\frac{2}{2}$	3	11	19	1
小松島	$\frac{0}{0}$		$\frac{1}{1}$	$\frac{0}{0}$	0	1	1	4
川島	$\frac{0}{0}$	$\frac{7}{4}$		$\frac{1}{1}$	1	5	8	3
富岡西	$\frac{1}{1}$	$\frac{10}{5}$	$\frac{6}{4}$		2	10	17	2

<女子個人>

	坪井	大坂	賀川	芝	勝数	勝本数	点得失	順位
坪井		◎延長▲	◎一本勝	◎◎	3	4	+4	1
大坂	△		◎延長	◎一本勝	2	2	+1	2
賀川	△	△		◎一本勝	1	1	-1	3
芝	△	△	△		0	0	-4	4

《インターハイ出場校・個人戦出場者》

<男子団体>

富岡西高等学校

<女子団体>

富岡東高等学校

<男子個人>

木村佳史(阿南工高)

三木(城ノ内高)

<女子個人>

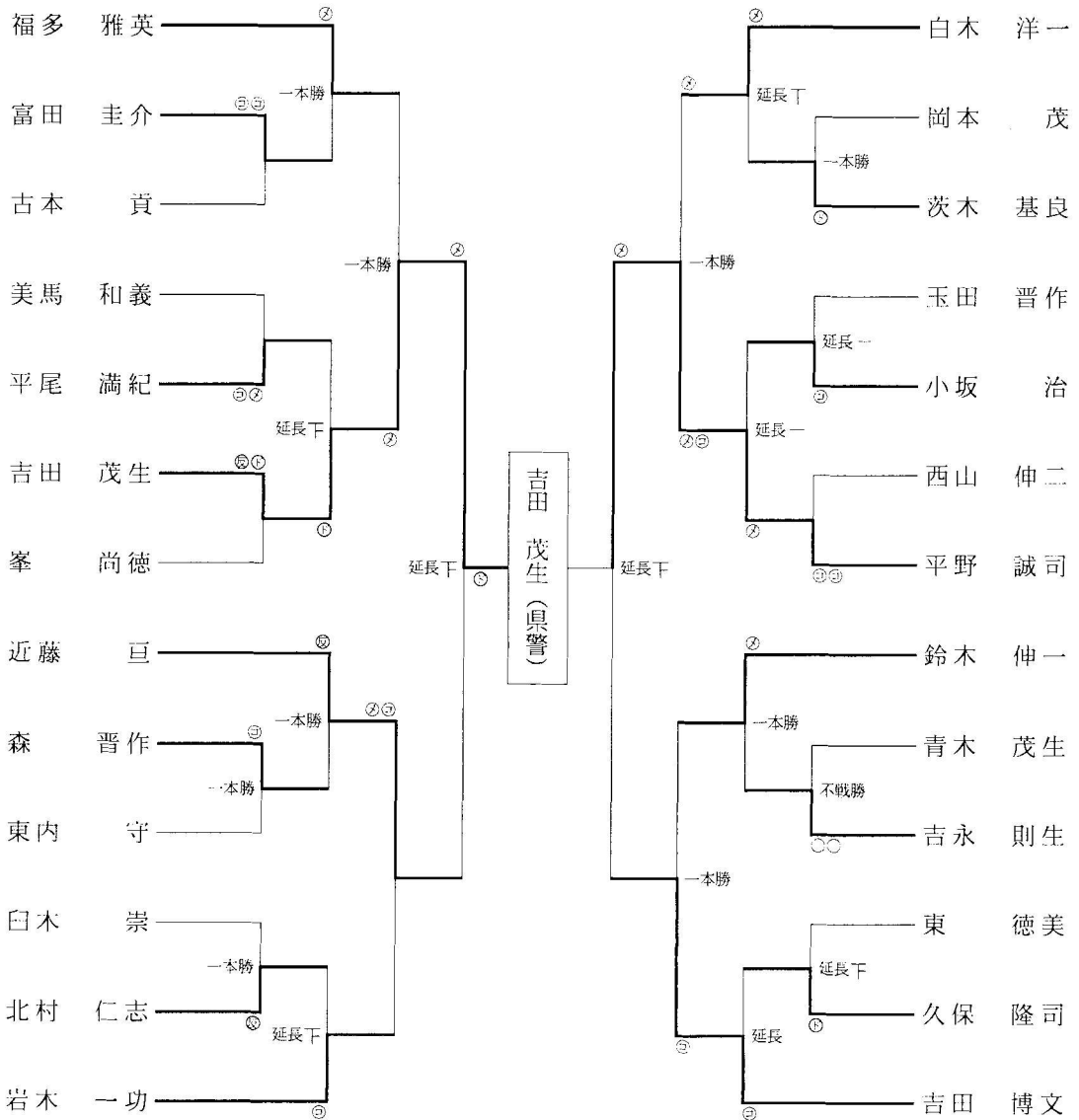
坪井さくら(富岡東高)

大坂(富岡東高)

# 第8回 徳島県剣道選手権大会兼全日本剣道選手権大会予選会

平成7年7月7日  
鳴門武道館

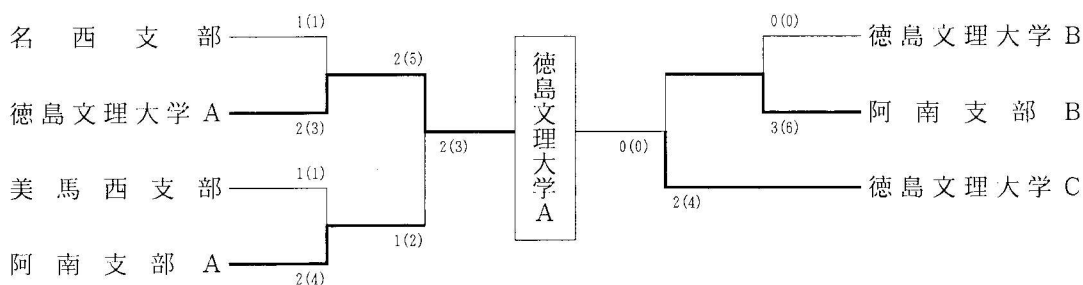
優勝 吉田 茂 生  
準優勝 平野 誠 司  
第3位 吉田 博 文  
近 藤 文 巨



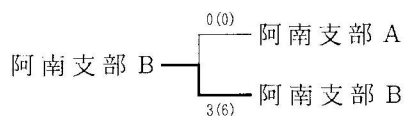
# 第17回 徳島県女子剣道大会

平成7年7月14日  
徳島県立中央武道館

## <一般団体戦>

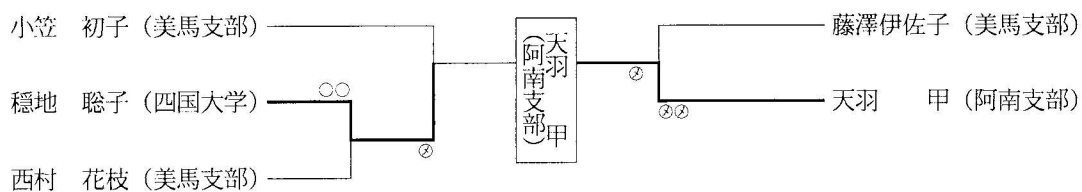


## <3位決定戦>



## <初段以下の部>

優勝 天羽 甲  
準優勝 穩地 聡子

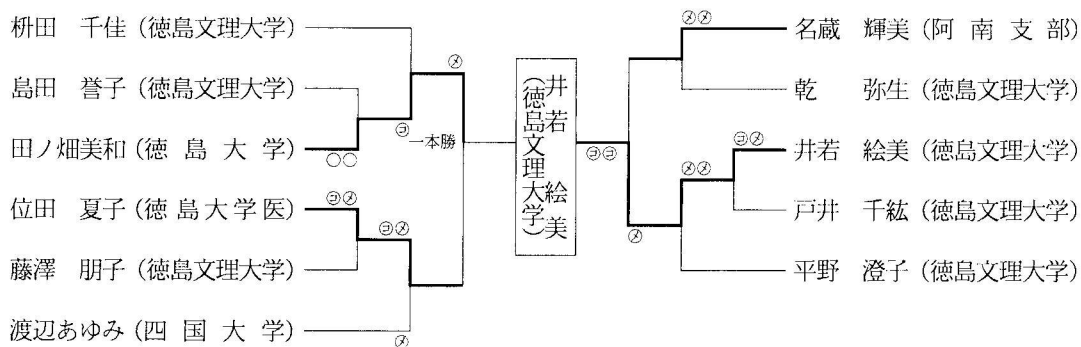


<二段の部>

優勝 井若 絵美 (徳島文理大学)

準優勝 田ノ畑美和 (徳島大学)

第3位 名蔵 輝美 (阿南支部)



<3位決定戦>

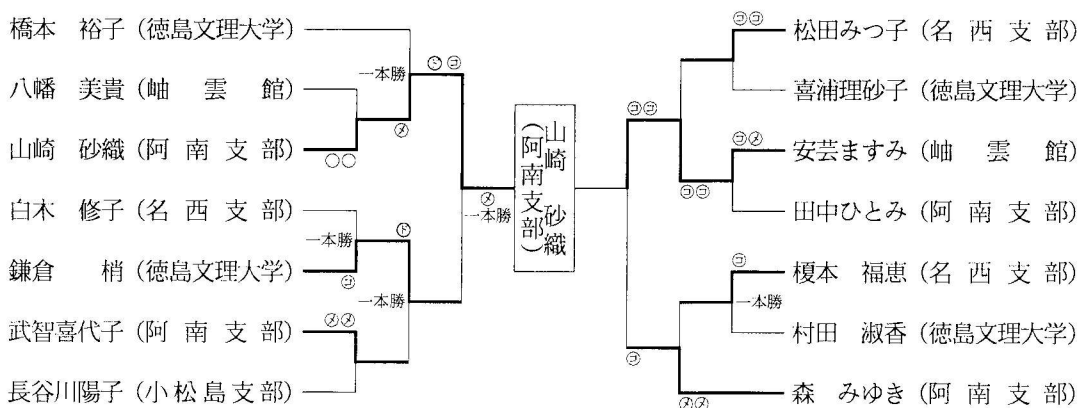


<三段以上の部>

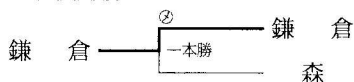
優勝 山崎 砂織 (阿南支部)

準優勝 安芸ますみ (岫雲館)

第3位 鎌倉 梢 (徳島文理大学)



<3位決定戦>



# 第35回 全日本女子剣道選手権県予選

平成8年7月13日  
 県警察学校体育館

優 勝 坪井さくら（富岡東高校3年）  
 準優勝 賀川 由美（富岡東高校3年）

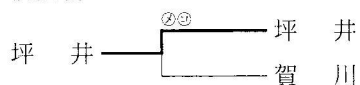
## < A 組 >

	坪 井	木 下	西 村	森	本数 勝数	順位
坪 井		⊗	⊖	⊖	$\frac{3}{3}$	1
木 下	△		△	⊖	$\frac{1}{0}$	4
西 村	△	⊗		△	$\frac{1}{1}$	3
森	△	⊗ ⊗	⊗		$\frac{3}{2}$	2

## < B 組 >

	吉 岡	大 坂	賀 川	芝	本数 勝数	順位
吉 岡		⊗	△	⊗	$\frac{2}{2}$	2
大 坂	△		△	△	$\frac{0}{0}$	4
賀 川	⊗	⊗		⊗ ⊗	$\frac{4}{3}$	1
芝	△	⊖	⊖		$\frac{2}{1}$	3

## < 決定戦 >

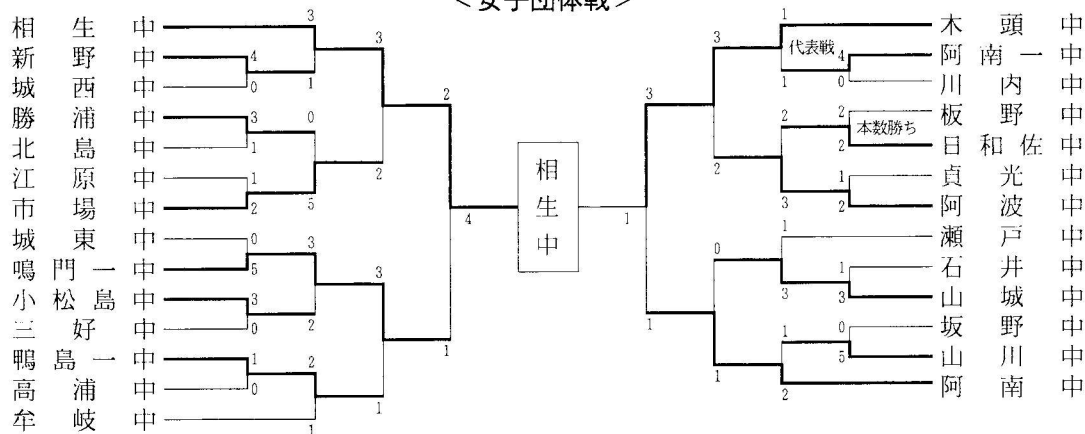


# 第50回 徳島県中学校総合体育大会

平成8年7月22日

鳴門武道館

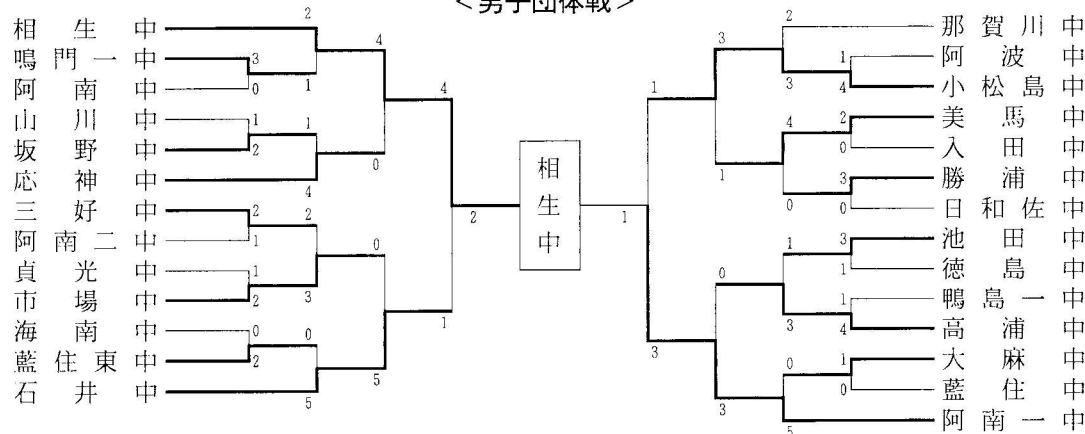
## <女子団体戦>



## <決勝戦>

学校名	先鋒	次員	中堅	副将	大将	勝数
相生中	中原	元浦	榎本	前田	栗本	4
	⊖ 一本勝	⊖ ⊖	⊗ 一本勝	⊖ 一本勝		
木頭中	森本	昇	岡田	株田	伊藤	1
					⊗ 一本勝	

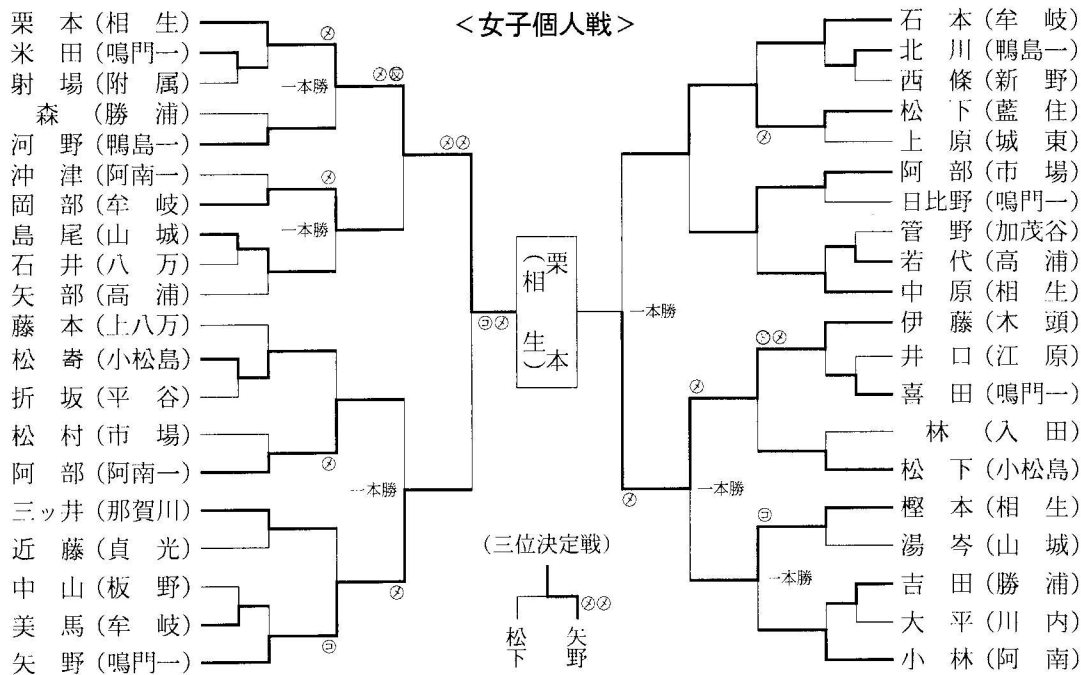
## <男子団体戦>



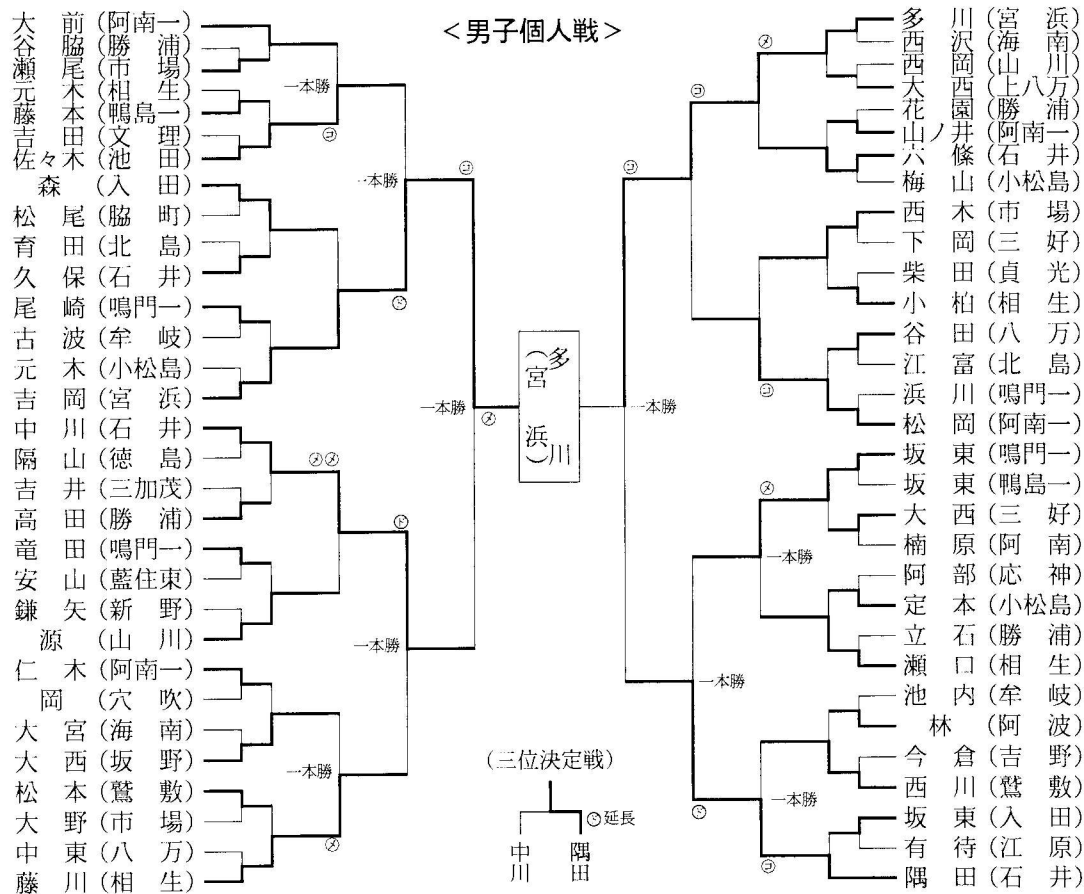
## <決勝戦>

学校名	先鋒	次員	中堅	副将	大将	勝数
相生中	小柏	吉田	瀬口	元木	藤川	2
	⊖ ⊗	延長	延長 ⊗		延長	
阿南第一中	仁木	大西	松岡	倉橋	大前	1
	⊗			⊗ ⊗		

<女子個人戦>



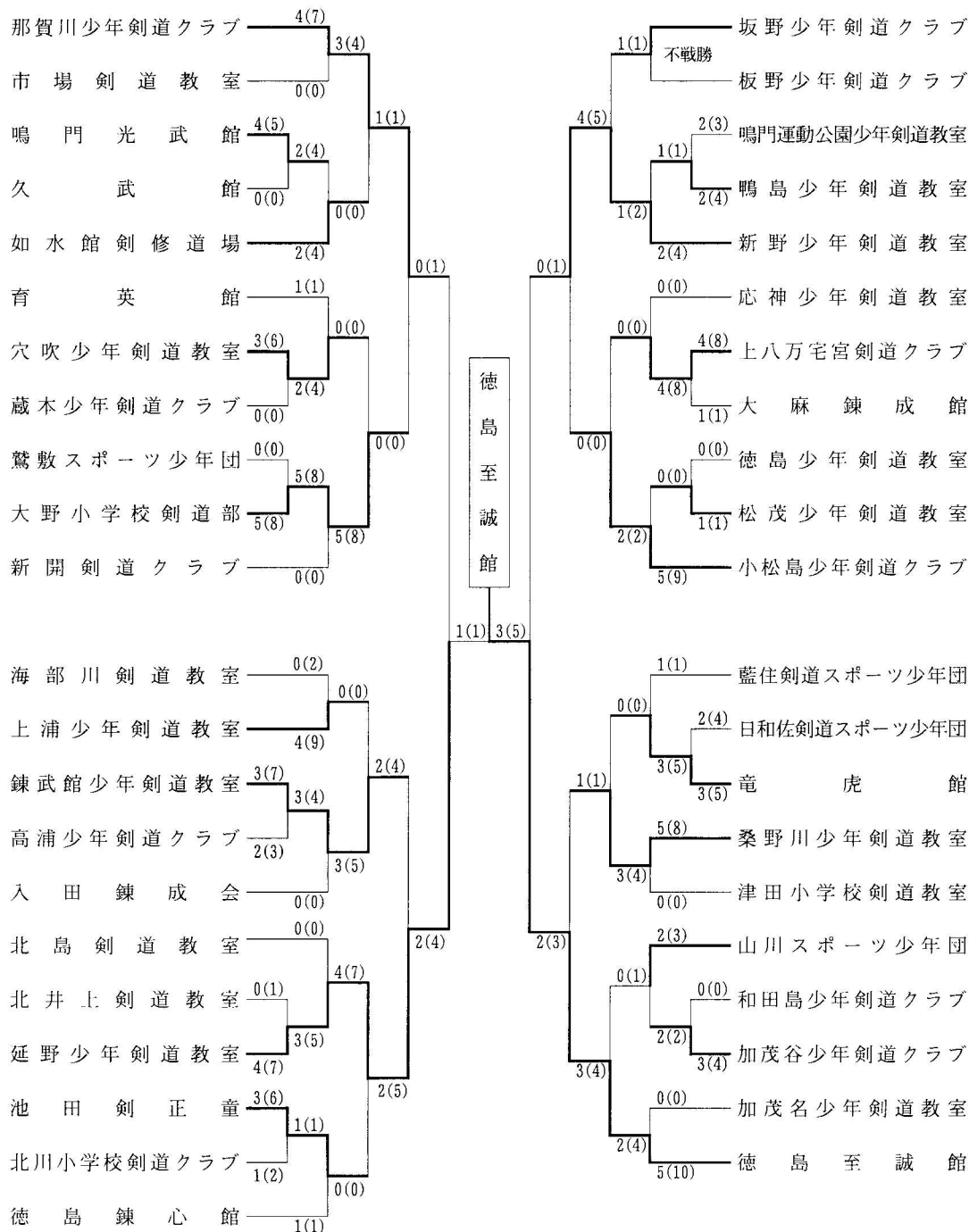
<男子個人戦>



# 第27回徳島県少年剣道錬成大会

平成8年7月28日  
鳴門武道館

## <団 体 戦>



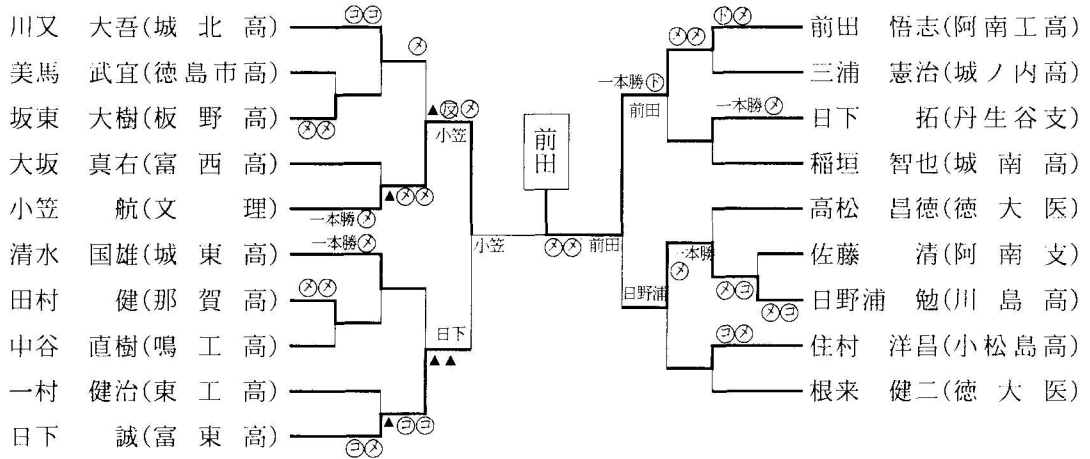


# 第20回徳島県剣道段別選手権大会

平成8年8月25日  
鳴門武道館

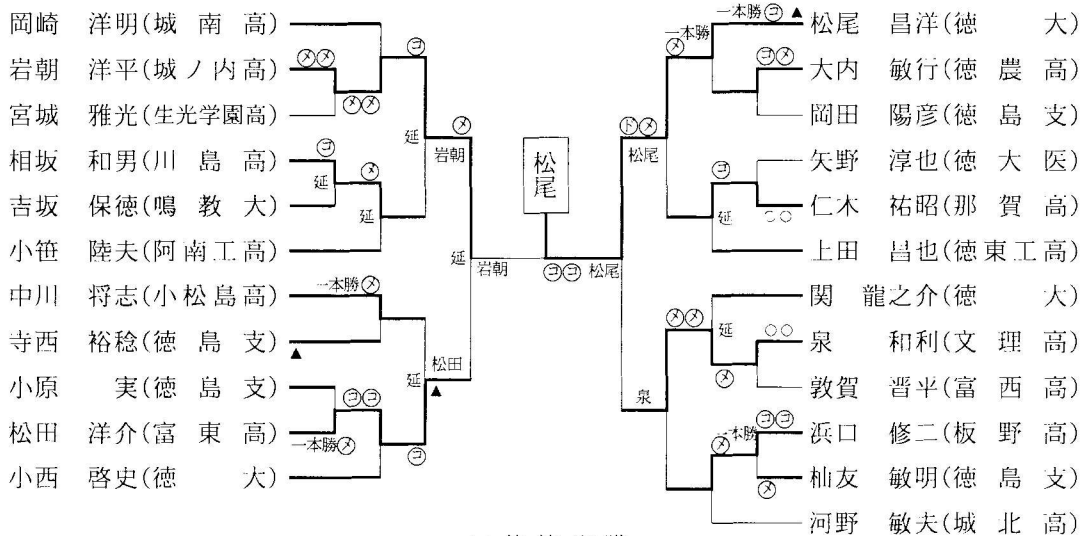
## <男子の部> (初段の部)

優勝 前田悟志  
準優勝 小笠航

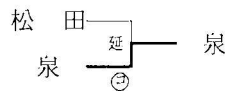


## (2段の部)

優勝 松尾昌洋  
準優勝 岩朝洋平  
三位 泉和利

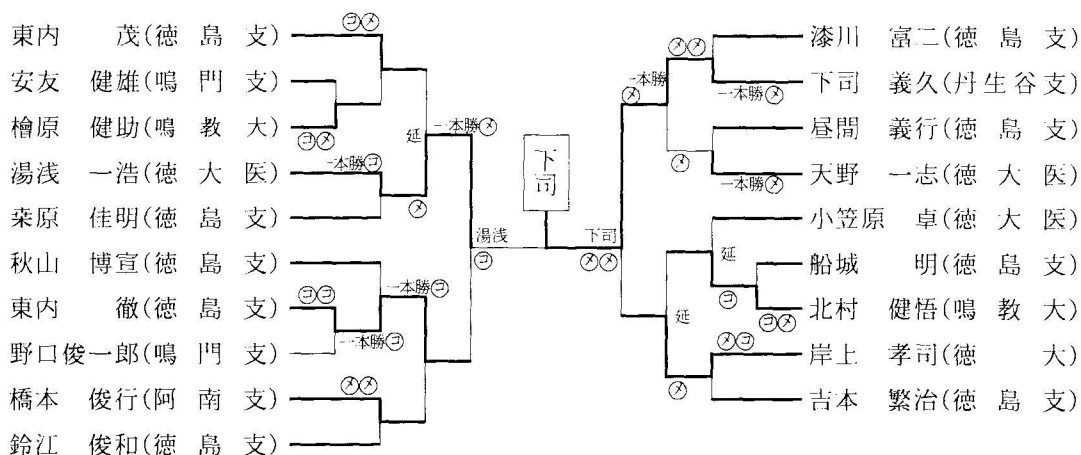


### 三位決定戦



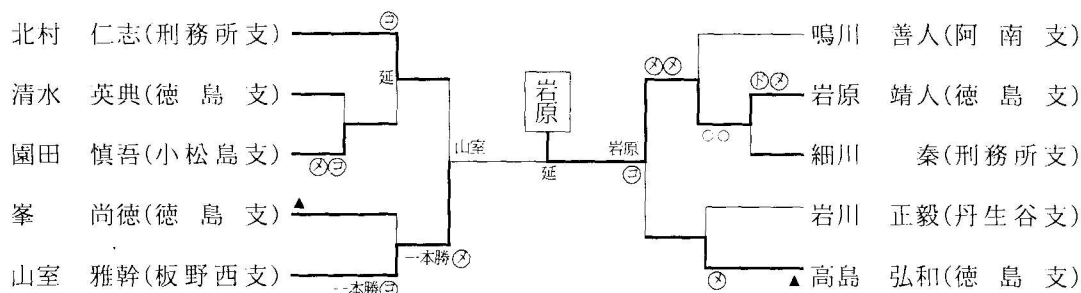
(3 段 の 部)

優 勝 下司義久  
準優勝 湯浅一浩



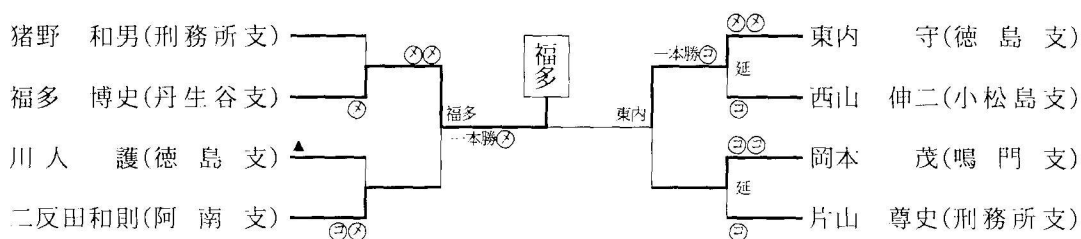
(4 段 の 部)

優 勝 岩原靖人  
準優勝 山室雅幹



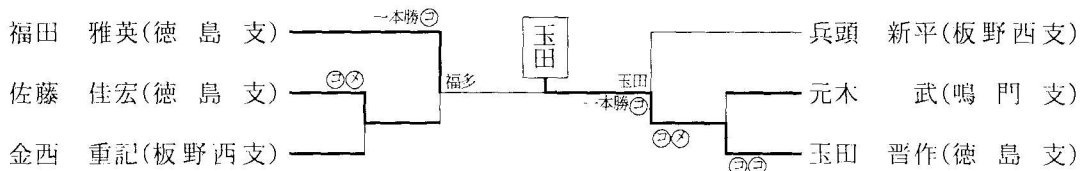
(5 段 の 部)

優 勝 福多博史  
準優勝 東内 守



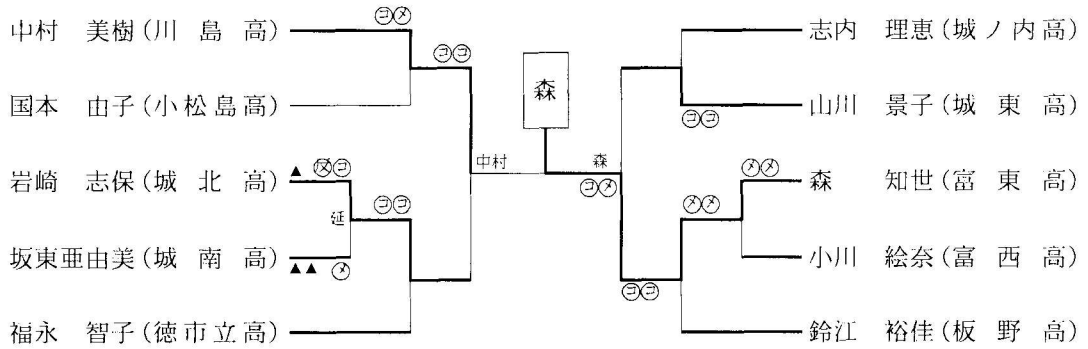
(6 段 の 部)

優 勝 玉田晋作  
準優勝 福多雅英



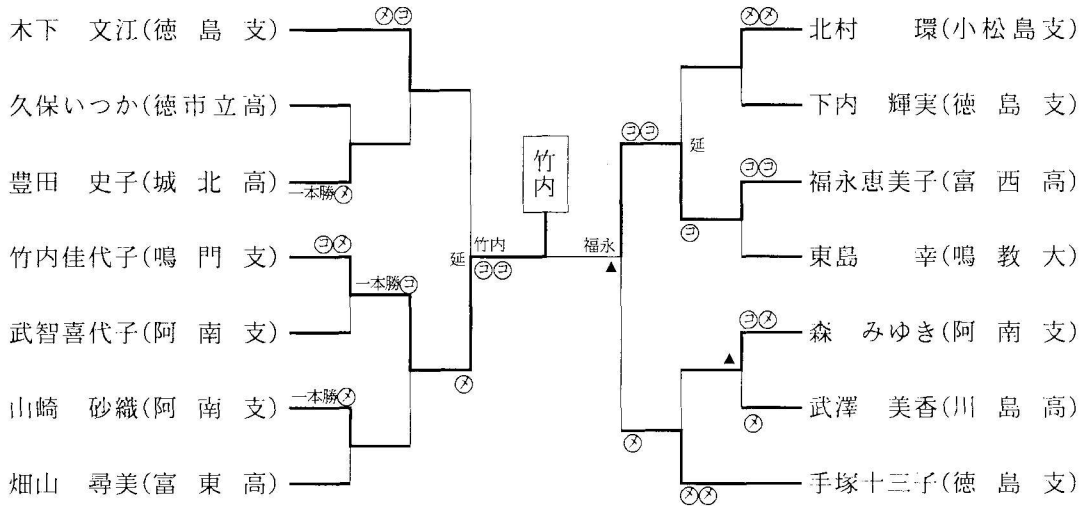
<女子の部>  
(初段の部)

優勝 森知世  
準優勝 中村美樹



(2段以上の部)

優勝 竹内佳代子  
準優勝 福永恵美子



# 第25回徳島県社会人剣道大会

平成8年10月20日  
鳴門武道館

## <予選リーグ>

**A**

	徳島至誠館	阿南 C	徳島 A	右武館	勝者数	勝本数	順位	
徳島至誠館	0/0	8/4	7/3	9/5	3	12	24	1
阿南 C	0/0	0/0	4/2	5/3	1	5	10	3
徳島 A	0/0	3/3	0/0	8/2	2	5	15	2
右武館	0/0	0/0	0/0	0/0	0	2	6	4

**B**

	小松島 C	阿波 B	三好 A	勝者数	勝本数	順位	
小松島 C	0/0	1/1	5/3	1	4	6	2
阿波 B	2/1	0/0	10/5	2	6	12	1
三好 A	0/0	0/0	0/0	0	0	1	3

**C**

	小松島 B	板野西 A	徳大医OB龍	勝者数	勝本数	順位	
小松島 B	0/0	5/3	0/0	1	3	5	2
板野西 A	1/1	0/0	0/0	0	1	1	3
徳大医OB龍	7/4	8/4	0/0	2	8	15	1

**D**

	阿南 D	海部 B	美馬西 B	勝者数	勝本数	順位	
阿南 D	0/0	0/0	8/5	2	10	17	1
海部 B	0/0	0/0	4/1	0	1	2	3
美馬西 B	0/0	0/0	7/4	1	4	7	2

**E**

	丹生谷	徳島錬心館 B	岫雲館 A	勝者数	勝本数	順位	
丹生谷	0/0	2/2	1/1	0	3	4	3
徳島錬心館 B	3/3	0/0	4/1	1	4	6	2
岫雲館 A	0/0	3/3	0/0	2	8	12	1

**F**

	阿南 A	木頭錬心館	美馬東 A	刑務所 B	勝者数	勝本数	順位	
阿南 A	0/0	1/1	10/5	1/1	1	7	13	3
木頭錬心館	4/3	0/0	10/5	1/1	3	9	15	1
美馬東 A	0/0	0/0	0/0	0/0	0	0	0	4
刑務所 B	6/2	0/0	10/5	0/0	2	7	19	2

**G**

	阿南 B	小松島 A	美馬東 B	勝者数	勝本数	順位	
阿南 B	0/0	7/4	8/4	2	8	15	1
小松島 A	0/0	0/0	7/4	1	4	8	2
美馬東 B	0/0	0/0	0/0	0	0	0	3

**H**

	海部 C	徳大医OB虎	加刺道数	勝者数	勝本数	順位	
海部 C	0/0	1/1	1/2	1	3	5	2
徳大医OB虎	2/2	0/0	4/2	2	4	8	1
加刺道数	0/0	0/0	0/0	0	3	2	3

**I**

	阿南 E	徳島 C	岫雲館 B	勝者数	勝本数	順位	
阿南 E	0/0	5/3	2/2	2	5	7	1
徳島 C	2/2	0/0	0/0	0	4	9	3
岫雲館 B	1/1	0/0	6/3	1	4	8	2

**J**

	振武館	阿波 A	美馬西 A	勝者数	勝本数	順位	
振武館	0/0	9/5	0/0	1	7	12	2
阿波 A	6/3	0/0	8/3	2	6	12	1
美馬西 A	0/0	0/0	0/0	0	1	3	3

**K**

	阿南大野	海部 A	板野西 B	勝者数	勝本数	順位	
阿南大野	0/0	7/4	0/0	0	2	4	3
海部 A	7/4	0/0	10/5	2	9	17	1
板野西 B	6/2	0/0	0/0	1	2	7	2

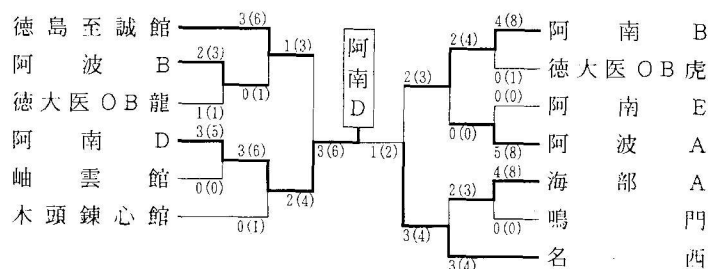
**L**

	徳島錬心館 A	板野東	鳴門	勝者数	勝本数	順位	
徳島錬心館 A	0/0	4/3	0/0	1	5	7	2
板野東	1/1	0/0	1/1	0	2	5	3
鳴門	4/3	6/4	0/0	2	6	10	1

**M**

	刑務所 A	徳島 B	名西	勝者数	勝本数	順位	
刑務所 A	0/0	5/3	1/1	1	5	11	2
徳島 B	0/0	0/0	0/0	0	0	2	3
名西	4/2	4/2	0/0	2	4	8	1

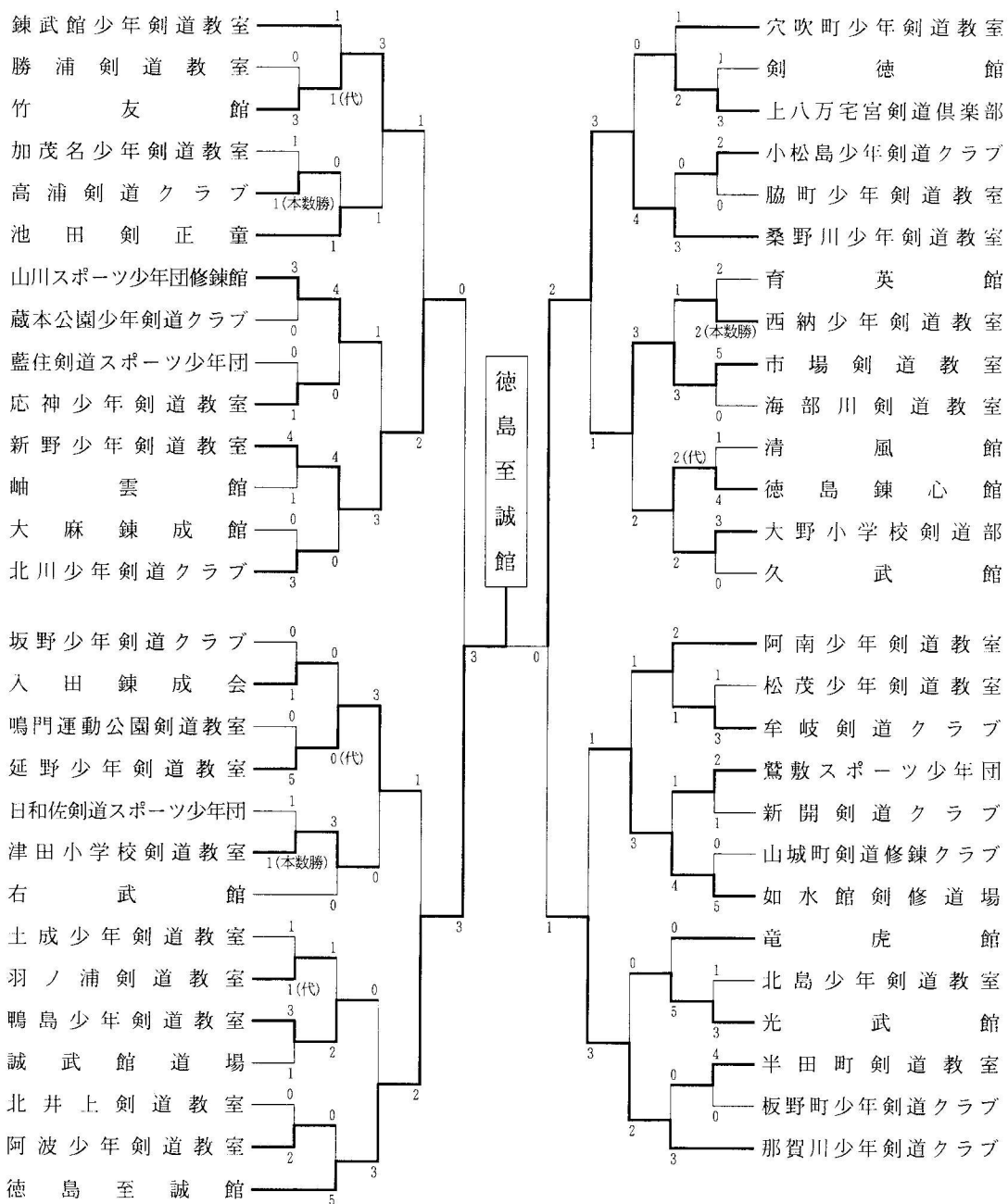
## <決勝トーナメント>



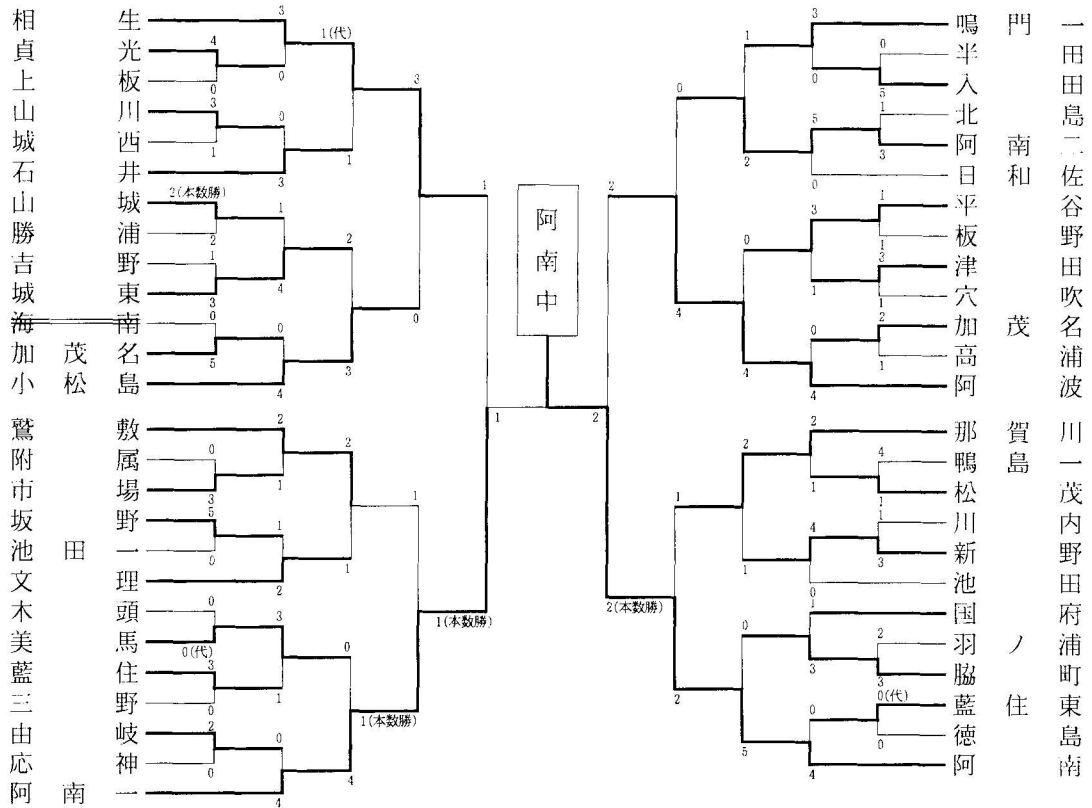
# 第7回徳島県小・中学校剣道強化錬成大会

平成9年1月19日  
鳴門県民体育館

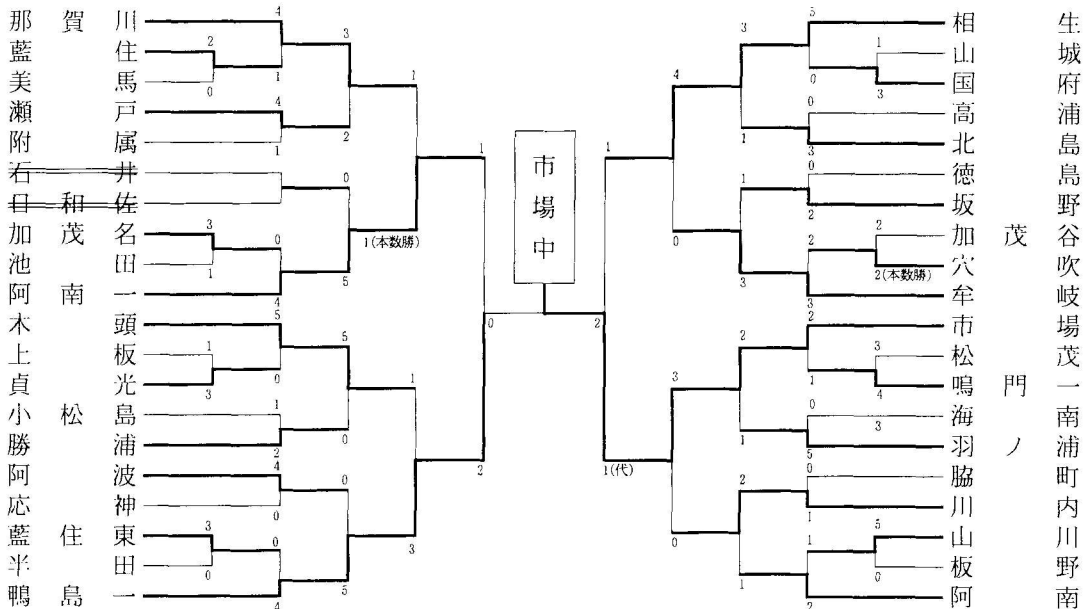
## < 小学生 >



< 中学校男子 >



< 中学校女子 >









# 吉田茂初の栄冠

## 平野を下し全日本出場

### 県剣道選手権

第八回県剣道選手権兼全日本選手権県予選は七日、鳴門武道館で二段から七段までの二十五人が参加して行われた。決勝は平野誠司六段と吉田茂生五段の県警

同士の争いとなり、吉田茂五段が延長の末、平野六段から下ウを奪って一本勝ちし、初の栄冠に輝いた。吉田茂五段は全日本選手権（11月3日・日本武道館）に県代表として出場する。

▽準々決勝  
吉田博（県警） コー  
平野（県警） メコーメ  
近藤（県警） メコー  
鈴木（刑務所） 白木  
（岩） 岩木

吉田茂（県警） メー  
▽準決勝  
平野（県警） メー 吉田博  
吉田茂（県警） メー 近藤  
▽決勝  
吉田茂（県警） ドー 平野



県警同士の決勝延長戦で平野六段に激しく攻め込む吉田茂五段（左）＝鳴門武道館



○…三度目の延長の1分過ぎ、激しいは競り合いから鮮やかな引きドウを決め、初の王位に就いた吉田茂

五段の写真。「出場メンバーはみんな強者ぞうい。今日はたまたま勝たせてもらった」と控えめながらも「全日本選手権出場は今年一番の目標だった。念願の勝利」とうれしそう。準決勝も三度の延長の末、近藤七段を破り、決勝でもその勢いを保持。兄の吉田博六段が一昨年、昨年と連勝し

ていただけに、弟として「今年こそ」の気迫があふれた。初の全日本選手権に向けて「過去三度、兄に付き添って大会の雰囲気をつかんできた。全力を出し切り、一つでも多く勝ちたい」。





# 全国高校総体

第4日

## 富岡東、2年連続3位

### 準決勝 宮崎北に本数負け

◇剣道  
 【男子団体】決勝  
 阿蘇 2-1 佐賀学園  
 (熊本) (佐野)  
 阿蘇は6年ぶりの復讐。  
 【男子個人】決勝  
 糸山 和也  
 長崎 三ツ木 謙  
 山崎 謙  
 【女子団体】準決勝  
 富岡東 2-1 沢  
 (徳島) (山形)  
 大坂 謙  
 一ツ木 関谷  
 西村 増子  
 坪井 鈴木 木初  
 坪井 代太郎  
 鎌田

▽同種決勝  
 宮崎北 2-1 富岡東  
 (宮崎) (徳島)  
 黒木 大坂  
 〇相継 ムコ 一ツ木  
 阿蘇 3-1 宮崎北  
 (阿蘇) (宮崎)  
 甲斐 一ツ木 賀川  
 田口 初 三ツ木 坪井  
 〇児玉 ムコ 坪井  
 〇岡本 結方  
 阿蘇は2年連続4度目の優勝。  
 【女子個人】決勝  
 熊本 結方  
 熊本市

## 「一番心に残る試合」

富岡東

二・三連続の3位。さすがの富岡東だった。圧巻だったのが準決勝の左沢(山形)戦。カギとみられていた大坂、一ツ木が最少失点に抑え、今大会全勝の中堅川がマン一本勝ちし、タイ。西村も一本で決め、大勝ち。しかし、(二)まで頑張った坪井が延長までか一本負け。決着は代表戦へ。これは、もちろん昨年のチャンピオン鎌田を持ってきた。息詰まる戦い。気迫十分で掛かってくる相手に、富岡東サイドも手を振りしめ、祈るまじに応援する。

残り1分前、坪井が相手のメン。これに審判員三人が同時に赤旗を挙げた。「よし」。普段は冷静な河田監督をはじめ、メンバを突き上げて喜びを爆発させた。興奮冷めやらない坪井。「背水の陣での勝負。信じた自分が(勝利)を信じた」。大勢専用バスで乗り入れ、入る強豪チームもある中、八人の乗りのバンで監督自らか運転して山梨入りした富岡東のメンバ。これでイター11年、全国選抜合戦、21年、全国選抜合戦が三度、ベスト8、ベスト4が各年度と輝かしい戦績を誇る。今回も部員十四人

試合後、沈み込む選手たち。これだけ手に汗握る試合の連続はなかった。一番心に残る大会やったこと。ねえ、いい言葉かけた監督だが、途中、審判員の判定に首をかしげる場面もあり「負けた気がしない」とやや悔しきも。

「一ツ木」みんな一緒だから、やって来れた。「賀川」良い監督、仲間巡り会えたおかげ。(西村)と互いにたえたい、そして最後は「長くも無くも、自分では法着を」けた。この日の正は「生れません」(坪井)。それぞれが熱い戦いの跡と涙光をみしめていた。(藤山)

## 衰えない技への研究心

「予選リーグ突破が目標。介巻(四)阿南市中大野町。今年で八回目。週六日の練習を休む」ことなく剣道一筋に励み、小中学校から連戦連勝、個人戦では四大会を



阿南一中心生、仁木進

を総ナメにできた。しかし「まだ足りない部分がたくさんある。相手の攻撃に対する返し技をもっと考えなければ」と技への研究心は衰えない。

日本中のえびすぐりの強豪選手と対戦した大会を振り返って「全国レベルが大きく分かった。全国の有名選手は技も多彩で確かに強い。でも技の切れやスピードでは決して負けていない」と自負する。次の目標は、個人戦での全国制覇だ。



第51回 国体 秋季大会

第 2 日



剣道少年女子2回戦・静岡対徳島 大将戦で2本勝ちし、意地を見せた徳島・坪井(富岡東高)。チームは2-1-3の接戦の末、惜敗した。大野町体育館

剣道

少年女子 初戦敗退

- 【少年女子】2回戦
- 静岡(選抜) 3-2 徳島(選抜)
- 山下 大坂
- 石川 芝
- 三谷 西
- 渡辺 西
- 松田 井

消極的な攻め悔やむ

少年女子

インターハイ3位の富岡東主体の剣道少年女子勢は、2回戦で静岡に2-1-3の惜敗。河田監督は「相手の粘りの前に、選手たちは自分たちの剣道ができず、弱気になりました。メンバーストイックには勝った相手だけに、残念」とうなだれた。

静岡は1回戦を制して波に乗っていた。「メンバーに硬さもあったのかもれない」と山田コーチが言うように、先ほつ、次ほつが連敗。後のない中堅戦は、

インターハイで活躍した賀川が8分30秒の長期戦を見て、悔しい」と目を伏せ、他のメンバーも早すぎる秋の終わりに唇をかみ締めていた。

勝敗は決したが、大将戦では坪井が気迫ある竹刀さばき。わずか1分10秒で二本勝ちしたが「みんな国体独特のルール(引き分けなし)。勝負が決まるまで延長)に戸惑いもあった。こ





## 編集後記

今回も和歌山の秋山先生はじめ、数多くの先生方より玉稿をお寄せいただき、誠にありがとうございます。今年四月には十三号を発行できるように、昨年十二月には原稿集めに入っていたのですが、編集者の事情により、例年よりもさらに遅れた発行になり、誠に申し訳ありません。来年度は、編集担当の任を略けて、四月発行に取り組む決意でありますので、よろしくお願いいたします。

剣道の大切さは人を通してしか伝わらない、と言われます。その意味においてこの『徳島の剣道』が果たすべき使命は多大なものがあると思います。この中には、剣道に情熱をかけられた自分の身近かな人のこと、また、名前だけは聞いたことのある人のこと、今まで名前さえも知らなかった人のこと、……徳島での剣道に関する情報が集約されていると確信します。

さらに、充実した『徳島の剣道』に成長するため、会員皆様の剣道・居合道に関する情報や口頃のお考えを事務局までお寄せ下さい。特に、今回から、掲載させていただきます「思い出の一枚」コーナーへの写真提供をお願いします。

### 『徳島の剣道』第十三号

#### 編集委員会

編集顧問

堀江幸夫	柏原浩	山田仁	寺西慶裕	大川功	上川資雄	中村稔裕	木原資裕
------	-----	-----	------	-----	------	------	------

### 『徳島の剣道』第13号

平成9年7月10日発行

編集・発行 徳島県剣道連盟

代表者 遠藤 美

〒772 徳島市中徳島町2丁目96

TEL/FAX 0886-52-2337

印刷 グランド印刷株式会社

徳島市方代町6丁目20-15

TEL 0886-22-8448 FAX 22-8418